

日本人の顔貌とアルコールパッチテスト反応とは関連するだろうか

栗原 久

東京福祉大学短期大学部

〒372-0831 伊勢崎市山王町2020-1

(2014年9月17日受付、2015年1月8日受理)

抄録: アルコールパッチテスト反応(発赤なし、やや発赤、著しく発赤)と日本人の顔貌の特徴(縄文系、弥生系)との関連について、255人の学生(男子53人、女子202人)を対象に検討した。顔貌は平均的日本人顔を中心に、縄文系、弥生系にほぼ正規分布的であった。アルコールパッチテストでは、男子53人のうち、29人(54.7%)が発赤なし、やや発赤が20人(37.7%)、顕著な発赤が4名(7.5%)であった。また女子202人のうち、発赤なしが122人(60.4%)、やや発赤が36人(17.3%)、著しい発赤が44人(21.8%)であった。アルコールパッチテスト反応と顔貌との関連では、男子において、相関係数が0.25以上であったのは眉(0.286)、頬骨(0.251)であり、-0.25以下は耳たぶ(-0.511)、口元(-0.282)、頭の縦横比(-0.324)であった。一方、女子では、いずれの項目において明確な相関性はみられなかった。これらの結果は、縄文人と人の顔貌の特徴から、アルコールの中間代謝物であるアセトアルデヒドの酸化に関与するアルデヒド脱水素酵素(ALDH-E2)の活性、つまりお酒を飲める・飲めないタイプを予測するのはかなり困難であることを示唆している。

(別刷請求先: 栗原 久)

キーワード: 日本人の顔貌、アルコールパッチテスト反応、旧モンゴロイド(縄文人)、新モンゴロイド(弥生人)

緒言

大学生の飲酒、特に新入生における一気飲みによる急性アルコール中毒で、毎年のような尊い命が失われている。さらに、飲酒運転・酒気帯び運転を初めてとする事件・事故、飲酒が原因となるや社会・家庭問題、医学的にみた健康障害も頻発している。

アルコール関連の問題への対策は、取り締まりの厳格化に加えて、アルコールの精神薬理作用およびそれに伴う行動変容について、飲酒者本人への指導はいうまでもなく、本来は飲酒経験のないはずの未成年者に対して、正しい知識の醸成と啓発が重要である。同時に、飲酒後の症状発現と体質との関係を知ることも、アルコール関連事故の防止に有効と考えられている(樋口, 1997; 浜島, 2002)。

アルコールの代謝は2段階で行われる(「アルコール代謝と肝」研究会, 1986; Ehrig et al., 1990)。第1段階は、アルコールそのものの代謝で、肝臓に存在するアルコール脱水素酵素(ADH)とミクロソームエタノール酸化系(MEOS)が中心となり、組織各部に存在するカタラーゼが一部関与してアルコールが酸化(脱水素)され、この代謝過程によってアセトアルデヒドが生成する。第2段階は、中間代謝産

物であるアセトアルデヒドの酸化(脱水素)で、主に肝臓に存在するアルデヒド脱水素酵素(ALDH)の働きによって、アセトアルデヒドから酢酸およびアセチル-CoAが生成される。酢酸あるいはアセチル-CoAは各種酵素の働きで、最終的に水と二酸化炭素に分解される。

言うまでもなく、飲酒後の酔いは、アルコールによる大脳機能の抑制に起因する思考・感覚・運動機能の低下である。しかし、アルコールに対する強弱の一般的認識は、アセトアルデヒドによって引き起こされる発赤(赤面)、悪酔い(悪心・嘔吐)、二日酔いの程度で判断されることが多い。

アセトアルデヒドの代謝の主要酵素であるALDH-E2は517個のアミノ酸から構成されるたんぱく質で、このうち487番目のアミノ酸を決定する核酸塩基配列の違いにより、3つの遺伝子多型に分かれる(原田, 2001a)。遺伝子対が両方ともグアニンであるGG型(対応するアミノ酸は両方ともグルタミン)、グアニンの1つがアデニンに変化したAG型(対応するアミノ酸は一方がリジン、他方がグルタミン)、2つともアデニンになったAA型(対応するアミノ酸は両方がリジン)である。ALDH-E2のアセトアルデヒド代謝活性は、GG型が高活性タイプであるのに対して、

AG型は低活性タイプで高活性タイプの約1/16の代謝能力しかなく、AA型は代謝能力をほとんど失っている無活性タイプである。ALDH活性が低い人が飲酒すると、アルコールから生成したアセトアルデヒドが分解され難く、体内に長く留まることになる。そのため、ALDH-E2(低活性タイプ)やALDH-E2(無活性タイプ)の人は、飲酒後に赤面になり、悪酔いや二日酔いを起こしやすく、一般的に酒に弱い、あるいは飲めないタイプということになる(原田, 1999, 2001a, 2001b)。

ALDH-E2の遺伝子多型の簡易検査法にアルコールパッチテストがある(今井, 1992; 竹下・森本, 2000)。アルコールをしみ込ませたパッチテープを皮膚に貼付すると、皮膚にあるカタラーゼによってアルコールが酸化され、アセトアルデヒドが生成する。皮膚にもALDH-E2が存在するので、発赤の有無およびその程度によってALDH-E2が高活性、低活性および無活性であると判定できる。

ALDH-E2の遺伝子多型は生まれつきの体質であり、人種によってその出現率は異なり、ALDH-E2(低活性タイプ)やALDH-E2(無活性タイプ)が存在するのはモンゴロイドだけにみられる特徴である(尾木, 1996)。日本人は基本的にはモンゴロイドに分類されるが、高活性タイプが約60%、低活性タイプが35%、無活性タイプが約5%とされている。その主要ルーツは旧モンゴロイド(縄文系とすることが多い)と新モンゴロイド(弥生系とすることが多い)にあると考えられている(馬場, 1999; 馬場・原島, 1999)。すなわち、アフリカを出発してアジアに進出してきた新人類(ホモ・サピエンス)が、最初に日本に到着したのは8~9万年前であったとされている。このときの新人類はALDH-E2高活性タイプの旧モンゴロイド系で、数万年の間に日本各地に分布した(以後、縄文人とする)。この間の2.5~3万年前、中国南部において、遺伝子の突然変異により核酸塩基がグアニンからアデニンに変わったALDH-E2低活性タイプや無活性タイプが出現し、その子孫である新モンゴロイド系が約3,000年前に日本に渡来し(以後、弥生人とする)、先住していた縄文人の居住地域に進出した。それ以降、縄文人および弥生人との混血によって現在の日本人になったが(中村, 2006)、顔貌やALDH-E2活性には、現在でも縄文人と弥生人の特徴が、地域に残っていると考えられている(原田, 2001b; 斎藤, 2006; 塚田, 2007)。つまり、朝鮮半島から渡来した弥生人が北九州、瀬戸内海、近畿地方へと進出してきたことによって、縄文人は日本の南西部や東北部に追いやられたと考えられている。そのため、日本における飲酒量およびALDH-E2活性の分布には偏りがあり、縄文人の特徴であるALDH-E2高活性タイプの人は中部、近畿、北陸、北九州など西日本を中心に少なく、

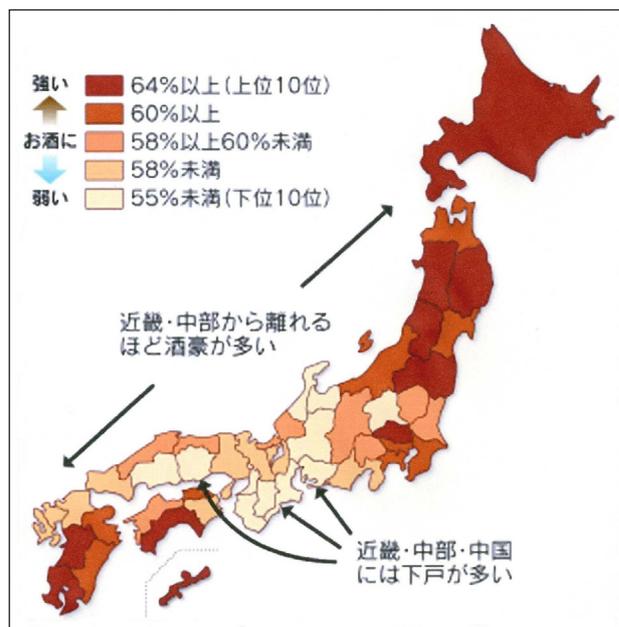


図1. 日本におけるALDH-E2高活性タイプの出現率 (原田勝二, 2001bより)

東西に向かうにつれて増加し、東北、関東、南九州、沖縄で多くなる傾向がみられるという(原田, 2001b; 中村, 2011)(図1)。

日本人の顔貌についても、縄文人や弥生人の特徴を受け継いでいることは間違いなく、特に薩摩隼人や南西諸島の居住者は縄文人の、北九州から近畿地方では、弥生人の特徴がそれぞれ強いといわれている。しかし、人口移動が激しい昨今では、人々の身体的特徴や地域特性が次第に薄れつつあり、遺伝子の交雑も大きくなっているのが現状である。現在の日本人において、縄文人や弥生人の顔貌の特徴とALDH-E2活性の高低による飲酒後の発赤の有無との関係については、ほとんど検討が行われていない。

本研究は、アルコールパッチテストによるALDH-E2の遺伝子多型の評価結果と、縄文人および弥生人の顔貌の特徴に関する自己評価との相関性について検討することを目的としている。

研究対象と方法

対象者

対象者は、東京都内および北関東地方にキャンパスを持つA大学およびA大学短期大学部の1~3年生(男子53名、女子202名)で、その出身地は関東地方が多かったが、沖縄県~北海道まで分布していた。

調査方法

調査は201X年11月に実施した。

調査対象の学生に、馬場(1999)に基づいて独自に作成した縄文人および弥生人の顔貌の特徴に関する質問紙(表1)を手渡し、15項目の質問に対してどちらに近いか、また、質問紙に印刷された顔サンプルのどれに類似しているか、事前の説明は行わずに、任意の自己評価によって回答してもらった。

質問紙に対する回答時間内に、後述するアルコールパッチテストを実施し、皮膚の発赤の有無を観察した。さらに、回答用紙を提出する際に頭のサイズを測定し、縦(前後)および横(左右)の長さの比を算出した。

アルコールパッチテスト

アルコールパッチテストは、栗原(2000)の手順と判定方法に従って行った。カットバンの脱脂綿部分に消毒用エタノール(約70重量%)を数滴垂らし、前腕の肘関節部の皮膚に貼ってもらった。7分後にカットバンを剥がして発赤の

程度を観察し、引き続いて10分後に、発赤の程度を再観察した。

発赤の程度は、発赤なし(1点)、やや発赤(10分後に発赤が強まる:2点)、顕著な発赤(3点)の3段階で評価した。

説明と同意、個人情報の保護

対象者には、本研究の趣旨、結果の評価および論文や学会発表の際の利用、さらに個人情報の取り扱い方法を記載した文章を質問紙と同時に配布し、また、回収された回答用紙の保管と研究がまとまった段階での破棄などについて、口頭による補足説明を行い、調査協力の同意を得た。

なお、本論文の作成に当たり、関係者以外には得られた情報から個人の特長ができないよう、可能な限り配慮した。

統計処理

15項目の質問への回答結果、頭のサイズ(縦と横の比)、顔サンプルとの類似性とアルコールパッチテスト結果との相関性を検討した。質問に対する回答では、左側(縄文

表1. 調査対象者に配布した質問紙

回答・記録用紙

記入日 年 月 日

氏名 _____ 年齢 _____ 歳 性別 男 女

顔の形のチェックリスト (近い方を丸で囲んでください)

顔形の概要	四角/長方形	丸/楕円
造作の様構成	直線的	曲線的
プロフィール	凹凸が顕著	なめらか
影りの深さ	立体的	平坦
眉	太い/濃い/直線	細い/薄い/半円
眉と目の間隔	接近している	離れている
髪・頭髮	濃い/多い	薄い/少ない
瞳	二重	一重
頬骨	小さい	大きい
耳たぶ	大きい/福耳	小さい/貧乏耳
耳垢	湿る/猫耳垢	乾く/粉耳垢
鼻骨	広い/高い	狭い/低い
唇	厚い	薄い
歯	小さい	大きい
口元	引き締る	出っぱり気味

該当個数: 該当個数:

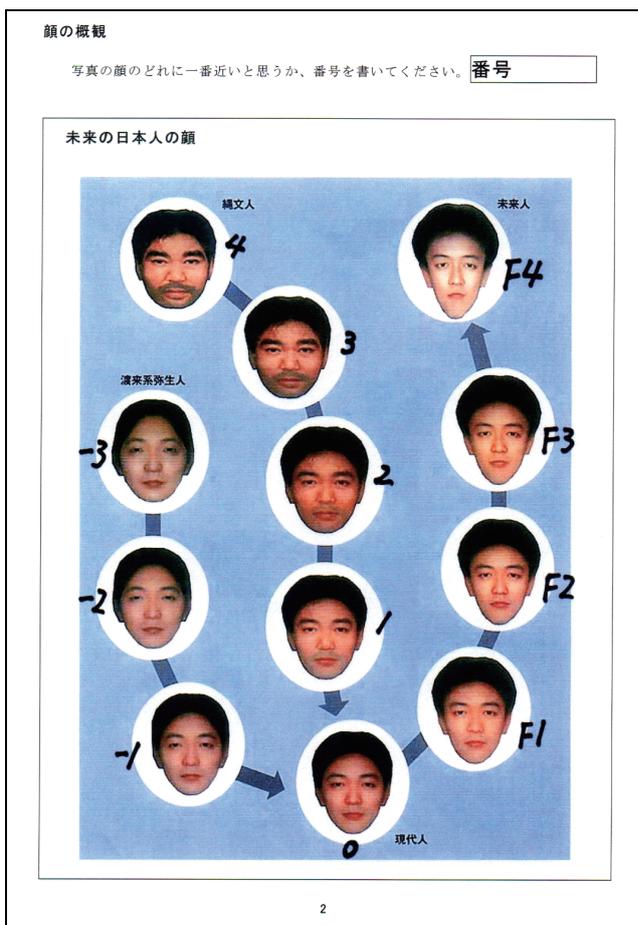
アルコールパッチテスト結果

発赤なし やや発赤 著しい発赤

頭のサイズ

縦(前後) _____ cm 横(左右) _____ cm

1



チェックリストは馬場(1999)のリストを基に作成。顔貌のCGは東京大学工学部原島研究室より。

人の特徴)に対しては1点、右側(弥生人の特徴)に対しては2点を与えた。顔サンプルについては、現代日本人の平均顔を0点とし、縄文人のウエイトが高い方にはプラス点を、弥生人のウエイトが高い方にはマイナス点を与えた。未来形については、現在人と同じ0点とした。

相関係数が0.25以上の場合は正相関傾向あり、-0.25以下の場合は逆相関傾向ありとした。相関係数の絶対値が0.25未満の場合は、相関性が低いとした。

結果

アルコールパッチテストの結果

表2は、アルコールパッチテストの結果である。男子53人のうち、29人(54.7%)が発赤なし、やや発赤が20人(37.7%)、顕著な発赤が4名(7.5%)であった。また女子202人のうち、発赤なしが122人(60.4%)、やや発赤が36人(17.3%)、顕著な発赤が44人(21.8%)であった。

顔貌に関する回答の結果

表3は、15項目の質問に対して縄文人の特徴を回答した割合である。男子では、眉と目の間隔、髭・頭髪、頬骨、口元では60%以上、逆に、顔型の概要、プロフィール、耳垢、歯では40%以下の回答率であった。女子では、眉、髭・頭髪、瞼では60%以上、顔形の概要、造作の線構成、プロフィール、彫りの深さ、鼻骨、歯では40%以下の回答率で、男子と女子の傾向は似ていた。

頭の形状

表4は、頭の形状(縦横の比)の分布をまとめたものである。男子の方が女子より、短頭型および長頭型の分布が広い傾向がみられた。

表2. アルコールパッチテストにおける発赤の出現率

	男子	女子	合計
発赤なし	29 (54.7)	122 (60.4)	151 (59.2)
やや発赤	20 (37.7)	36 (17.8)	56 (22.0)
顕著な発赤	4 (7.5)	44 (21.8)	48 (18.8)

括弧内は%。

表3. 顔貌に関する質問に対して縄文人の特徴を回答した割合

	顔形の概要	造作の線構成	プロフィール	彫りの深さ	眉	眉と目の間隔	髭・頭髪	瞼	頬骨	耳たぶ	耳垢	鼻骨	唇	歯	口元
男子(N=53)	31.0	46.9	34.4	40.6	50.0	68.8	68.8	56.3	62.5	40.6	31.3	46.9	59.4	34.4	78.1
女子(N=202)	19.8	29.9	15.3	23.2	65.0	51.4	73.4	70.1	53.1	41.2	42.4	19.2	52.0	37.9	50.8

顔写真サンプルと類似性に関する回答

表5は、顔写真サンプルとの類似性に関する回答結果である。0点が現代日本人の平均顔とされているもので、大きいほど縄文人、小さいほど弥生人に近いことになる。F1~F3は、予測されている日本人の未来顔である。

回答では、現代日本人の平均顔を中心に、縄文人および弥生人がほぼ正規分布で分布しており、未来形の回答もあった。

顔貌とアルコールパッチテストとの相関性

表6は、顔貌の特徴とアルコールパッチテスト結果との相関係数である。男子では、眉、頬骨で相関係数0.25以上の正相関傾向が、耳たぶ、口元、頭の縦横比で-0.25以下の逆相関がみられた。それ以外の項目では、相関性は低かった。

一方、女子では、いずれの項目においても、明確な相関性はみられなかった。

表4. 頭の形状(縦横の比の分布)

	1.00-1.10	1.11-1.20	1.21-1.30	1.31-1.40
男子(N=53)	17 (32.1)	25 (47.2)	9 (17.0)	2 (3.8)
女子(N=202)	36 (17.8)	153 (75.7)	13 (6.4)	0 (0.0)

括弧内は%。

表5. 顔写真サンプルとの類似性の分布

	男子(N=53)	女子(N=202)
4	0 (0.0)	4 (2.0)
3	5 (9.4)	15 (7.4)
2	7 (13.2)	57 (28.2)
1	8 (15.1)	22 (10.9)
0	12 (22.6)	34 (16.8)
-1	11 (20.8)	27 (13.4)
-2	4 (7.5)	24 (11.9)
-3	0 (0)	54 (26.7)
F1	5 (9.4)	12 (5.9)
F2	0 (0.0)	2 (1.0)
F3	1 (1.9)	0 (0.0)

括弧内は%。顔写真サンプルは表1参照。

表6. 顔貌の特徴とアルコールパッチテスト結果との相関性

	顔形の概要	造作の線構成	プロフィール	彫りの深さ	眉	眉と目の間隔	髭・頭髮	臉	頬骨	耳たぶ	耳垢	鼻骨	唇	歯	口元	縄文／弥生差	頭の形状	写真
男子 (N=53)	-0.035	-0.113	-0.091	0.010	<u>0.286</u>	-0.186	0.035	0.148	<u>0.251</u>	<u>-0.511</u>	0.066	0.003	0.094	-0.091	<u>-0.282</u>	-0.028	<u>-0.324</u>	0.009
女子 (N=202)	0.113	0.070	0.165	0.004	0.113	0.179	0.048	0.080	0.012	0.083	-0.109	-0.032	-0.046	-0.095	-0.035	-0.140	0.014	-0.160

一重下線は相関係数が0.25以上または-0.25以下、二重下線は相関係数が-0.50以下を示す。

考察

アルコールパッチテストについてはすでに多くの実施経験があり、発赤、頭痛・悪心・嘔吐といった悪酔い、および悪酔いの原因物質となる、アルコールの中間代謝産物であるアセトアルデヒドの酸化に関与する主要酵素であるALDH-E2の活性を評価する際に、比較的簡便に利用できることが確認されている(樋口, 1997; 栗原, 2000; 竹下・森本, 2000)。アルコールパッチテストにおける発赤なし、やや発赤、顕著な発赤は、それぞれALDH-E2高活性、低活性および無活性タイプとなる(樋口, 1997)。

日本人のALDH-E2活性の割合は、高活性タイプ(飲酒後の発赤なし)が約60%であり、低活性型(発赤)が約40%であるとされている。さらに、低活性型の約1/4(全体の約10%)は、ALDH-E2活性がほとんどなく、飲酒後に顕著な発赤を呈するとされている(竹下・森本, 2000; 浜島, 2002)。本調査結果においても発赤の出現率は、日本人における飲酒後の発赤なしと発赤の比がほぼ6:4で従来の数値と一致しており、今回の実験条件が妥当で、結果も信頼できるといえる。しかし、女子では、やや発赤より顕著な発赤の割合が高かった。この結果については、女子は過大に判定する傾向があるためと思われる。

すでに述べたように、縄文人の特徴を有する人は高活性ALDH-E2タイプの割合が高く、弥生人の特徴を有する人は低活性ALDH-E2タイプや無活性ALDH-E2タイプの割合が高いとされている(尾木, 1996)。また、日本人の顔貌についても、縄文人と弥生人の特徴を受け継いでいるとされている(原田, 2001; 斎藤, 2006; 塚田, 2007)。もし、日本人のなかに縄文人と弥生人の遺伝的特徴がそのまま受け継がれて、アルコール代謝や顔貌に反映されているのであれば、ALDH-E2活性を反映するアルコールパッチテスト反応と顔貌の特徴との間には正の相関性があり、頭の縦横サイズ比とは逆相関性を示すことになる。逆に、両者の混血が進んでいるのであれば相関性は低いことになると予想される。

本調査で得られた顔貌に関する自己評価結果をみると、平均的日本人を中心に、縄文人と弥生人の特徴がほぼ正規

分布に近いパターンで分散していた。しかし、縄文人と弥生人の特徴のどちらに近いかの質問に対する回答結果とアルコールパッチテスト結果との相関性はまちまちであった。すなわち、男子では、眉、頬骨で正相関傾向が、耳たぶ、口元、頭の縦横比で逆相関傾向がみられ、女子では、明確な相関性を示す項目はなかった。頭の形状(縦横比)は実測された客観的数値であるが、男子で逆相関傾向があり、長頭型は発赤、短頭型は発赤しない人が多かった。しかし、これらの項目についても女子では相関性がみられなかった。このような結果が得られた背景には、顔貌の認識に対しては個人差が大きく、一定の傾向が得にくいことが挙げられる。加えて、顔貌から飲酒後の発赤の有無、つまり飲めるタイプと飲めないタイプを予想することは難しいことを示している。

日本における飲酒量およびALDH-E2活性の分布には地域によって偏りがあり、高活性タイプの人は中部、近畿、北陸、北九州など西日本を中心に少なく、東西に向かうにつれて増加し、東北、関東、南九州、沖縄で多くなる傾向がみられ(原田, 2001; 中村, 2011)、飲酒量の多い地域では縄文人に特徴的な顔貌を持つ人が多いといわれてきた。しかし、本結果のように、顔貌とアルコールパッチテストとの間に明確な相関性が把握できなかったことは、ALDH-E2活性の多型や顔貌と関連する遺伝子が相当交雑していることを示している。その背景には、弥生人が渡来してから現在までの2000年余の間に日本国内でかなりの人口移動が行われ、縄文人と弥生人の混血が進んでいる可能性がある。この点についてさらに確証を得るためには、調査対象者を増やし、飲酒量や赤面の有無などの地域差を含めた総合的な検討が必要である。

本研究結果からは、顔貌から飲酒後の赤面の有無、すなわち飲めるタイプ・飲めないタイプの類推は、明確にはできなかった。しかし、男子学生では正相関または逆相関を示す項目がいくつかあり、例数を増やしてより綿密な検討を行えば、顔貌のどこかにアルコール代謝の特徴と関連する相違点がある可能性は残されている。また、今回の実験では顔貌について、頭の形状(前後と左右の長さの比)以外

は自己申告に頼っていたため、顔貌の自己判定にバイアスがかかり、特に男子学生より女子がある学生において強い可能性がある。今後は、客観的で分かりやすい判定基準を作成して、顔貌とアルコール代謝の関連についての検討を進めていきたい。

結論

アルコールパッチテスト反応によるアルデヒド脱水素酵素(ALDH-E2)活性の評価結果と顔貌の特徴との関係について検討した。男子では、顔貌の一部の特徴とアルコールパッチテスト反応と正相関傾向(眉、頬骨)あるいは逆相関傾向(耳たぶ、口元、頭の形)がみられたが、女子ではいずれの項目でも相関性は把握されなかった。これらの結果は、縄文人と弥生人の顔貌の特徴から、お酒を飲めるタイプと飲めないタイプを予測するのはかなり難しいことを示している。

文献

- 「アルコール代謝と肝」研究会編(1986): アルコール代謝と肝. 東洋書店, 東京.
- 馬場悠男(1999): 大顔展 縄文顔と弥生顔.
<http://www.kahaku.go.jp/special/past/kao-ten/kao/jomon-fhtml/> (2014.8.15 検索)
- 馬場悠男・原島 博(1999): 大顔展 未来の日本人の顔.
<http://www.kahaku.go.jp/special/past/kao-ten/mirai/mirai-fhtml/> (2014.8.15 検索)
- Ehrig, T., Bosron, W.F. and Li, T.K. (1990) Alcohol and aldehyde dehydrogenase. *Alcohol Alcohol.* **25**, 105-116.
- 浜島信之(2002): 遺伝子予防医学. *現代医学* **50**, 139-142.
- 原田勝二(1999): 飲酒行動と遺伝子. *公衆衛生学雑誌* **63**, 234-237.
- 原田勝二(2001a): 飲酒様態に關与する遺伝子情報. *醸協* **86** (4), 131-141
- 原田勝二(2001b): アルコール代謝酵素の分類と多型—日本人における特異性. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* **36**, 85-106.
- 樋口 進(1997): 特集 アルコール関連障害とアルコール依存症: エタノールパッチテストの意義. *日本臨牀* **55**, 582-587.
- 今井めぐみ(1992): アルコールの酸化とアルコールパッチテスト. *化学と教育* **40**, 801.
- 今野美季・田中 隆・柳 元和ら(1995): 日本公衆衛生学会総会抄録集 **54**, 384.
- 栗原 久(2000): アルコール・パッチ・シール『アルパッチ』取扱い・解説書. 少年写真新聞社, 東京.
- 中村忠之(2006): 縄文への道. <http://jomon-juku.com/> (2014.8.15 検索)
- 中村貴子(2011): お酒やコーヒーなど日常的飲み物と日本人の遺伝子. *筑波大学技術報告* **31**, 33-38.
- 尾木恵一(1996): 分子人類学と日本人の起源. *掌華房*, 東京, pp120-186.
- 斎藤成也編(2006): 絵でわかる人類の進化. 講談社, 東京, pp169-189.
- 竹下達也・森本兼三(2000): ALDH2 遺伝子型とアルコールパッチテスト反応との関連性. *産業衛生学雑誌* **42**, 427.
- 塚田三香子・畠山幸子(2007): アセトアルデヒド脱水素酵素遺伝子型と秋田県住民における飲酒行動との関連. *聖霊女子短期大学紀要* **35**, 40-48.

Are There any Correlations between the Face Profiles and the Results of Ethanol Patch Test in Japanese?

Hisashi KURIBARA

Junior College, Tokyo University of Social Welfare,
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : The purpose of this study was to assess the relationship between the face profiles of Japanese (Jomon type and Yayoi type) and the results of ethanol patch test (non flash, mild flash and flash) in university students (53 males and 202 females). The proportions of non flash and mild flash + flash (male: 54.7% and 45.3%, respectively, female: 60.4% and 59.6%, respectively) were almost the same as the standard proportion. In males, although the correlation coefficients between the results of ethanol patch test and face profiles were greater than 0.25 in the items of eyebrow (0.286) and cheekbone (0.251), and smaller than -0.25 in earlobe (-0.511), shape of mouth (-0.282) and ratio of longitude and side of head (-0.324). However, the absolute values of correlation coefficient for other items were smaller than 0.25 in both males and females. These results suggest that the prediction of acetaldehyde dehydrogenase (ALDH-E2) activity is hard from the face profiles, namely Jomon type and Yayoi type.

(Reprint request should be sent to Hisashi Kuribara)

Key words : Face profiles of Japanese, Alcohol patch test, Old Mongoloid (Jomon type), Neo Mongoloid (Yayoi type)

社会的ネットワーク、社会的サポートと高齢者の健康状態に関する研究 — 高齢者の主観的健康感と慢性疾患の指標を用いて —

金 貞任^{*1}・武川正吾^{*2}・平岡公一^{*3}・中田知生^{*4}・和気康太^{*5}・和気純子^{*6}

*1 東京福祉大学 社会福祉学部(伊勢崎キャンパス)
〒372-0831 伊勢崎市山王町 2020-1

*2 東京大学大学院 人文社会系研究科(本郷キャンパス)
〒113-8654 文京区本郷7-3-1

*3 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

*4 北星学院大学 社会福祉学部
〒004-8631 北海道札幌市厚別区大谷地西2丁目3の1

*5 明治学院大学 社会学部
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

*6 首都大学東京 社会行動学専攻(南大沢キャンパス)
〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1

(2015年1月10日受付、2015年3月10日受理)

抄録: 本研究では、社会的ネットワーク、社会的サポートと高齢者の健康状態との関連性を明らかにすることを目的とした。分析においては、上述の課題を明らかにするために、親族ネットワーク、親族からのサポートと非親族ネットワーク、非親族からのサポートがそれぞれ高齢者の健康状態に対して負の関連性があるかどうかを検討したが、対象者の性別にサンプルを分けて分析を進めた。使用したデータは、2005年3月に実施した個票データである。調査対象者は、65歳以上80歳未満の男女1,350人であり、訪問面接調査法によって行い、有効なケースは1,053票(回収率78%)であり、これらが本分析の対象となった。高齢者の健康状態に関してロジスティクス回帰分析の結果、親族ネットワークと非親族ネットワークは、男女高齢者の主観的健康感と慢性疾患に対してそれぞれ有効な関連があった。その一方で、親族ネットワークからの情緒的サポートの受領は、男性高齢者のみ主観的健康感と慢性疾患に対して負の関連性があり、親族ネットワークからの手段的サポートの受領は、男性高齢者のみ主観的健康感と慢性疾患に対して正の関連があることが明らかにされた。本研究結果は、高齢者の健康維持のための介護予防対策を作成する際に、有効に活用されると考えられる。

(別刷請求先: 金 貞任)

キーワード: 健康状態、高齢者、社会的ネットワークと社会的サポート、性差

緒言

少子高齢社会を迎え、高齢者はいかにして日常生活を維持し、健康に暮らすことができるかが重要な課題となっている。高齢者は、親族や非親族など様々な社会関係を取り結び、多様なサポートを授受しながら日常生活を送っており、それらが高齢者の健康状態に重要な役割を果たしている。過去30年間の健康と疾病の原因に関する研究では、社会環境資源の社会的ネットワークと社会的サポートに着目し、それらが健康状態に効果がある(岸ら, 2004; Cohen and Janicki-Deverts, 2009)ことが報告された。Berkman and Glass (2000)も、社会的ネットワークと社会的サポートが多

様な理由で身体的・精神的健康に影響を与えることを示唆した。高齢者は、定年退職、配偶者や友人の死などのライフイベントにより社会的に孤立するリスクが高く(Pillemer and Glasgow, 2000; Ashida et al. 2009)、不健康になるリスクも高いと考えられる。しかし、加齢に伴い制限された社会的ネットワークと社会的サポートを適切に利用すれば、良好な健康状態を維持することが可能となるであろう。

健康状態に関する社会的ネットワークと社会的サポートに着目した研究では、社会的ネットワークのサイズと形態、社会的サポートの形態と量に着目しており、それぞれが高齢者の健康状態に対して良い影響を与えることが示唆された(Baumeister and Sommer, 1997; Sugisawa et al., 2002;

Beland et al., 2005; Cohen and Janicki-Deverts, 2009; Seeman et al., 2010)。その一方で、社会的ネットワーク、社会的サポートと高齢者の健康状態の負の側面に着目した研究は少なく (Schwartz et al., 1992; Okamoto and Tanaka, 2004; Wen et al., 2005; Cohen and Janicki-Deverts, 2009)、まだ十分な検討が行われているとは言い難い。さらに、社会的ネットワークと社会的サポートの形態に関して、家族、友人や隣人 (Sugisawa et al., 2002) など具体的に分類して捉える傾向があり、社会的ネットワークの結びつきの構造として親族と非親族の比較に注目した研究が少ない。その原因の一つとして、研究分野により重視する視点が異なり、測定方法が異なるなど完全な合意に至っていない (野口, 1991; Wen et al., 2005) ことが挙げられる。

社会的ネットワークに関して、非親族ネットワークのほうが親族ネットワークよりも、当該個人と類似した趣味の人々から構成される可能性が高く、ストレスフルな状況に適切に対応が可能であり、良好な健康状態を維持することが推測される。しかし、非親族からの手段的サポートの受領は、自分の都合の良し悪しに関わらず相手のニーズに応じて留守番などを提供する必要がある、それが健康状態を悪化させる可能性があるだろう。

その一方で、親族ネットワークと親族からの情緒的サポートは、義務や責任感により結ばれた関係であり、そこから生じる種々のトラブルの有無に関係なく密接に付き合いが必要であり、健康状態に悪い影響を及ぼすことが推測される。他方で、親族からの病気の時の介護と留守番など義務や責任感によって提供される手段的サポートは、自分のニーズに応じて臨機応変に受領できるという安心感をもたらし、それが健康状態を良い方向に変化させる可能性がある。

このような議論を踏まえて、本研究では、社会的ネットワーク、社会的サポートと高齢者の健康状態との関連性を明らかにすることを目的とした。分析においては、上述の課題を明らかにするために、親族ネットワーク、親族からのサポートと非親族ネットワーク、非親族からのサポートがそれぞれ高齢者の健康状態に対して負の関連性があるかどうかを検討したが、対象者の性別にサンプルを分けて分析を進めた。

本研究では、先行研究の議論に基づき、社会的ネットワーク、社会的サポートと高齢者の健康状態について以下の3つの仮説を設定した。第1:非親族ネットワークは高齢者の健康状態と有意な正の関連性があるが、親族ネットワークは高齢者の健康状態と有意な正の関連性がない。第2:親族ネットワークによる情緒的サポートの受領は、高齢者の健康状態と有意な負の関連性があるが、非親族ネットワークによる情緒的サポートの受領は高齢者の健康状態と有意な負の関連性がない。第3:親族ネットワークに

よる手段的サポートの受領は、高齢者の健康状態と有意な正の関連性があるが、非親族ネットワークによる手段的サポートの受領は、高齢者の健康状態と有意な正の関連性がない。

データと分析方法

1. 使用データ

本研究で用いたデータは、2005年3月に実施された「高齢者の生活に関する意識調査」の個票データである^{注1)}。調査地域は、層化2段抽出法によって全国を10地区に分類し、100地点から抽出した。調査対象者は、65歳以上80歳未満の男女1,350人であり、訪問面接調査法によってデータを収集した。有効ケースは1,053票(回収率78%)であり、これらが本分析の対象となった。

有効ケースにおいては、男性が49%を占めた。世帯構成では、夫婦のみの割合が男女それぞれ47%と33%を占め、一人暮らしは男性が7%、女性が16%であった。2005年国勢調査によると、性別では男性高齢者が42%、女性高齢者が58%であり、一人暮らしは、男性高齢者が9%、女性高齢者が19%であった(総務省, 2007)。高齢者の性別と世帯構成に関して、本研究と国勢調査のデータを比べるとサンプルに偏りが少ないので、本研究で用いるデータの外的因子の影響は問題にならないと考えた。

2. 分析方法

2-1. 変数

従属変数としての健康状態の測定には、自己評価による主観的測定と医師などの診断による客観的測定があり、これらは死亡とも相関があることが知られている (Kim et al., 2008)。そこで本研究では、先行研究を踏まえ主観的健康感と慢性疾患の指標を用いた。主観的健康感に関する指標は、1項目、5選択肢(「とてもよい」から「悪い」)から1つを選ぶ形式である。サンプル全体の構成をみると、「よい」と回答したものは9.5%、「悪い」が5.0%にすぎず、「まあよい」が22.5%、「普通」が40.6%、「あまりよくない」が22.1%、無回答が0.2%であった。本研究では、主観的健康感が「とてもよい」、「まあよい」、「普通」を1、「あまりよくない」、「悪い」を0とする2値変数を用いた。慢性疾患に関する変数は、18個(心臓疾患、脳血管疾患など)の慢性疾患について、現在医師から診断された疾患が1つでも「ある」は1、「なし」を0とする2値変数を用いた。

独立変数は、「社会的ネットワーク」と「社会的サポート」である。社会的ネットワークは、親族ネットワークと非親族ネットワークとに分けた。親族ネットワークの形態は、別居親族形態に該当する項目がなかったので同居家族形

態のみ用いた。同居家族は、「未婚の子どもと同居」を0、「1人暮らし」、「夫婦のみ同居」、「既婚者と同居」がそれぞれ1となるダミー変数を用いた。非親族ネットワークの形態は、「近所付き合いの頻度」と「家族以外の者との会食の頻度」から把握し、それぞれ7段階尺度で点数化した（「ほとんど毎日」=7点から「ほとんどしない」=1点）。

社会的サポートは、情緒的サポートの受領と手段的サポートの受領をそれぞれ測定した。なお、情緒的サポートと手段的サポートの提供に関する変数を用いなかったのは、健康状態が良好ではない高齢者はサポートの提供が困難であると考えたのである。

情緒的サポートの受領は、4項目「心配ごとや悩みを聞いてくれる人」など、2つの選択肢を点数化し（「いる」=1点、「いない」=0点）、それらの4項目を合計得点化した。手段的サポートの受領は、4項目（「数日間の看病や世話をしてくれる人」など）、2つの選択肢を点数化し（「いる」=1点、「いない」=0点）、それらの4項目を合計得点化した。情緒的サポートの受領と手段的サポートの受領は、親族と非親族からなる。親族の形態は、同居家族と非同居の親族（別居子ときょうだい・親戚の2項目の合計（得点））からそれぞれ把握した。非親族は、1項目（近隣と友人の2項目を合計得点）から把握した。隣人と友人を合計得点化したのは、親族ネットワークの同居家族と非同居の親族からの情緒的・手段的サポートの受領に比べ、それぞれの手段的サポートの受領の占める割合が非常に低かったからである。

コントロール変数は、個人の属性を示す年齢と学歴から構成されている。年齢は、「前期高齢者」を1、「後期高齢者」を0となるダミー変数を用いた。学歴は、最終的に教育年数（「7:小学校」、「9:中学校」、「12:高校」、「14:専門学校・

短期大学」、「16:大学」、「18=大学院以上」）を用いた。

分析モデルは、変数間の関係をモデル化した二項ロジスティック回帰分析を使用した。

2-2. 分析方法

はじめに、男女別に社会的ネットワークと社会的サポートに関する諸変数と、主観的健康感と慢性疾患の変数間の関連についてクロス集計表で確認した。次に、男女別に個人属性をコントロールした上で、社会的ネットワークと社会的サポートの諸変数が及ぼす独立した関連を明らかにするため、高齢者の健康状態を被説明変数とするロジスティック回帰分析を行った。その際には、①年齢と学歴をコントロールした上で、親族ネットワークと非親族ネットワークをそれぞれ投入した（モデル1）。②モデル1に情緒的サポートの受領と手段的サポートの受領を同時に投入して、それらが健康状態にどのくらい影響を及ぼすのかについて分析を行った（モデル2）。

統計解析ソフトは、SPSS22.0を用いて分析を進めた。

3. 個人情報の保護

同研究で利用した個票データについては、個人を具体的に特定する情報は含まれておらず、情報の流出の問題もなく、倫理的問題は生じなかった。

結果

1. 社会的ネットワーク・サポートと健康状態の分布

表1は、二項ロジスティック回帰分析に使用された変数の記述統計表である。

表1. 社会的ネットワーク・サポートの基本統計量

	男 性				女 性				備 考
	N	最小値	最大値	平均値 S.D.	N	最小値	最大値	平均値 S.D.	
性									1:男性、2:女性
主観的健康感ダミー(良い)	516	0.00	1.00	.74 .44	535	0.00	1.00	.72 .45	
慢性疾患ダミー(有)	513	0.00	1.00	.76 .43	531	0.00	1.00	.72 .45	
年齢ダミー(前期高齢者)	517	0.00	1.00	.75 .43	536	0.00	1.00	.71 .45	
学歴	517	6.00	18.00	11.15 2.84	536	6.00	17.00	10.24 2.28	6:小学校~, 18:大学院
世帯構成ダミー									
ひとり暮らしダミー	517	0.00	1.00	.07 .26	536	0.00	1.00	.16 .37	
夫婦のみ暮らしダミー	517	0.00	1.00	.47 .50	536	0.00	1.00	.33 .47	
既婚者と同居ダミー	517	0.00	1.00	.21 .41	536	0.00	1.00	.33 .47	
近所付き合い頻度	504	0.00	6.00	3.37 2.27	527	0.00	6.00	3.98 2.02	1:ほとんどない~, 6:ほとんど毎日
同居家族以外の人との会食頻度	509	0.00	6.00	1.56 1.37	527	0.00	6.00	1.76 1.37	1:ほとんどない~, 6:ほとんど毎日
同居家族から情緒サポート 合計	512	0.00	4.00	2.67 1.63	531	0.00	4.00	2.18 1.77	同居家族1項目、情緒的サポートの4項目、1:有
別居子・親戚から情緒サポート 合計	512	0.00	8.00	2.24 2.37	531	0.00	8.00	2.64 2.59	別居子と親族の2項目、情緒的サポートの4項目、1:有
近隣・友人から情緒サポート 合計	512	0.00	8.00	1.22 1.85	531	0.00	8.00	1.79 2.11	近隣、友人の2項目、情緒的サポートの4項目、1:有
同居家族から手段的サポート 合計	512	0.00	4.00	2.50 1.52	531	0.00	4.00	2.20 1.67	同居家族1項目、手段的サポートの4項目、1:有
別居子・親戚から手段的サポート 合計	512	0.00	8.00	1.61 1.89	531	0.00	8.00	1.87 1.90	別居子と親族の2項目、手段的サポートの4項目、1:有
近隣・友人から手段的サポート 合計	512	0.00	6.00	.35 .69	531	0.00	8.00	.37 .78	近隣、友人の2項目、手段的サポートの4項目、1:有

無回答ケースを除外すると、サンプルサイズは男性が517ケース、女性が536ケースとなった。主観的健康感、男女ともに「良い」の平均値が高く、慢性疾患は男女ともに「あり」の平均値が高かった。親族ネットワークの世帯構成は、男女ともに一人暮らしの平均値が低かった。非親族ネットワークに関して、男女ともに同居家族以外の者との外食の頻度よりも近所付き合いの平均値のほうが高かった。

た。情緒的サポートの受領と手段的サポートの受領に関しては、男女ともに近隣・隣人からのサポート受領の平均値が、それぞれ低い傾向があった。

表2では、社会的ネットワーク・サポートと高齢者の健康状態との構成比を示した。

社会的ネットワークとの関連をみると、主観的健康感が「良い」の割合が高いのは、男女高齢者ともに「既婚子と同

表2. 社会的ネットワーク・サポートと高齢者の健康状態とのクロス分析結果

		主観的健康状態						慢性疾患					
		男性			女性			男性			女性		
		N	悪い	良い	N	悪い	良い	N	なし	あり	N	なし	あり
年齢	前期高齢者	390	24.4	74.5	382	22.6	77.4	387	26.9	73.1	377	31.6	68.4
	後期高齢者	127	31.5	68.5	154	42.2	57.8	126	14.3	85.7	154	18.8	81.2
学歴	小学校	42	23.8	76.2	68	32.4	67.6	42	28.6	71.4	68	22.1	77.9
	中学校	145	24.1	75.9	160	32.5	67.5	144	20.8	79.2	160	29.4	70.6
	高校	213	32.9	67.1	263	26.6	73.4	211	22.3	77.7	261	28.7	71.3
	専門学校以上	112	17.9	82.1	41	17.1	82.9	112	28.6	71.4	39	28.2	71.8
	親族ネットワークの形態												
	同居家族												
	一人暮らし	37	23.8	76.2	88	29.5	70.5	37	24.3	75.7	87	24.1	75.9
	夫婦のみ暮らし	241	27.0	73.0	178	29.2	70.8	239	28.9	71.1	177	27.7	72.3
	既婚子と同居	111	18.2	81.8	175	21.7	78.3	109	19.3	80.7	175	32.6	67.4
	未婚子と同居	102	29.4	70.6	72	33.3	66.7	102	18.6	81.4	70	21.4	78.6
	非親族ネットワークの形態												
	近所付き合い												
	ほとんどしない	111	33.3	66.7	65	29.5	70.5	111	18.0	82.0	65	21.5	78.5
	年に数回	116	29.3	70.7	100	29.2	70.8	116	22.1	77.9	100	24.5	75.5
	週に数回	141	24.1	75.9	194	21.7	78.3	141	25.7	74.3	194	27.5	72.5
	ほとんど毎日	136	20.6	79.4	168	33.3	66.7	136	27.9	72.1	168	31.7	68.3
	家族以外の者との会												
	ほとんどしない	151	39.7	60.3	119	52.3	47.7	150	18.7	81.3	119	19.3	80.7
	年に1-3回	124	23.4	76.6	132	28.0	72.0	123	26.0	74.0	130	25.4	74.6
	年に数回	84	17.9	82.1	98	27.8	72.2	82	26.8	73.2	96	31.3	68.8
	月に数回	150	20.7	79.3	178	19.6	80.4	150	26.7	73.3	178	33.1	66.9
	情緒的サポートの受領												
	同居家族												
	なし	108	26.9	73.1	183	30.6	69.4	107	24.3	75.7	181	24.8	76.2
	あり	404	26.2	73.8	348	27.0	73.0	401	23.9	76.0	346	30.3	69.7
	非同居の親族												
	なし	186	32.8	67.2	172	30.8	69.2	186	26.3	73.7	171	31.6	68.4
	あり	326	22.7	77.3	359	27.0	73.0	322	22.7	77.3	356	26.4	73.6
	非親族												
	なし	289	29.4	70.6	230	32.2	67.8	287	26.5	73.5	228	31.6	68.4
	あり	223	22.4	77.6	301	25.2	74.8	221	20.8	79.2	299	25.4	74.6
	手段的サポートの受領												
	同居家族												
	なし	100	27.0	73.0	162	31.5	63.5	99	22.3	77.8	161	25.5	74.5
	あり	412	26.2	73.8	369	26.8	73.2	409	24.4	75.6	366	29.2	70.8
	非同居の親族												
	なし	209	31.6	68.4	186	28.5	71.5	206	19.9	80.1	184	31.5	68.5
	あり	303	22.8	77.2	345	28.1	71.9	302	26.8	73.2	343	26.2	73.8
	非親族												
	なし	377	29.4	70.6	394	32.2	67.8	374	26.5	73.5	390	31.6	68.4
	あり	135	22.4	77.6	137	25.2	74.8	134	20.8	79.2	137	25.4	74.6

注：主観的健康状態と慢性疾患はそれぞれ横が100%である

居」群であった。情緒的サポートの受領との関連をみると、主観的健康感が「良い」の割合は、男女高齢者ともに、非親族からの情緒的サポートが「あり」群で高かった。手段的サポートの受領との関連をみると、主観的健康感が「良い」の割合が高いのは、男女高齢者ともに非親族からの手段的サポートの受領が「あり」群であった。

社会的ネットワークと慢性疾患の有無との関連をみると、男女高齢者ともに家族以外の者との外食がほとんど「ない」群は、慢性疾患「あり」の割合が高かった。情緒的サポートの受領との関連について、慢性疾患「あり」の割合は、男性高齢者では、非親族からの情緒的サポートが「あり」群において高いが、女性高齢者では、同居家族からの情緒的サポートが「なし」群において高かった。手段的サポートの受領との関連をみると、慢性疾患「あり」は、男性高齢者については、非同居の親族から手段的サポートが「なし」群において高く、女性高齢者では、非親族から手段的サポートが「あり」群に高かった。

コントロール変数に関して、男女ともに後期高齢者よりも前期高齢者群において主観的健康感が「良い」の割合と、慢性疾患「なし」の割合が高かった。学歴に関して、主観的健康感が「良い」の割合は、男女ともに短期大学卒以上群において高かった。慢性疾患「あり」の割合は、男性では中学校卒群において高く、女性では小学校卒群において高い傾向があった。

2. 社会的ネットワーク・サポートと健康状態との関連性

社会的ネットワーク、社会的サポートと高齢者の健康状態との関連を明らかにするためにロジスティック回帰分析によって推定されたオッズ比を表3に示した。

第1に、主観的健康感に関するモデル1では、既婚子と同居のオッズ比は男女ともに有意であり(OR=2.00, $p<0.05$; OR=2.39, $p<0.01$)、既婚子と同居する群は主観的健康感が良好であった。男性高齢者では家族以外の者との会食のオッズ比(OR=1.18, $p<0.05$)が、女性高齢者では近所付き

表3. 高齢者の健康状態と社会的ネットワーク・サポート諸変数とロジスティック回帰分析

		男性		女性		男性		女性	
		主観的健康状態 モデル1 オッズ比	主観的健康状態 モデル2 オッズ比	主観的健康状態 モデル1 オッズ比	主観的健康状態 モデル2 オッズ比	慢性疾患h モデル1 オッズ比	慢性疾患h モデル2 オッズ比	慢性疾患 モデル1 オッズ比	慢性疾患 モデル2 オッズ比
年齢	後期高齢者	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
	前期高齢者	1.32	1.29	2.14**	2.11**	0.50*	0.51*	0.56*	0.55*
学歴	教育年数	1.04	1.06	1.10*	1.15*	0.94	0.91*	0.95	0.94
	親族ネットワークの形態								
同居家族	未婚子と同居	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
	ひとり暮らし	0.88	0.60	1.59	1.22	0.52	0.46	0.96	0.74
	夫婦のみ暮らし	1.11	1.04	1.43	1.55	0.52*	0.56*	0.88	0.85
	既婚子と同居	2.00*	2.07*	2.39**	2.34**	0.74	0.78	0.62	0.63
非親族ネットワークの形態									
	近所付き合い	1.08	1.06	1.21*	1.18**	0.91*	0.90*	0.91	0.90*
	家族以外の者との会食	1.18*	1.17	1.14	1.15	0.99	0.97	0.90	0.90
情緒的サポートの受領									
	同居家族		0.75**		0.93		0.99		0.96
	非同居の親族		0.98		0.94		1.22**		1.01
	非親族		1.01		1.08		1.11		1.06
手段的サポートの受領									
	同居家族		1.20*		1.06		0.89		0.94
	非同居の親族		1.17		1.03		0.64**		0.96
	親族		0.87		0.92		1.06		1.12
		560.95	541.42	597.72	558.99	527.38	508.01	591.53	585.79
Chi-square		18.29**	31.20**	34.47**	57.11**	19.19**	27.25**	18.88**	22.02**
N		500	498	522	518	496	494	518	514

注；主観的健康状態が良い=1、主観的健康状態が悪い=0、；慢性疾患あり=1、慢性疾患なし=0

合いのオッズ比(OR=1.21, $p<0.05$)がそれぞれ有意であった。すなわち、家族以外の者との会食の頻度が多い男性高齢者と、近所付き合いの頻度が多い女性高齢者は、主観的健康感を有意に高める可能性が示唆された。

主観的健康感に関するモデル2では、既婚者と同居のオッズ比が男女高齢者ともに有意であり(OR=2.07, $p<0.05$; OR=2.34, $p<0.01$)、既婚者と同居する男女高齢者は主観的健康感が良好であった。女性高齢者のみ近所付き合いのオッズ比が統計的に有意であり(OR=1.18, $p<0.05$)、近所付き合いの頻度が多い群は、主観的健康感が良好であることが示された。同居家族からの情緒的サポートの受領と手段的サポートの受領は、男性高齢者のみオッズ比(OR=0.75, $p<0.01$; OR=1.20, $p<0.05$)がそれぞれ有意であった。すなわち、同居家族からの情緒的サポートの受領が多い群は、主観的健康感が悪くなるリスクが高いが、同居家族からの手段的サポートの受領が多い群は、主観的健康感が良好である可能性が示唆された。同居家族、非同居の親族と非親族からの情緒的サポートの受領と手段的サポートの受領は、女性の主観的健康感と統計的に有意な関連がみられなかった。

第2に、慢性疾患に関するモデル1では、男性高齢者のみ夫婦のみ世帯のオッズ比(OR=0.52, $p<0.05$)と、近所付き合いのオッズ比(OR=0.91, $p<0.05$)がそれぞれ有意であり、夫婦のみ世帯群と近所付き合いの頻度が多い群は、慢性疾患をもつリスクが低い傾向があった。

慢性疾患に関するモデル2では、男女高齢者ともに近所付き合いのオッズ比(OR=0.90, $p<0.05$; OR=0.90, $p<0.05$)が統計的に有意であった。すなわち、近所付き合いの頻度が多い群では、慢性疾患をもつリスクが低い可能性が示唆された。男性高齢者のみ非同居の親族からの情緒的サポートの受領と手段的サポートの受領のオッズ比(OR=1.22, $p<0.01$; OR=0.64, $p<0.01$)がそれぞれ有意であった。すなわち、非同居の親族からの情緒的サポートを受領することは、慢性疾患をもつリスクが高く、非同居の親族からの手段的サポートを受領することは、慢性疾患をもつリスクが低い傾向が示唆された。

考察

本研究では、非親族ネットワークは男女高齢者の主観的健康感と慢性疾患に対して有意な関連性があり、親族ネットワークは男女高齢者の主観的健康感と男性高齢者の慢性疾患に対して有効であった。他方で、男性高齢者のみ、親族ネットワークからの情緒的サポートの受領は主観的健康感と慢性疾患に対して負の関連性がみられたが、親族ネッ

トワークからの手段的サポートの受領は主観的健康感と慢性疾患に対して正の関連性が確認された。

本研究では、第1に、親族ネットワークと非親族ネットワークが高齢者の健康状態と有意な正の関連性があるかどうかを示すことであった(仮説1)。非親族ネットワークの形態は、男女高齢者の主観的健康感と慢性疾患に対してそれぞれ有意な関連があり、本仮説が部分的に採択された。人生の後半のライフコースとして、友人や近所付き合いなどの非親族ネットワークは比較的重要な資源であり(Pillemer and Glasgow, 2000)、狭い範囲の親族ネットワークに比べて、多様な資源の入手や提供のための間接的な通路となっている。非親族ネットワークを利用することにより、ちょっとした不安や心配の解消、または、喜びを分かち合うことができるという安心感があり、良好な健康状態を維持する可能性がある。男性よりも女性の方が典型的に広範囲の社会的ネットワークを維持しており(Moen and Chermack, 2005)、それらが女性高齢者の主観的健康感に対して直接影響を与えやすいことが推察される。広範囲な非親族ネットワークを維持している男女高齢者は、自らのニーズを解決する仕組を生み出し、良好な健康状態を維持していることが推測される。

他方で、既婚者と同居の男女高齢者は主観的健康感が良好であり、夫婦のみ同居の男性高齢者は慢性疾患をもつリスクが低く、本仮説1と異なる結果となった。高齢になると、ライフイベントの経験により、非親族ネットワークが縮小される傾向がある。既婚者と同居する高齢者は、子ども家族からの多様な情報を入手し、緊急時にすぐに対応できるという安心感があり、良好な健康状態を維持することが可能であると推察される。

第2に、親族ネットワークからの情緒的サポートの受領が高齢者の健康状態と有意な負の関連性があるかどうかを検証した(仮説2)。男性高齢者のみ、同居家族からの情緒的サポートの受領が多い群は、主観的健康感が悪く、非同居の親族からの情緒的サポートの受領が多い群は、慢性疾患をもつリスクが高いことが示唆された。女性よりも男性のほうが、親族からのサポートの受領により健康状態が変化しやすい(Okamoto and Tanaka, 2004)という報告がある。健康状態に対して社会的サポートが与える負の影響は、サポート受取人のニーズを適切に把握せず提供する時に生じ(Ashida et al., 2009)、親族からの過剰な情緒的サポートの提供がかえって高齢者の健康状態に悪い影響を与えることが推察される。または、高齢者に対して親族ネットワークからの情緒的サポートの提供があっても、高齢者の健康状態の改善が困難であるというジレンマが存在することも考えられる。

その一方で、非親族ネットワークからの情緒的サポートの受領は、男女高齢者の主観的健康感と慢性疾患に対してそれぞれ統計的に有意な関連がみられず、本仮説が却下された。Uno et al. (2002)によれば、効果的な社会的サポートは友人の質(親友と親しくない友人)と関連があり、親友からの情緒的サポートの受領がある者は心疾患になるリスクが低い、親しくない友人からの情緒的サポートがある者は心疾患があるとされている。他方で、近年では、高齢者の慢性疾患には、隣人が提供するサポートがかえって不適切であり、社会的サポートが有効ではないという指摘もある(Krause, 1995)。非親族ネットワークからのサポート提供が健康状態に対して及ぼす影響が正と負の2つの側面があるとするならば、非親族ネットワークと自分自身との過去の評価がどのように関連しているかを含めた検討が必要である。

第3に、親族ネットワークからの手段的サポートの受領が、高齢者の健康状態に対して効果的であるかどうかを検討することであった(仮説3)。同居家族からの手段的サポートの受領がある男性高齢者は、主観的健康感が良好であり、非同居の親族からの手段的サポートを受領した男性高齢者は、慢性疾患を持つリスクが低いという知見が得られた。老親と子どもとの関係は、互酬性の責任や義務を伴わない一方的な依存関係であり(藤崎, 1998)、その関係が高齢者の健康状態に対して良好に作用すると推察される。稲葉によれば(2007)、社会的サポートの理論上の重要性は、サポートが実際に提供されることよりも、サポートがいつでも利用可能であることだとされている。そのためには、親族と非親族などとの信頼関係の構築が必要であり、それらが生活する上での安心感や信頼感につながり、高齢者が良好な健康状態を維持しながら余生を過ごすことが可能であると考えられる。他方で、本研究では、親族ネットワークからの手段的サポートの受領が女性の健康状態に対して、非親族ネットワークからの手段的サポートの受領が男女高齢者の健康状態に対して、それぞれ統計的に有意ではなかった。その理由については、今後さらに研究を進めることが重要である。

第4に、親族ネットワークと親族サポート、非親族ネットワークと非親族サポートが高齢者の健康状態に対して及ぼす影響は、高齢者の性によって異なっているかどうかを明らかにすることであった。本研究では、非親族ネットワークが男女高齢者の主観的健康感と慢性疾患に対してそれぞれ統計的に有意であり、男女による違いは認められなかった。他方で、親族ネットワークは、主観的健康感に対して男女高齢者ともに有意な関連があるが、慢性疾患に対して男性高齢者のみ統計的に有意であることが確認され

た。さらに、親族からの情緒的サポートと手段的サポートの受領は、男性高齢者のみ主観的健康状態と慢性疾患に対して統計的に有意であることが確認され、サポート受領と高齢者の健康状態には性差があることが示唆された。社会的ネットワークの規模は、男女高齢者によって差がほとんどないが、情緒的サポートの受領と手段的サポートの受領が健康状態に及ぼす影響力は、男性よりも女性のほうが弱い(Unoら, 2002)という結果と本研究との間には整合性があることが示唆された。他方で、高齢者はライフイベントの経験により、不健康のリスクが高くなると、社会的ネットワークが縮小され、社会的サポートの受領が増加することもあり、社会的ネットワーク・社会的サポートと高齢者の健康状態との因果関係の解明が望ましい。

本研究の課題

最後に、本研究の限界と今後の課題について、述べておきたい。

第1に、社会的ネットワーク、社会的サポートと高齢者の健康状態との因果関係について追跡研究が必要である。本研究では、先行研究に基づき高齢者の健康状態にとっての社会的ネットワーク・サポートの重要性を認め横断調査に基づく分析を行った。しかし、社会的ネットワーク・社会的サポートと健康状態の因果関係は逆もあり、因果関係の方向性については追跡研究が重要である。

第2に、居住地域のネットワークと社会的サポートの状況を把握する必要がある。国勢調査によると、居住地域により同居家族の構成が異なっており、介護保険制度では、地域に密着した社会的ネットワークと社会的サポートがあり、介護予防対策も市町村によって異なる可能性がある。今後は、居住地域の有する社会的ネットワークと社会的サポートの違いに着目して縦断的調査を行うなど追跡研究が望ましい。

第3に、主観的健康感に関して、「あまりよくない」と「悪い」を1つにまとめて分析を行ったが、高齢者の介護予防対策を考える上では、2つの選択肢を識別して分析することでより有益な示唆が得られるかもしれない。不健康のリスクが高い者を対象とした介護保険制度では、健康状態が「悪い」者を優先的に介護予防や介護サービスを提供し、「あまりよくない」者には健康状態が悪化しないように介護予防対策が一層の重要性を増している。その目的を果すためには、「あまりよくない」から「悪い」への移行課程を明らかにすることも必要である。

第4に、本研究で用いたデータは、10年前(2005年3月)に実施した個票データであり、現在の高齢者の健康状態と

の比較研究が必要である。2015年には、1947～49年生まれの団塊世代が全員65歳以上となり、社会的ネットワーク・社会的サポート、主観的健康感の評価と慢性疾病の割合が変化する可能性があり、それを考慮する必要がある。

結論

高齢者は、定年退職、配偶者の喪失などのライフイベントの経験によって社会的ネットワークと社会的サポート体制が次第に縮小され、孤独死などが社会問題化している。高齢化などの進展により医療給付費と介護給付費の割合が増加しており、効果ある介護予防プログラムの開発などが求められている(厚生労働省, 2011)。本研究では、高齢者の健康状態と社会的ネットワーク・社会的サポートとの関連性を明らかにすることを目的とした。データ分析により、高齢者の良好な健康状態には、親族ネットワークと非親族ネットワークが有効である可能性が示唆され、介護予防対策の計画や実施にあたりそれらを考慮して検討することが期待される。他方で、親族からのサポート形態やサポート提供先との親密性によって男性高齢者の健康状態の良し悪しが異なることも示唆された。行き過ぎたサポートの受領に強く依存すると、高齢者の健康状態が悪くなるというジレンマが存在することに考慮する必要がある。本研究結果は、高齢者が良好な健康状態の維持のための取り組みと介護予防対策の計画や事業活動において、有効に活用されることが期待される。

注1) 本研究は、科学研究費補助金「要介護状態及び健康の形成過程における社会経済的要因の役割に関する実証的研究」(平成16年度～18年度、主任研究者: 武川正吾東京大学大学院教授)に関するデータの成果の一部分である。

文献

Ashida, S., Palmquist, A.E., Basen-Engquist, K., et al. (2009): Changes in female support network systems and adaptation after breast cancer diagnosis: differences between older and younger patients. *Gerontologist* **49**, 549-559.

Baumeister, R.F. and Sommer, K.L. (2005): What do men want? Gender differences and two spheres of belongingness: Comment on Cross and Madson. *Psychol. Bull.* **122**, 38-44.

Beland, F., Zunzunegui, M.V., Alvarado, B., et al. (2005):

Trajectories of cognitive decline and social relations. *J. Gerontol. Psychol. Sci.* **60B**, 320-330.

Berkman, L.F. and Glass, T. (2000): Social integration, social networks, social support, and health. In: Berkman, L.F. and Kawachi, I. (Eds.), *Social Epidemiology*, Oxford University Press, Oxford, pp137-173.

Cohen, S. and Janicki-Deverts, D. (2009): Can we improve our physical health by altering our social networks? *Assoc. Psychol. Sci.* **4**, 375-378.

藤崎宏子(1998): 高齢者・家族・社会的ネットワーク. 培風館, 東京, pp11-52.

稲葉昭英(2007): ソーシャルサポート、ケア、社会関係資本. *福祉社会学研究* **4**, 61-76.

Kim, J.-N., Otani, T., Iwasaki, M., et al. (2008): Effect of household composition and some health indices on mortality risk in middle-aged Japanese from a seven-year cohort study. *Jpn. Am. J. Gerontol.* **3**, 131-144.

厚生労働省(2011): 医療・介護制度改革について(平成23年11月16日). <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001wcv7-att/2r9852000001wcyo.pdf> (2014.11.10検索)

Krause, N. (1995): Assessing stress-buffering effects: A cautionary note. *Psychol. Aging* **10**, 518-526.

岸 玲子・堀川尚子(2004): 高齢者の早期死亡ならびに身体機能に及ぼす社会的サポートネットワークの役割 -内外の研究動向と今後の課題. *日本公衆衛生雑誌* **51**, 79-93.

Moore, P. and Chermack, K. (2005): Gender disparities in health: strategic selection, careers, and cycles of control. *J. Gerontol. SERIES B* **60B**, 99-108.

野辺政雄(1999): 高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて. *社会学評論* **50**, 375-391.

野口祐二(1991): 高齢者のソーシャル・サポート: その概念と測定. *老年社会科学* **34**, 36-48.

Okamoto, K. and Tanaka, Y. (2004): Gender differences in the relationship between social support and subjective health among elderly persons in Japan. *Am. J. Prevent. Med.* **38**, 318-322.

Pillemer, K. and Glasgow, N. (2000): Social integration and aging: Background and trends. In: Pillemer, K., Moen, P., Wethington, E., et al. (Eds.), *Social Integration in the Second Half of Life*, John Hopkins University Press, Baltimore, pp19-47.

Schwartz, R. and Leppin, A. (1992): Possible impact of

- social ties and support on morbidity and mortality. In: Veiel, H. and Baumann, U. (Eds.): *The Meaning and Measurement of Social Support*, Hemisphere Press, New York, pp65-84.
- Seeman, T., Miller-Martinez, D., Stein-Merkin, S., et al. (2010): Histories of social engagement and adult cognition in middle and late life: the midlife in the U.S. study. *J. Gerontol.* **66B**, 141-152.
- 総務省(2007): 平成17年度国勢調査.
- Sugisawa, H., Shibata, H., Hougham, G.W., et al. (2002): The impact of social ties on depressive symptoms in US and Japanese elderly. *J. Social Issues* **58**, 785-804.
- Uno, D., Uchino, B.N. and Smith, T.W. (2002): Relationship quality moderates the effect of social support given by close friends on cardiovascular reactivity in women. *Int. J. Behav. Med.* **9**, 243-262.
- Wen, M., Cagney, K.A. and Christakis, N.A. (2005): Effect of specific aspects of community social environment on the mortality of individuals diagnosed with serious illness. *Social Sci. Med.* **61**, 1119-1134.

The Effect of Social Networks and Social Support on Health Status of Elderly: Using Self-rated Health Status and Chronic Disease Indices

Jung-Nim KIM^{*1}, Shogo TAKEGAWA^{*2}, Koichi HIRAOKA^{*3},
Tomoo NAKATA^{*4}, Yasuta WAKE^{*5} and Junko WAKE^{*6}

*1 School of Social Welfare, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

*2 University of Tokyo Graduate School,
7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-8654, Japan

*3 Ochanimizu University,
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610, Japan

*4 Hokusei Gakuin Univeristy,
3-1, 2-chome, Oyachinishi, Atsubetsu-ku, Sapporo-city, Hokkaido 004-8631, Japan

*5 Meiji Gakuin University,
1-2-37 Shiroganedai, Minato-ku, Tokyo 108-8636, Japan

*6 Tokyo Metropolitan University,
1-1 Minamioosawa, Hachioji-city, Tokyo 192-0397, Japan

Abstract : The purpose of this study was to examine the 'health status' of elderly people and how it was associated with social networks and social support. The samples of this study consisted of residents aged 65 to 79 from throughout Japan (N=1,350) by an interviewer in March 2005, in which 1,053 people answered the questionnaire (a 78% response rate). Binomial logistic regression was used for the data analysis. Results from the analyses indicated that kinship networks and non-kinship networks were significantly and positively associated with self-rated health status in both men and women. Second, perceived instrumental support from kinship networks were significantly and positively associated with self-rated health status and a low risk of chronic diseases in men. Third, perceived emotional supports from kinship networks were significantly and negatively associated with self-rated health status and chronic diseases in men. The present results can be used to construct the support and care plans for elderly people.

(Reprint request should be sent to Jung-Nim Kim)

Key words : Health status, Elderly, Social networks, Social supports, Gender

東京福祉大学赤城山宿泊研修の成果と課題 その1. 2年生の学生スタッフアンケート結果の分析

栗原 久^{*1}・古俣龍一^{*2}・佐々木貴雄^{*3}・幸喜 健^{*3}・荻野基行^{*3}・三野宏治^{*3}・岡村 弘^{*2}・
飯田昌男^{*3}・上村孝司^{*3}・北爪克洋^{*3}・小野智一^{*2}・石崎達也^{*2}・斎藤 瞳^{*4}・森 正人^{*1}・
斎藤雅記^{*1}・狩野晴香^{*5}・中嶋裕一^{*5}・金井孝博^{*6}・中嶋有沙^{*6}

*1 東京福祉大学 短期大学部・*2 教育学部・*3 社会福祉学部・

*4 心理学部・*5 総務課・*6 教務課(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 伊勢崎市山王町2020-1

(2014年11月13日受付、2014年12月11日受理)

抄録: 東京福祉大学赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)における学生スタッフ(2年生)を対象に得られた、活動の感想と反省に関するアンケート結果から、成果と課題について分析した。学生スタッフはレクレーションワークの企画や実行に苦心したが、その活動によって1年生が喜んでくれたことに強い満足を感じており、研修を通して自己実現力の向上を意識して自信を深めたようである。もちろん、いくつかの問題点や改善点も指摘している。これらのアンケート結果は、赤城山宿泊研修の意義を強調するとともに、本研修が東京福祉大学の伝統行事として継続されることの重要性を示唆している。

(別刷請求先: 栗原 久)

キーワード: 東京福祉大学、赤城山宿泊研修、学生スタッフ、アンケート調査

緒言

文部科学省の2011(平成23)年度学校基本調査(文部科学省, 2011)によれば、2011年春の新規高卒者の大学と短大の進学率はそれぞれ47.6%、5.8%であり、専門学校を合わせると69.6%となり、進学先を強く選ばなければ全入の時代を迎えている。

高等教育環境の定員枠の拡大の増加に伴って持ち上がった問題の中で最も深刻なものが長期欠席、休・退学といった修学不調である。例えば、日本中退予防研究所(2010)は、大学生の8人に1人が中退していると報告し、その主要原因として、学習意欲の喪失、人間関係、関心の移行、不本意入学が挙げられている。また、内田(2006, 2008)は、学生の休・退学、留年に理由として、①身体的疾患、②明確な精神障害、③大学教育路線から離れる消極的理由(スケジュール調整、勉強意欲の減退・喪失、単位不足、学外団体活動、アルバイトや趣味、専門学校などへの進路変更、就職など)、④大学教育路線にあっても学習向上のための積極的理由(海外留学、進路変更・他大学入学、履修科目上の都合、資格取得準備、就職再トライ、飛び級など)、⑤環境要因(経済的理由、家庭の都合、結婚・出産・育児、災害など)、

⑥不詳(一身上の都合、行方不明、調査不能など)の6種類に分類している。それらの中で最も頻度が高く、しかも対応が難しいものとして、③の消極的理由が指摘されている(内田, 2011)。

大学・短大・専門学校を消極的理由によって中退した者の多くが、その後フリーター・ニートとして過ごしていることから、大学に対して、入学させた学生の勉強意欲を維持し、休・退学、留年を予防する対策を講ずることが求められている。このようなニーズに対する解決策として、アカデミックアドバイザー(担任)を介する学生の修学・生活状況の把握とアドバイス、大学・学生・保護者との綿密な連絡体制、授業出席状況のチェックと欠席への対応、健康状態、特にメンタル面の不調に対する相談窓口の設置などが提言されている(厚生労働省, 2007; 文部科学省, 2011)。

大学に入ると、サークル・クラブの中では学生の交流が比較的密に行われている。しかし、サークル・クラブに参加していない学生は、授業は一緒に受けるものの、学生同士の交流には限界があり、孤立する傾向がないわけではない。また、学生と教員との交流も、事務的な面に限られている傾向が強い。一方、「同じ釜の飯を食う」といった諺があるように、教職員と学生とが宿泊を伴う活動を行うこと



写真1. 東京福祉大学伊勢崎キャンパスからみた赤城山

は、互いの交流を密にして、信頼感を深めることにつながる可能性が高い。

赤城山は群馬県を代表する山頂にカルデラを持つ大火山(標高1,828m、分布面積700km²、体積100km³)で(栗原, 2007)、広大な裾野を広げた姿を、東京福祉大学(伊勢崎キャンパス)から望むことができる(写真1)。山頂には大沼(カルデラ湖)・小沼(火口湖)の2つの湖、覚満淵の湿原があり、ミズナラ、ダケカンバ、カエデなどの落葉広葉樹、群馬県花であるレンゲツツジの群生地として有名である。

東京福祉大学赤城山研修センターは2005年4月、赤城山山頂の大沼北岸の厚生団地地区(標高約1,370m)に開設された(写真2)。これを機会に、同年8月には、第1回東京福祉大学赤城山宿泊研修(以下、赤城研修とする)がスタートし、2014年には第10回を迎えた(栗原, 2010; 栗原ら, 2010; 栗原, 2013)。赤城研修は、第1回(2005年)~第10回(2014年)とも、1日目はレクレーションワークとバーベキュー、2日目はハイキングとキャンプファイヤー、第3日目はレクレーションと研修レポート作成を基本とするプログラムで構成されている。なお、雨天時は、バーベキューは中止、ハイキングについては短縮・コース変更または室内活動、レクレーションは室内で実施可能な代替プログラム、キャンプファイヤーはキャンドルの集いに変更される。言うまでもなく、この赤城研修は、クラス・専攻を同じとする1年生同士およびアカデミックアドバイザー(担任)が、2泊3日の研修の中での交流を通して、互いを理解して絆を強めることを目的としている。

研修のスタート直後は、専門家の指導のもとにレクレーションワークが行われ、第2回目からは、前年に赤城研修を経験した2年生学生が指導員の補助要員(学生ボランティアと呼ばれた)として、研修に参加した。しかし、この方式に対する反省から、2009年の第5回赤城研修から、レクレーションの企画および1年生に対する指導の大部分



写真2. 東京福祉大学赤城山研修センター

を学生に委ねる方式となり、従来の呼称であった学生ボランティアから、学生スタッフに変更した。

赤城研修は本学にとって主要な行事であり、かつ学生スタッフを中心とする活動の実施は全国的にもユニークな取り組みである。そこで本報告は、第10回赤城研修(伊勢崎キャンパス)の終了にあたり、本研修をより一層充実させる目的で、学生スタッフのアンケートから意義と課題を分析した。

調査対象および方法

学生スタッフと活動の経過

第10回赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)の学生スタッフの学部・学科内訳は、社会福祉学部・社会福祉学科11人(男子4人、女子7人)、社会福祉学部・保育児童学科27人(男子13人、女子14人)、教育学部12人(男子5人、女子7人)、心理学部9人(男子3人、女子6人)の、合計59人(男子25人、女子34人)であった。

学生スタッフの募集と活動経過は以下の通りであった。学生スタッフは、2014年4月の担当グループ振り分け後、それぞれが独自に、プログラム企画の活動を開始したが、具体化したのは5月8日のJS氏指導の事前研修①以降であった。

2013年12月	学生スタッフ募集
2014年1月	学生スタッフ確定・顔合わせ
2014年4月	学生スタッフ担当グループ振り分け・活動開始
2014年5月8日	事前研修① 1日(伊勢崎キャンパス:外部の専門講師によるレクレーションワーク指導)
2014年5月17・18日	事前研修② 1泊2日(赤城山頂:バーベキュー、ハイキング、キャンプファイヤーの実践、施設・設備の確認)
2014年5月	1年生へのオリエンテーション・班編成(第1回目)
2014年5月	しおり作成
2014年5月	1年生へのオリエンテーション・研修内容説明(第2回目)
2014年5月31日～6月12日	本研修(2泊3日:6グループ)

赤城山宿泊研修の参加者

1年生を対象にした本研修における各グループは、原則として同一学部・学科・専攻の1年生50～70人、そのアカデミックアドバイザー、赤城山宿泊研修実行専門部会員2人および補助教員1～2人、教務課事務職員2～3人、保健担当(外部委託の看護師)1人、および学生スタッフ9～11人で構成された。学生が少ない学科・専攻は複数を1つにまとめ、逆に多い学部・学科は分割し、グループの人数を調整した。そのため、平成26年度赤城研修(伊勢崎キャンパス)の各グループ構成人数の合計は、71～88人であった。

研修スケジュールは実施年、グループ間で若干の違いがあるが、基本的な流れは以下の通りである。

研修1日目

10:00	東京福祉大学(伊勢崎キャンパス) 出発(バス内で、学生スタッフ企画のゲーム)
11:30	赤城山頂到着・昼食
12:30	研修センター到着
13:00	開校式
13:30	レクレーションI(野外。雨天時は室内) (学生スタッフ企画)
15:15	チェックイン

16:00	夕食(バーベキュー)
19:30	アカデミックアドバイザーとの集い
21:00	リーダー会議
22:00	点呼・消灯・就寝

研修2日目

6:30	起床
7:00	朝の集い・朝食
8:15	清掃
9:00	ハイキング・昼食(弁当)
18:00	夕食
19:00	キャンプファイヤー(雨天時はキャンドルの集い)(1年生企画のレクレーション活動あり)
21:00	リーダー会議
22:00	点呼・消灯・就寝

研修3日目

6:30	起床
7:00	朝の集い・朝食
8:15	清掃
8:45	チェックアウト
9:00	レクレーションII(野外。雨天時は室内) (学生スタッフ企画)
11:00	研修レポート作成
12:00	昼食
12:45	閉校式
13:00	研修センター出発
15:00	東京福祉大学(伊勢崎キャンパス)到着

学生スタッフアンケートの回収・分析

研修3日目、レクレーションIIと昼食の間の1時間の中で、1年生には赤城研修についてのレポート作成を、2年生の学生スタッフには研修に関する自己評価・反省を記述してもらった。

アンケートの質問内容は、以下の4項目で、それらはいくつかの細目に分かれていた。

- ①成功してよかったこと、失敗したこと、工夫したこと、努力したこと。
- ②自分自身の活動を振り返っての反省、感想
 - 反省
 - 感想
- ③次年度スタッフに対するアドバイス
- ④プログラム、学生指導、運営方法、食事等の感想・改善に向けての意見
 - プログラムの感想・改善
 - 学生指導の感想・改善
 - 運営方法の感想・改善

- 食事の感想・改善
- その他の感想・改善

学生スタッフから回収されたアンケートの記述について、同類・同一意味の内容を集計した。

個人情報の保護

アンケート用紙には、学部・学科・専攻に関する項目はあった。しかし、記述内容の集計および分析において、個人名が特定されないこと、また、記述内容から、個人が利害を受けることのないよう配慮した。

結果

1. 研修の実施状況

各グループとも、遅刻・欠席は皆無であった。また、研修2日目に発熱のため途中帰宅した1年生1名を除いた全員が、2泊3日の研修を完了した。

写真3は、野外でのレクリエーション活動の例である。

研修スケジュールのうち、バーベキュー、ハイキング、キャンプファイヤーを全て予定通り実施できたのは1および2グループのみであった。3グループ以降は雨天が続いたため、バーベキューの中止、ハイキングの短縮コースへの変更、キャンプファイヤーからキャンドルの集いへの変更があった。

2. 学生スタッフのアンケート結果

2-1. 成功・失敗・工夫・努力したこと

表1は、学生スタッフ59人のアンケートに書かれていた、質問項目①の成功、失敗、工夫、努力したことについて、成功を挙げた人数の順にまとめたものである。

成功を挙げる人数が多かった項目は「レクリエーション」、「時間配分」、「キャンプファイヤー」で、これらの項目は

失敗および工夫においても人数が多かった。また、失敗は「体調面の配慮」が、努力は「レクリエーション」、「1年生への配慮・交流」を挙げる人数が多かった。

次に、質問項目②に対して学生スタッフが個人的に述べた反省の上位5項目は、「説明不足」(16人:27.1%)、「1年生とのコミュニケーション不足」(12人:20.3%)、「低い指導力」(10人:16.9%)、「時間配分の問題」(9人:15.3%)、「準備不足」(8人:13.6%)であり、表1の失敗、工夫、努力した項目と類似していた。

感想の上位5項目は、「楽しかった」(13人:22.0%)、「充実していた」(11人:18.6%)、「1年生とのコミュニケーションがとれた」(6人:10.2%)、「成長できた」(6人)、「感謝の気持ち」(5人:8.5%)、「参加できて良かった」(5人)と続き、表1の成功した項目と共通しており、肯定的な意見が多かった。

表1. 成功、失敗、工夫、努力した項目

項目	成功	失敗	工夫	努力
レクリエーション	32 (54.2)	23 (39.0)	30 (50.8)	17 (28.8)
時間配分	12 (20.3)	14 (23.7)	11 (18.6)	4 (6.8)
キャンプファイヤー	11 (18.6)	3 (5.1)	3 (5.1)	3 (5.1)
怪我の有無	7 (11.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
スタッフ同士の連携	6 (10.2)	6 (10.2)	7 (11.9)	8 (13.6)
1年生への配慮・交流	4 (6.8)	9 (15.3)	7 (11.9)	11 (18.6)
1年生同士の交流	3 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
野外炊事	2 (3.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.7)
ハイキング	1 (1.7)	2 (3.4)	2 (3.4)	3 (5.1)
体調面の配慮	0 (0.0)	10 (16.9)	4 (6.8)	4 (6.8)
連絡	0 (0.0)	5 (8.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
注意事項の確認	0 (0.0)	3 (5.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
雰囲気づくり	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (10.2)	7 (11.9)
指導力・方法	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (6.8)	2 (3.4)
天候不良への対応	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (6.8)
事前の準備	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (6.8)
しおりの作成	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。



写真3. 野外レクリエーションにおける学生スタッフのデモンストレーション(左写真)と指導(右写真)

2-2. 学生指導の反省・改善提案

表2は、学生指導に関連する反省および改善すべき項目をまとめたものである。

1年生のほとんどは未成年者であり、喫煙は許されない。もちろん、研修中は禁煙となっていた。しかし、喫煙する1年生がおり、その対応に苦労した様子がうかがえる。

2-3. 研修プログラムの感想・改善提案

表3は、研修プログラムに関連する感想および改善すべき項目をまとめたものである。

「プログラム通りが順調にいった」が最も多く(10人:16.9%)、上手くできなかったことおよび改善すべき項目についての指摘は少なかった。しかし、上手くできなかったことでは、「キャンプファイヤーができず残念」と「雨天時の対応をレクリエーションに頼りすぎた」をそれぞれ3人が、改善すべき項目に「雨天時の対応をしっかりと考えておく」を5人(8.5%)が挙げていた。

表2. 学生指導に関連する反省および改善すべき項目

上手くできたこと	
1年生が指示を聞いてくれた	3(5.1)
「大きな拍手」が役立った	2(3.3)
時間厳守の徹底	1(1.7)
点呼の徹底	1(1.7)
部屋での過ごし方についての指導	1(1.7)
急な事態への対応	1(1.7)
上手くできなかったこと	10(16.9)
禁煙指導が徹底できなかった	5(8.5)
時間厳守を徹底できなかった	5(8.5)
厳しい指導ができなかった	4(6.8)
睡眠時間についての指導ができなかった	3(5.1)
ごみの分別が徹底できなかった	2(3.3)
分かりやすい説明ができなかった	2(3.3)
服装への指導が徹底できなかった	1(1.7)
スタッフ同士の衝突が多かった	1(1.7)
改善すべき項目	
メリハリをつける	6(10.1)
部屋での過ごし方について指導	4(6.8)
1年生の見本になる行動	2(3.3)
レクリエーションのメッセージ性を理解させる	2(3.3)
班行動を徹底させる指導	1(1.7)
喫煙への対応	1(1.7)
スタッフの意思統一	1(1.7)
規則違反の学生に対する対応のレクチャー	1(1.7)
入浴時間についての指導	1(1.7)
学生スタッフへの指導	1(1.7)
スタッフによる状況把握	1(1.7)
監視・巡回の増加	1(1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

2-4. 運営方法への感想・改善提案

表4は、研修の運営方法に関する感想および改善すべき項目をまとめたものである。

表3でも示されたように、上手くできたことでは、「予定通り進んだ」が多く(9人:15.3%)、次いで「先生方が積極的に動いてくれた」(5人:8.5%)であった。一方、運営が上手くできなかったことの記述は少なかった。改善すべき項目の第1位は、「雨天時のタイムスケジュールをしっかりとった方が良い」(6人:19.2%)であった。

2-5. 引率体制・施設などへの感想・改善提案

表5は、引率体制・施設などへの感想および改善すべき項目をまとめたものである。

上手くできなかったことや上手くできたことの指摘は、比較的少なかった。一方、改善すべき項目は、個々の項目では件数は少なかったが、研修センターの施設・備品に関するものを合計すると11人(18.6%)となった。

表3. 研修プログラムに関連する感想および改善すべき項目

上手くできたこと	
プログラム通り順調にいった	10(16.9)
ハイキングの後の休憩時間が十分にあった	2(3.4)
入浴の時間を多く取れた	1(1.7)
プログラムが充実していた	1(1.7)
時間で区切りながら進められた	1(1.7)
上手くできなかったこと	
キャンプファイヤーができず残念だった	3(5.1)
雨天時の対応をレクリエーションに頼りすぎた	3(5.1)
予定通りいかなかった	1(1.7)
ハイキングとキャンプファイヤーを同日にやるのは疲れる	1(1.7)
就寝時間が遅くなってしまった	1(1.7)
レクの時間が押した	1(1.7)
1年生がしおりに目を通していない	1(1.7)
時間に余裕が無かった	1(1.7)
レクリエーションの時間が長すぎた	1(1.7)
改善すべき項目	
雨天時の対応をしっかりと考えておく	5(8.5)
入浴の時間を少し早くした方が良い	2(3.4)
雨天時のハイキングの時間を短くした方が良い	2(3.4)
キャンプファイヤーのクールダウンの時間に歌を入れた方が良い	1(1.7)
雨天時に工作ができると良い	1(1.7)
バーベキューの時間を長くした方が良い	1(1.7)
休憩時間を増やした方が良い	1(1.7)
開校式は外で良かった	1(1.7)
入浴の時間を長くした方が良い	1(1.7)
通常と雨天時のプログラムをはっきり区別させた方が良い	1(1.7)
雨天時用の体育館があった方が良い	1(1.7)
ハイキングの後に入浴できるようにした方が良い	1(1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

表4. 運営方法に関連する感想および改善すべき項目

上手くできたこと	
予定通り進んだ	9(15.3)
先生方が積極的に動いてくれた	5(8.5)
時期的にちょうど良いと感じた	4(6.8)
雨天時の対応ができた	3(5.1)
ミーティングをしっかりとできた	1(1.7)
1年生主体にできた	1(1.7)
夜の引率者会議があって良かった	1(1.7)
上手くできなかったこと	
司会が上手くできなかった	2(3.4)
レクリエーションが準備不足だった	1(1.7)
緩い雰囲気をつくってしまった	1(1.7)
リーダーと副リーダーに頼りすぎた	1(1.7)
作業の分担が上手くできなかった	1(1.7)
副リーダーの役割が少なかった	1(1.7)
入浴時間に関する説明が不足していた	1(1.7)
鉄板掃除の確認が各班スタッフで良かった	1(1.7)
1年生主体が徹底できなかった	1(1.7)
1年生の班をランダムに振り分けて良かった	1(1.7)
連絡ミスが多かった	1(1.7)
声かけが足りなかった	1(1.7)
改善すべき項目	
雨天時のタイムスケジュールをしっかりとした方が良い	6(10.2)
スタッフは15分前行動くらいを心がけた方が良い	1(1.7)
司会は台本を作った方が良い	1(1.7)
1日目のレクリエーション後に備品の確認が必要	1(1.7)
雨天時用の体育館があった方が良い	1(1.7)
メリハリが必要	1(1.7)
スタッフと先生の念入りな対話が必要	1(1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

2-6. 次年度の学生スタッフに対するアドバイス

表6は、次年度の学生スタッフに対するアドバイスをまとめたものである。

表1～表5で指摘された通り、「レクリエーションの予備種目の用意」(14人:23.7%)、「雨天時の対応を準備」(11人:18.6%)、「レクリエーションの練習」(8人:13.6%)、「選曲はみんなが歌えるものにする」(3人:5.1%)といった、レクリエーション関連のアドバイスが多かった。

さらに、「1年生とのコミュニケーションを欠かさない」(11人:18.6%)、「1年生が主体となるように気をつける」(7人:11.9%)、「ハイキング中は1年生の行動に注意する」(5人:8.5%)、「一人ひとりに気を配る」(3人:5.1%)など、1年生に対する学生スタッフの気配りが多く挙げられた。さらに、「ミーティングをきちんと行う」(11人:18.6%)、「スタッフ同士で情報を共有する」(7人:11.9%)と、密な情報交換と意思疎通の重要性の指摘が多かった。加えて、「時間の余裕をもって行動する」と「体調管理に注意する」(いずれも9人:15.3%)も多かった。

表5. 引率体制・施設などへの感想および改善すべき項目

上手くできたこと	
先生方に感謝	3(5.1)
スタッフ同士仲良くなれた	2(3.4)
1年生が楽しんでくれると嬉しい	2(3.4)
1年生と仲良くなれた	1(1.7)
勉強になった	1(1.7)
キャンドルサービスは感動した	1(1.7)
レクリエーションを盛り上げられた	1(1.7)
上手くできなかったこと	
1年生とコミュニケーションを取れなかった	1(1.7)
鉄板のチェックが厳しすぎる	1(1.7)
スタッフの睡眠時間が短かった	1(1.7)
改善すべき項目	
防虫対策をして欲しい	2(3.4)
洗面所の網戸が破れていた	2(3.4)
研修室をもっと快適にして欲しい	2(3.4)
スタッフ同士のコミュニケーションは大切である	2(3.4)
雨天時の掃除場所について先生方の意見が知りたかった	2(3.4)
プログラムをもっと早く知りたかった	2(3.4)
日程調整が必要	2(3.4)
雨天時の体育館が必要	2(3.4)
風呂を増設した方が良い	1(1.7)
個室の風呂が汚い	1(1.7)
そば製の枕はやめた方が良い	1(1.7)
臨機応変に対応できるようにする	1(1.7)
野外炊事の際に薪や炭を入れすぎない方が良い	1(1.7)
しおりの内容を変えた方が良い	1(1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

考察

赤城研修は、東京福祉大学(伊勢崎キャンパス)の新1年生を対象に2005年に開始され、2008年には池袋キャンパスの学生、2011年には池袋日本語別科(留学生)学生、2012年からは名古屋キャンパスの学生・日本語別科学生を対象にした研修も始まり、全学的な取り組みが完成した。学生および引率教職員を合わせると、参加人員は1,400人を越え、東京福祉大の最大の行事として定着している。2014年の伊勢崎キャンパスの研修は10回目の記念となったが、これを象徴するのが、学長、副学長、学部長が、全日程あるいは部分日程で参加したことであろう。

本研修は、教職員が学生を引率して、あらかじめ決められたスケジュールで研修を行うのではなく、研修プログラムの基本線は設定されているものの、その範囲で学生スタッフが主体となって自由に研修内容を企画・実施することが可能である。大学が行う新入生対象の宿泊研修のほとんどは、新入生同士および教職員間との意思疎通を図るこ

表6. 次年度の学生スタッフに対するアドバイス

レクリエーションは予備を多めに用意した方が良い	14 (23.7)
雨天時の対応を準備しておく	11 (18.6)
ミーティングをきちんと行う	11 (18.6)
1年生とのコミュニケーションを欠かさない	11 (18.6)
時間に余裕を持って行動する	9 (15.3)
体調管理に注意する	9 (15.3)
レクリエーションは練習の数をこなす	8 (13.6)
スタッフ同士で情報を共有する	7 (11.9)
1年生が主体になるよう気をつける	7 (11.9)
ごみの分別を徹底する	6 (10.2)
ハイキング中は1年生の行動に注意する	5 (8.5)
入浴時間は周知させる	5 (8.5)
準備には早く取り掛かる	5 (8.5)
しおりの作成に時間がかかるので注意する	5 (8.5)
ルールを徹底する	3 (5.1)
選曲はみんなが歌えるものにする	3 (5.1)
麦茶はこまめにチェックする	3 (5.1)
一人ひとりに気を配る	3 (5.1)
お菓子を多めに持っていく	2 (3.4)
早い就寝を心がける	2 (3.4)
しおりは熟読させる	2 (3.4)
タイムキーパーを決めておく	2 (3.4)
配膳担当を決めた方がよい	2 (3.4)
鉄板をきれいにする	2 (3.4)
大きい声を心がける	2 (3.4)
忘れ物に注意する	1 (1.7)
スタッフで統一のTシャツを着ると統一感が出て良い	1 (1.7)
つなぎの色は霧の中でも目立つ色にする	1 (1.7)
スタッフの仕事量は平等にする	1 (1.7)
来たくないと思っている子もいることを忘れない	1 (1.7)
起床時間に放送を流す方がよい	1 (1.7)
ファブリーズを持って行った方がよい	1 (1.7)
消灯後の巡回を定期的に行う	1 (1.7)
時計を必ず身に付ける	1 (1.7)
困ったことがあればすぐ先生に相談する	1 (1.7)
上履きをきちんと履くように指導する	1 (1.7)
チェックアウト時の片付けを徹底する	1 (1.7)

59人の複数回答。()内はパーセント。

とを目的とするものである(目黒ら, 2005; 佐伯ら, 2008)。しかし、学生主体のプログラム企画が行われる東京福祉大学における宿泊研修は、全国的にもユニークな取り組みであるといつてよい。

東京福祉大学の建学の精神は、「Academic and Practical: 理論的・科学的な能力と実践応力を統合し、柔軟な思考力と問題発見・解決能力のある人材を育成する」である。赤城研修の学生スタッフとして参加した福祉・教育・心理職を目指す学生にとっては、日々変化する自然環境の中での活動

体験を通して、柔軟な対応力、学生スタッフ同士および1年生との仲間作り、1年生・教職員とのコミュニケーション能力の醸成、思いやりと互助精神の高まり、環境保全への意識向上に役立つはずである。さらに、2年生の学生スタッフの活動を実感することで、1年生は成長する自分の将来像を予測し、自己実現力の向上に役立てることができるはずである。まさに、赤城研修は、本学の建学の精神を具現化する場であると言っても過言ではない。

これらの点を念頭において、次年度以降の赤城研修をさらに有意義に進めていく目的で、本報告では、主に4項目からなる質問に対する学生スタッフのアンケート結果を集計し、分析した。

第1の『成功・失敗・工夫・努力したこと』では、いずれもレクリエーションに関連するもので、学生スタッフがレクリエーション活動に重点的に取り組んでいたことがうかがえる。この点については、学生スタッフ向けに、5月6日に伊勢崎キャンパスで実施した、レクリエーションワークの専門指導者による事前指導を非常に熱心に受けていたこと、および赤城山頂にて5月18・19日の1泊2日で行った事前研修においても、学ぶ姿勢が強く感じられたことが挙げられる。また、学生スタッフは、昨年度は1年生として研修に参加して先輩の活躍を目にしており、1年生とのコミュニケーションを図って、よりよいレクリエーション活動をしようにする意気込みを持って、スタッフに応募したことが考えられる。その結果が、成功裏に終われば、楽しかった、充実していた、成長できた、感謝の気持ちといった肯定的な気持ちにつながったと考えられる。一方で当然のことであるが、高い目標を持てば持つほど自己評価は厳しくなる。このことが、説明不足、コミュニケーション不足、指導力不足、時間配分の問題、準備不足の回答が多かったことにつながったと思われる。

第2の『学生指導の反省・改善提案』はおおむね良好といえるが、集団生活を円滑に行うため、ルール遵守の指導力を高めること、およびメリハリをつけることに学生スタッフが苦勞した様子を示している。特に、喫煙の問題が気になるところである。1年生のほとんどは未成年者であって喫煙は許されず、研修中は禁煙となっていた。しかし現実には、本研修に参加した1年生に対する入学直後の2014年4月に実施した喫煙率調査では、男子学生が8.4% (30/239人)、女子学生が8.2% (27/330人)であり(栗原, 未発表データ)、喫煙率は私立大学1年生の平均値5.6% (社団法人日本私立大学連盟, 2011)よりかなり高い。喫煙に対する指導を学生スタッフに任せることには限界があり、そもそもこれは赤城研修だけの問題ではない。日頃の授業が行われるキャンパス内を含めた、全学的な取り組みが必要である。

第3の『研修プログラムの感想・改善提案』、および第4の『運営方法への感想・改善提案』では、『成功・失敗・工夫・努力したこと』でも挙げられたが、いずれも研修プログラムの実施に関する項目が多かった。また、3グループ以降の研修では、雨天によりプログラム変更が余儀なくされたことを反映している。天候不順時はやむを得ないが、それへの対応を綿密に準備することの重要性を示している。

第5の『引率体制・施設などへの感想・改善提案』はおおむね良好といえる。いくつかの問題点はあったものの、赤城研修そのものの日程については、2005年～2014年の10回にわたる研修を通しておおむね順調に実施されてきた。しかし、赤城山研修センターの施設・備品に関するものを総合すると、問題点がないわけではない。例えば、2005年の赤城研修は、水道施設の故障による中断(後日、不足分を実施)・延期を余儀なくされ、2011年3月の東日本大震災では、研修センター建物東側の土留めのコンクリートにひび割れが発生した。さらに、2014年は実習開始前に空調用ラジエーターの配管から水漏れが発見された。これらは、赤城山頂の標高1,370mの地であって、周囲を山林に取り囲まれた研修センターの立地条件にもよるところが大きいが、施設の老朽化や構造上の問題が関係しており、大学側として対応すべき課題である。施設に関する赤城研修学生スタッフのアンケート結果としては、件数は少なかったが、本研修の様々な面を浮き彫りにしており、対応を図る必要があるといえる。

また、学生スタッフアンケートでは触れられていないが、国際化を見据えて留学生の受け入れを進めている本学において赤城研修を全学的に取り組むためには、このような施設・運営面の配慮に加えて、アレルギー、障害、医療的配慮の必要な学生、外国人など食事等に配慮が必要な学生の増加への対応も十分でなく、早急に整備すべき重点項目の一つである。

最後に『次年度の学生スタッフに対するアドバイス』では、すでに指摘された通り、レクリエーションに関連する項目、人間関係の構築、密なコミュニケーション、安全・健康管理が多かった。これらのアドバイスは、レクリエーション種目はともすると、晴天時の野外活動を想定して企画しがちであるが、雨天時に室内でも実施可能な種目を準備することの重要性を指摘するものである。加えて、スタッフ内のチームワークや1年生との交流・配慮など、研修スタッフ(引率者)としての意識を高めることの大切さも指摘している。これらの点については、外部講師の事前指導でも強く強調されていることであり、学生スタッフはこの時点で強く認識したと思われる。もちろん、

これらアドバイス事項の大部分は、学生スタッフによる研修プログラムの企画と実践の中で浮かび上がってきた様々な問題点、およびそれらへの対応と解決の経験を強く反映したものであり、次年度の研修において、学生スタッフのみならず、引率する教職員にとっても大いに指針になる。

なお、学生スタッフ、1年生および引率教員における赤城山宿泊研修に対する思いについては、Voyage 大海へ(東京福祉大学広報誌)に掲載された座談会(栗原ら, 2010)が参考になる。

高等教育環境の中で持ち上がってきた問題で深刻な長期欠席、休・退学といった修学不調の主要原因として、学習意欲の喪失、人間関係、関心の移行、不本意入学といった消極的理由が挙げられている(内田(2006, 2008, 2011))。2泊3日の赤城研修を通して、学部・専攻・クラスを共にする学生が先輩・教職員と一緒に野外活動・レクリエーション活動を行った経験は、学生間および学生と教職員間の絆を深め、修学不調の防止に役立つことが期待される。さらに、赤城研修の経験は、在学中はもとより、卒業後も大学生活のよき思い出として一生残るはずである。これらの点こそ、赤城研修が東京福祉大学の伝統行事として正のスパイラルを描いて継続されている原動力であるといえる。

今後は、研修に参加した1年生のアンケートの精査・分析を通して、よりよい研修の実施策を検討していきたい。

結論

平成26(2014)年度赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)が、記念すべき第10回を迎えたことから、引率教職員とともに研修実施の中心的役割を果たした学生スタッフのアンケート結果をもとに、研修の意義と課題をまとめた。

学生スタッフは、レクリエーションワークの企画や実行に苦心しつつも、その成果に強い満足を感じ、かつ自己実現力の向上に自信を深めたようである。次年度のスタッフへのアドバイスとして、研修について失敗した事項や改善点も指摘している。本調査で得られた学生スタッフのアンケート結果では、研修の指導経験を通して、自らの資質を高めようとする姿が浮き彫りにされた。

謝辞

平成26年度 東京福祉大学(伊勢崎キャンパス) 赤城山宿泊研修にご参加・ご協力いただいた全教職員に深謝いたします。

文献

- 厚生労働省(2007)：ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究. 厚生労働省, 東京.
- 栗原 久(2007)：なるほど赤城学 ―赤城山の自然、歴史・文化―. 上毛新聞社, 前橋.
- 栗原 久(2010)：赤城山宿泊研修の意義 ～実行専門委員会委員長の談話～. *Voyage 大海へ*(東京福祉大学広報誌) **2010. 春夏合併号**, 1.
- 栗原 久・佐々木貴雄・春原路人ら(2010)：赤城山宿泊研修教員・学生座談会. *Voyage 大海へ*(東京福祉大学広報誌) **2010. 春夏合併号**, 2.
- 栗原 久(2013)：赤城山宿泊研修 全学的取り組みの完成!! *Voyage 大海へ*(東京福祉大学広報誌) **2013. 夏号**, 1.
- 目黒 力・北川公路・江口勝彦ら(2004)：理学療法学科新入生宿泊研修における教育効果 ―学生・教員アンケート結果からの考察―. *群馬パース学園短期大学紀要* **6**, 53-60.
- 文部科学省(2011)：平成23年度学校基本調査. 文部科学省, 東京.
- 日本中退予防研究所(2010)：中退白書 2010. NEWVERY, 東京.
- 佐伯英人・石原高志・二橋正宏ら(2008)：集団宿泊的行事の教育効果に関する研究 (II). *国立青少年教育振興機構研究紀要* **8**, 25-35.
- 社団法人日本私立大学連盟(監修)(2011)：私立大学学生生活白書 2011. 社団法人日本私立大学連盟学生委員会額生活実態調査分科会, 東京, pp12-15.
- 内田千代子(2006)：国立大学の休・退学、留年学生および志望に関する調査 ―精神科医から見たサポートの必要性―. *国立大学マネジメント* **2**, 27-32.
- 内田千代子(2008)：大学生における休・退学、留年学生に関する調査 第28報. 「休・退学、留年学生調査」事務局(茨城大学保健管理センター内), 水戸.
- 内田千代子(2011)：大学生における休・退学、留年学生に関する調査 第31報. 「休・退学、留年学生調査」事務局(茨城大学保健管理センター内), 水戸.

The Results and Issues of Summer Seminar of Tokyo University of Social Welfare (Iseaki Campus)

1. Analyses of the Questionnaire Answers from the Student Stuffs of Second Grade

Hisashi KURIBARA^{*1}, Ryuichi KOMATA^{*2}, Takao SASAKI^{*3}, Ken KOKI^{*3}, Motoyuki OGINO^{*3},
Koji MINO^{*3}, Hiroshi OKAMURA^{*3}, Masao IIDA^{*3}, Takashi KAMIMURA^{*3}, Katsuhiko KITADUME^{*3},
Tomokazu ONO^{*2}, Tatsuya ISHIZAKI^{*2}, Hitomi SAITO^{*4}, Masato MORI^{*1}, Masaki SAITO^{*1},
Haruka KANO^{*5}, Yuichi NAKAJIMA^{*5}, Takahiro KANAI^{*6} and Arisa NAKAJIMA^{*6}

*1 Junior College, *2 School of Education, *3 School of Social Welfare,
*4 School of Psychology, *5 Department of General Affairs and
*6 Department of School Affairs, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : The purpose of this research was to find out the results and problems of Summer Seminar of Tokyo University of Social Welfare at Mt. Akagi from the questionnaire answers of the student stuffs of second grade. The stuffs tried to do the best performance in the recreation works, although there were many difficulties. Of course, they also pointed out many items which should be improved. The effort of student stuffs results in satisfaction, promotion of confidence and self-realization. These questionnaire answers emphasis the meaning of summer seminar, and present important suggestions for endurance of this activity as the traditional event of Tokyo University of Social Welfare.

(Reprint request should be sent to Hisashi Kuribara)

Key words : Tokyo University of Social Welfare, Summer Seminar at Mt. Akagi, Student stuffs, Questionnaire

東京福祉大学赤城山宿泊研修の成果と課題

その2. 1年生のレポート記述の分析

栗原 久^{*1}・佐々木貴雄^{*2}・古俣龍一^{*3}・森 正人^{*1}・小野智一^{*3}・幸喜 健^{*2}・上村孝司^{*2}・
飯田昌男^{*2}・岡村 弘^{*2}・荻野基行^{*2}・三野宏治^{*2}・北爪克洋^{*2}・石崎達也^{*3}・斉藤雅記^{*1}・
斎藤 瞳^{*4}・狩野晴香^{*5}・中嶋裕一^{*5}・金井孝博^{*6}・中嶋有沙^{*6}

*1 東京福祉大学 短期大学部・*2 社会福祉学部・*3 教育学部・

*4 心理学部・*5 総務課・*6 教務課(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 伊勢崎市山王町2020-1

(2014年11月13日受付、2014年12月11日受理)

抄録: 東京福祉大学赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)に参加した1年生のレポートの記述内容から、研修の企画と実施に関わるキーワードを抜き出して集計し、成果と課題について分析した。研修に参加してみると、2年生の学生スタッフ企画および1年生自らが企画したレクリエーション、キャンプファイヤーが楽しかった、ハイキングは疲れたが達成感と自信を持てた、研修全体を通してクラス・専攻の学生間で仲間意識が高まったなど、肯定的な意見が多かった。さらに、学生スタッフの活躍を見て、自らの成長と将来の姿を実感することができたようで、来年度研修で学生スタッフを希望する学生も少なくなかった。これらの結果は、1年生が学生生活を進めるに当たって、赤城山宿泊研修の意義を認めていることを示唆している。

(別刷請求先: 栗原 久)

キーワード: 東京福祉大学、赤城山宿泊研修、1年生、研修レポート

緒言

東京福祉大学(伊勢崎キャンパス)から北北西方向に、広大な裾野を広げた赤城山(標高1,828m:黒檜山)の勇姿を望むことができる(栗原, 2007)。赤城山頂の自然環境に恵まれた標高約1,370mの地に、東京福祉大学赤城山研修センターがある。

新1年生を対象にした東京福祉大学赤城山宿泊研修(以下、赤城研修)は、赤城山研修センターが開設された2005年にスタートした。2013年には伊勢崎、池袋、名古屋キャンパスの大学、短期大学部の1年生、および日本語別科2年生全員が参加する全学的な取り組みとして発展し、本学最大の行事として定着してきた(栗原, 2013)。特に、2014年の伊勢崎キャンパス研修は、10回目の記念となった。

赤城研修の特徴は、バーベキュー、ハイキング、キャンプファイヤー、アカデミックアドバイザー(担任)との集いといった研修プログラムの基本的内容はあらかじめ設定されているが、2年生の学生スタッフが主体となってレクリエーションの内容を自由に企画・運営し、かつ新1年生もプログ

ラムの企画・実施を一部担当することにある(栗原ら, 2010)。これらの活動を通して、新1年生間は連帯感を高め、学生スタッフとの学年を越えた交流、そして学生と教職員間の親密度と意思疎通を図ることが期待されている。このように、赤城研修は本学にとって主要な行事であり、かつ学生スタッフ主体の研修活動の実施は全国的にもユニークな取り組みであるといえる。

赤城研修が10年の節目を迎え、新たな段階に一步を踏み出すことから、その成果と問題点をまとめて、より効果的な取り組みのヒントを得ることは意義深いと思われる。先の報告(栗原ら, 2015a)では、学生スタッフの立場から、赤城研修の成果と問題点をまとめた。学生スタッフはレクリエーションの企画や実行に苦心したが、その活動によって1年生が喜んでくれたことに強い満足を感じ、研修を通して自己実現力の向上を意識して自信を深めることに役立つとの記述が多かった。

本報告では、新1年生の立場からみた赤城研修について、伊勢崎キャンパスの学生を対象に、赤城研修の最後に提出してもらったレポートの内容を集計・分析した。

調査対象および方法

対象者

表1は、平成26年度東京福祉大学赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)に参加した1年生、2年生学生スタッフ、引率教職員、看護師の内訳である。このうち、1年生366人(男子148人、女子218人)から提出された研修レポートを調査・分析の対象とした。

研修スケジュール

1) 本研修前

- 2014年4月 入学
- 2014年5月中旬 1回目オリエンテーション
(研修概要の説明、班編成)
- 2014年5月下旬 2回目オリエンテーション
(しおり配布、研修プログラムの説明)

2) 本研修

本研修は2014年5月31日～6月12日の間に、各グループとも2泊3日で実施された。

研修のスケジュールは、グループ間で若干の違いはあるが、基本的な流れは以下の通りである。

研修1日目

- 10:00 東京福祉大学(伊勢崎キャンパス)出発
(バス内で、学生スタッフ企画のゲーム)
- 11:30 赤城山頂到着・昼食
- 12:30 研修センター到着
- 13:00 開校式
- 13:30 レクレーションI (野外。雨天時は室内)
(学生スタッフ企画)
- 15:15 チェックイン
- 16:00 夕食(バーベキュー)

- 19:00 アカデミックアドバイザーとの集い
- 21:00 リーダー会議
- 22:00 点呼・消灯・就寝

研修2日目

- 6:30 起床
- 7:00 朝の集い・朝食
- 8:15 清掃
- 9:00 ハイキング・昼食(弁当)
- 18:00 夕食
- 19:00 キャンプファイヤー(雨天時はキャンドルの集い)・レクレーション(1年生企画あり)
- 21:00 リーダー会議
- 22:00 点呼・消灯・就寝

研修3日目

- 6:30 起床
- 7:00 朝の集い・朝食
- 8:15 清掃
- 8:45 チェックアウト
- 9:00 レクレーションII (野外。雨天時は室内)
(学生スタッフ企画)
- 11:00 研修レポート作成
- 12:00 昼食
- 12:45 閉校式
- 13:00 研修センター出発
- 15:00 東京福祉大学(伊勢崎キャンパス)到着

レポートの回収・分析

研修3日目のレクレーションIIと昼食の間の1時間の中で、1年生には赤城研修をめぐって、以下の2つのテーマを提示してレポート作成を課した。

- 1) 仲間作り
- 2) 指導者としての立場・目線

表1. 平成26年度東京福祉大学赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)における参加者の内訳

グループ名	専攻	1年生 (男, 女)	学生スタッフ (男, 女)	引率教員 (男, 女)	事務職員 (男, 女)	看護師 (女性)	合計 (男, 女)
グループ①	社会福祉 精神保健福祉	40 (24, 16) 20 (8, 12)	9 (5, 4)	6 (4, 2)	2 (1, 1)	1	78 (42, 36)
グループ②	心理	67 (28, 39)	9 (3, 6)	6 (3, 3)	3 (2, 1)	1	86 (36, 50)
グループ③	教育(CD)	52 (27, 25)	11 (4, 7)	5 (3, 2)	3 (2, 1)	1	72 (36, 36)
グループ④	教育(AB)	50 (26, 24)	11 (5, 6)	6 (4, 2)	3 (2, 1)	1	71 (37, 34)
グループ⑤	介護福祉 経営福祉 子ども	27 (13, 14) 1 (1, 0) 39 (2, 37)	10 (4, 6)	7 (4, 3)	2 (1, 1)	1	87 (25, 62)
グループ⑥	保育児童	70 (19, 51)	9 (4, 5)	6 (3, 3)	2 (1, 1)	1	88 (27, 61)
		366 (148, 218)	59 (25, 34)	36 (21, 15)	15 (9, 6)	6	482 (204, 279)

レポートの記述から、研修の活動に対する評価、指導者としての立場・目線、その他に関連する語句を抜き出し、同類の内容を集計した。

個人情報の保護

アンケート用紙には、個人名、学部・学科・専攻に関する項目はあった。しかし、記述内容の集計および分析において、個人名が特定されないこと、また、記述内容から、個人が利害を受けることのないよう配慮した。

結果

1. 研修の実施状況

各グループとも、遅刻・欠席は皆無であった。また、発熱のため研修2日目で途中帰宅した1名を除いた全員が、2泊3日にわたる研修の全プログラムを完了した。

ただし、研修プログラムのうち、バーベキュー、ハイキング、キャンプファイヤーを予定通り実施できたのはグループ①およびグループ②のみであった。グループ③～⑥は入梅で雨天が続いたため、バーベキューの中止、ハイキング

は短縮コースに変更、キャンプファイヤーからキャンドルの集いへの変更があった。レクリエーションも、本来は野外での実施を基本としていたが、室内での実施に変更することがあった。

写真1～4は、研修の様子を示す写真である。

2. レポートの集計結果

1年生の研修レポートは、すでに述べたように、発熱のため研修2日目で途中帰宅した1名を除いた366人(男子149人、女子217人)から得られた。

レポート内容は、天候によるプログラムの変更などを考慮して、天候が良好で全プログラムが実施されたグループ①・②、および雨天でプログラムの変更があったグループ③～⑥に分け、男女別に集計した。

2-1. 研修に対する満足度

研修に参加してよかったとの記述が、グループ①・②およびグループ③～⑥とも、男女に関係なくほぼ100%のレポートに認められた。ただし、この点については、レポートが記名であるため、問題点の指摘はしにくい可能性がある。



写真1. バーベキュー風景



写真3. キャンプファイヤー風景



写真2. ハイキング風景(覚満淵)



写真4. レクリエーション風景

2-2. 活動に関する評価

表2は、レポートの記述から、研修の活動に関する評価を、男女総合の頻度順にまとめたものである。

グループ①・②およびグループ③～⑥とも、「協力する姿勢の向上」、「一緒に行くことの大切さを認識」、「性別・専攻・クラスを超えた仲間作り」の回答が男女とも多かつ

た。男女間では、「達成感・充実感」、「積極的に参加する姿勢の向上」、「他人への気配りの向上」を挙げる割合が、女子学生に多いことが目立った。

グループ①・②とグループ③～⑥の比較では、著しい差異はなかった。

表2. 活動に関する評価(複数回答)

	合計	男子	女子
グループ①・②(男子60人、女子67人)			
1. 協力する姿勢の増強	101 (79.5)	46 (76.7)	55 (82.1)
2. 一緒に行くことの大切さを認識	85 (66.9)	40 (66.7)	45 (67.2)
3. 性別・専攻・クラスを超えた仲間作り	70 (55.1)	28 (46.7)	42 (62.7)
4. 達成感・充実感の醸成	31 (24.4)	13 (21.7)	18 (26.9)
5. 仲間のいることの重要性を認識	30 (23.6)	6 (10.0)	24 (35.8)
5. 積極的に参加する姿勢の向上	20 (15.7)	17 (28.3)	3 (4.5)
7. 自然環境と触れあえる	19 (15.0)	7 (11.7)	12 (17.9)
8. 信頼感・協調性の向上	16 (12.6)	5 (8.3)	11 (16.4)
9. 工夫して行動する意識の向上	9 (7.1)	3 (5.0)	6 (9.0)
10. コミュニケーション能力の向上	8 (6.3)	3 (5.0)	5 (7.5)
11. 他人に対する見方・評価の変化	7 (5.5)	3 (5.0)	4 (6.0)
11. 責任感の向上	7 (5.5)	4 (6.7)	3 (4.5)
13. 成長できた	6 (4.7)	3 (5.0)	3 (4.5)
13. 他人への気配りの向上	6 (4.7)	2 (3.3)	4 (6.0)
15. 自信がついた	5 (4.0)	1 (1.7)	4 (6.0)
16. ルール遵守意識の向上	4 (4.0)	2 (3.3)	2 (3.0)
16. 自分をさらけ出せる	4 (4.0)	3 (5.0)	1 (1.5)
16. 実行することの大切さを認識	4 (4.0)	4 (6.7)	0 (0.0)
19. 広い視野で物事を考えることができる	3 (2.4)	1 (1.7)	2 (3.0)
20. よい運動になる	1 (0.8)	0 (0.0)	1 (1.5)
グループ③～⑥(男子89人、女子150人)			
1. 協力する姿勢の増強	146 (61.1)	58 (65.2)	88 (58.7)
2. 一緒に行くことの大切さを認識	112 (46.9)	47 (52.8)	65 (43.3)
3. 性別・専攻・クラスを超えた仲間作り	66 (27.6)	18 (20.2)	48 (32.0)
4. 達成感・充実感の醸成	33 (13.8)	8 (9.0)	25 (16.7)
5. 積極的に参加する姿勢の向上	31 (13.0)	6 (6.7)	25 (16.7)
6. 仲間のいることの重要性を認識	27 (11.3)	11 (12.4)	16 (10.7)
7. 自然環境と触れあえる	17 (7.1)	7 (7.9)	10 (6.7)
7. 他人への気配りの向上	17 (7.1)	1 (1.1)	16 (10.7)
9. コミュニケーション能力の向上	15 (6.3)	6 (6.7)	9 (6.0)
10. 他人に対する見方・評価の変化	11 (4.6)	4 (4.5)	7 (4.7)
11. ルール遵守意識の向上	10 (4.2)	5 (5.6)	5 (3.3)
11. 自信がついた	10 (4.1)	1 (1.1)	9 (6.0)
13. 成長できた	9 (3.8)	2 (2.2)	7 (4.7)
14. 信頼感・協調性の向上	8 (3.3)	6 (6.7)	2 (1.3)
15. 責任感の向上	6 (2.5)	2 (2.2)	4 (2.7)
16. 実行することの大切さを認識	5 (2.1)	1 (1.1)	4 (2.7)
17. 広い視野で物事を考えることができる	4 (1.7)	0 (0.0)	4 (2.7)
18. 自分をさらけ出せる	2 (0.9)	2 (2.2)	0 (0.0)
19. 工夫して行動する意識の向上	1 (0.4)	1 (1.1)	0 (0.0)

() 内はパーセント。

2-3. 指導者としての立場・目線

表3は、研修を通して、指導者としての立場・目線を意識し、将来への展望について述べた内容を集計したものである。

グループ①・②およびグループ③～⑥の男女とも、「学生スタッフの活動のすばらしさを認識」、「レクリエーションの企画を通して、やりがいと難しさを認識」を挙げる割合が高かった。

特徴的なのは、グループ③～⑥では、男子・女子学生とも「予見・対応能力の学習」を、また、男子学生が「学生スタッフの活動から自分の能力向上を予想」を、女子学生が「活動における専門知識の習得」を挙げる割合が10%を越えたことである。天候不順の中で研修プログラムの変更を余儀なくされたことが、学生に様々な認識を育むことにつながった可能性がある。

2-4. その他の記述・意見

表4は、レポート中にあったその他の記載である。

グループ①・②の男女とも、「不安・乗り気でなかったが参加してよかった」が同程度の割合でみられた。また、

「来年、学生スタッフをやってみよう」が、グループ①・②では女子学生に、グループ③～⑥では男子学生に多かった。グループ③～⑥では、「体調管理が大切」の指摘があった。

さらに、グループ①・②では、「企画・運営が悪かった」、「安全面の配慮が足りなかった」という、研修への厳しい意見が、それぞれ1件ずつあった。

考察

本報告は、1年生の研修レポートに記載された語句をまとめたものであり、その集計と分析を通して、研修の成果と課題を明らかにすることができたと考えられる。具体的には、以下のように分類できる。

1. 研修に対する満足度

研修に対する満足度に関しては、参加してよかったとの記述が、グループ①・②およびグループ③～⑥とも、男女に関係なく、ほぼ全員のレポートに認められた。研修に対する期待度が高いことは無遅刻・無欠席であったことからう

表3. 指導者としての立場・目線(複数回答)

	合計	男子	女子
グループ①・②(男子60人、女子67人)			
1. 学生スタッフの活動のすばらしさを認識	75 (59.1)	38 (63.3)	37 (55.2)
2. 準備の大切さを認識	61 (48.0)	28 (46.7)	33 (49.3)
3. レクリエーションの企画を通して、やりがいと難しさを認識	58 (45.7)	28 (46.7)	30 (44.8)
4. 学生スタッフ・引率者の気配りを認識	20 (15.7)	10 (16.7)	10 (14.9)
5. 協力することの大切さを認識	12 (9.4)	3 (5.0)	9 (13.4)
5. 集団行動の意義の認識	12 (9.4)	6 (10.0)	6 (9.0)
7. 役割を果たす責任感の向上	11 (8.7)	8 (13.3)	3 (4.5)
8. 学生スタッフの活動から自分の能力向上を予想	10 (7.9)	5 (8.3)	5 (7.5)
8. 自分が楽しむことが大切	10 (7.9)	4 (6.7)	6 (9.0)
10. 予見・対応能力の学習	9 (7.1)	5 (8.3)	4 (6.0)
10. 活動における専門知識の習得	9 (7.1)	4 (6.7)	5 (7.5)
12. 経験の積み重ねが重要	6 (4.7)	2 (3.3)	4 (6.0)
グループ③～⑥(男子89人、女子150人)			
1. 学生スタッフの活動のすばらしさを認識	123 (51.5)	43 (48.3)	80 (53.3)
2. 予見・対応能力の学習	68 (28.5)	27 (30.3)	41 (27.3)
3. 学生スタッフ・引率者の気配りを認識	36 (15.1)	8 (9.0)	28 (18.7)
4. レクリエーションの企画を通して、やりがいと難しさを認識	35 (14.6)	10 (11.2)	25 (16.7)
5. 活動における専門知識の習得	29 (12.1)	3 (3.3)	26 (17.3)
6. 学生スタッフの活動から自分の能力向上を予想	23 (9.6)	11 (12.4)	12 (8.0)
7. 準備の大切さを認識	8 (3.3)	8 (9.0)	0 (0.0)
8. 経験の積み重ねが重要	7 (2.9)	3 (3.3)	4 (2.7)
8. 自分が楽しむことが大切	7 (2.9)	0 (0.0)	7 (4.7)
10. 集団行動の意義の認識	6 (2.5)	3 (3.3)	3 (2.0)
10. 役割を果たす責任感の向上	6 (2.5)	3 (3.3)	3 (2.0)
12. 協力することの大切さを認識	3 (1.3)	3 (3.3)	0 (0.0)

() 内はパーセント。

表4. その他の記述・意見(複数回答)

	合計	男子	女子
グループ①・②(男子60人、女子67人)			
1. 不安・乗り気でなかったが参加してよかった	35 (27.6)	10 (16.7)	25 (37.1)
2. 学生スタッフ・引率者に感謝	15 (11.8)	10 (16.7)	5 (7.5)
3. 来年、学生スタッフをやってみたい	7 (5.5)	1 (1.7)	6 (9.0)
4. 体調管理が大切	3 (2.4)	0 (0.0)	3 (4.5)
4. 授業では分からない体験	3 (2.4)	1 (1.7)	2 (3.0)
6. 人間関係の複雑さを認識	1 (0.8)	1 (1.7)	0 (0.0)
グループ③～⑥(男子89人、女子150人)			
1. 来年、学生スタッフをやってみたい	25 (18.0)	14 (15.7)	11 (7.3)
2. 不安・乗り気でなかったが参加してよかった	17 (12.2)	5 (5.6)	12 (8.0)
3. 学生スタッフ・引率者に感謝	14 (10.1)	10 (11.2)	4 (2.7)
4. 体調管理が大切	4 (2.9)	0 (0.0)	4 (2.7)
5. 群馬県の情報を知ることができた	2 (1.4)	2 (2.2)	0 (0.0)
6. 食堂の係員に感謝	1 (0.7)	1 (1.1)	0 (0.0)
6. 企画・運営が悪かった	1 (0.7)	1 (1.1)	0 (0.0)
6. 安全面の配慮が足りなかった	1 (0.7)	1 (1.1)	0 (0.0)

()内はパーセント。

かがえるが、その期待に応えるだけの研修内容であったことを示している。さらに、研修参加前は不安を抱いたり、乗り気でなかったりしても、参加してよかったとの意見も少なからずあった。これらの結果は、学生スタッフおよび引率教職員によるオリエンテーションが効果的で期待度を高め、研修プログラムが期待に即した形で実施されていたことを示唆している。ただし、研修に対する高い満足度については、そのまま信用するのは危険である。レポートが記名式であったため、問題点の指摘が難しい可能性があり、そもそも、問題点の指摘がレポート課題のテーマに含まれていなかった。問題点を把握するためには、無記名のアンケート調査を実施する必要があるだろう。

2. 活動に対する評価

特徴的なのは、グループ③～⑥では、男子・女子学生とも「予見・臨機応変能力の学習」を、また、男子学生が「学生スタッフの活動から自分の能力向上を予想」を、女子学生が「活動における専門知識の習得」を挙げる割合が10%を越えたことである。天候不順の中で研修プログラムの変更を余儀なくされたことに起因していると思われる。

一方、天候に恵まれたグループ①・②では、「自然環境に触れあえる」が高く、野外活動が研修の満足度を高める要因になっていることを示している。

「協力する姿勢の増強」、「一緒に行うことの大切さを認識」、「性別・専攻・クラスを越えた仲間作り」、「仲間のいることの重要性を認識」は、新1年生間は連帯感を高め、クラス・

専攻・学年を越えた交流を図り、学生と教職員間の親密度と意思疎通を図るという赤城研修の目的を、具体的に成果として示されているといえる。さらに、本学学生は消極的・対人過敏が強いことが以前から指摘されている(栗原ら, 2013, 2015b)。また、全国的に、孤立や学業意欲の低下から、修学不調(休・退学、留年)に陥る学生がかなりの割合で出現している(日本中退予防研究所, 2010; 文部科学省, 2011; 内田, 2011)。研修プログラムに参加して協力し合うことで積極性が高まり、さらに達成感・充実感は意欲の向上につながる。これらの成果は研修後も引き継がれ、交友関係の構築や困難な事態への対応能力の上昇に結びつき、大学生生活の充実、修学不調の防止に役立つと思われる。

3. 学生スタッフへの評価

「学生スタッフの活動のすばらしさを認識」、「レクレーションの企画を通して、やりがいと難しさを認識」、「学生スタッフ・引率者の気配りを認識」といった回答が多かった。これらの回答については、研修プログラムの充実と研修参加者の満足度と並行するといえよう。加えて、学生スタッフの活躍を実際に目にすることを通して、自分の将来の姿を予見し、目標設定と意欲向上につながると思われる。また、学生スタッフ・引率者の行動から、予見能力・臨機応変能力が高まり、教育職・福祉職を目指す本校の学生にとっては、在学中はもとより、卒業後の安全管理・他人への配慮が醸成されることにつながるだろう。もちろん、学生スタッフの活動およびその経験は次年度も継承されな

なければならない。この点については、「来年度、スタッフをやりたい」、「学生スタッフ・引率者に感謝」と記述した学生が少なくないことから、知識、指導技術の伝承・継続はうまくいくと思われる。

4. グループ間の差異

研修レポートの記述内容について、天候の影響と考えられる違いがグループ間で認められた。グループ①・②は天候に恵まれて、企画された研修プログラムを全て実施できた。一方、グループ③～⑥では、雨天のためプログラムの一部が変更となった。野外活動が天候に強く影響されることは必然的で、それへの対処能力が求められる。グループ③～⑥において、「予見・臨機応変能力の学習」の回答が多かった点は、雨天によるプログラム変更が適切に行われたことを示している。

また、グループ①・②はグループ③～⑥より、「不安・乗り気でなかったが参加してよかった」が高く、「来年、学生スタッフをやってみたい」が低かった。グループ①は精神福祉専攻と社会福祉の混成で、グループ②は心理学部の学生であり、グループ③～⑥とメンタル面の背景が異なることを反映している可能性がある。

5. 男女間の差異

「性別・専攻・クラスを越えた仲間作り」、「積極的に参加する姿勢の向上」、「達成感・充実感の醸成」、「他人への気配りの向上」、「学生スタッフ・引率者の気配りを認識」、「活動における専門知識の習得」の回答が女子学生に多いことは、友人関係の複雑さ、内向的性格などが背景にあり、そのことが赤城研修を通して緩和された可能性を示している。

一方、「来年、学生スタッフをやってみたい」が男子学生に多いのは、研修の満足度を次年度の新入生に伝えたいという意思表示といえよう。

6. 記名方式のレポートによる分析の限界

赤城研修の1年生レポートでは、研修に対する肯定的回答が多かった。しかし、批判的意見が全くないわけではなく、「企画・運営が悪かった」、「安全面の配慮が足りなかった」がそれぞれ1件ずつあった。今回のレポートは記名方式であったため、批判意見は出しにくい状況にあることを考慮しなければならない。無記名で回答を求めるアンケート方式を実施して、さらに、学生スタッフの意見(栗原ら, 2015a)を参考にして、研修の問題点を明確化することが必要であり、今後の検討課題である。

7. 継続への力

赤城研修(伊勢崎キャンパス)は2005年に開始され、2014年で10回目を迎えた。この間に、池袋キャンパス(大学、日本語別科)、名古屋キャンパス(大学、日本語別科)と全学的な取り組みとして拡大し、2014年の参加延べ人数は1,400人を越えた。学生スタッフが引率教職員と一緒に企画・運営するという全国の大学に誇れる研修は、学生スタッフの活動→1年生の満足・知識の伝承→次年度研修の拡充→・・・という正のスパイラルを描いて推移し、その流れが継続への推進力となり、さらに充実していくことが期待される。

結論

平成26(2014)年度東京福祉大学赤城山宿泊研修(伊勢崎キャンパス)に参加した1年生の研修レポートの記述内容につき、関連語句を集計して分析した。

大部分の1年生は研修参加に満足しており、1年先輩である学生スタッフの活動のすばらしさを多くの学生が認めていた。また、仲間のいることや協力して活動することの大切さを学習した。

これらの結果は、赤城研修が、クラス・専攻・学年を越えた仲間意識の醸成、学生生活の向上に意義があり、大学生活が正のスパイラルを描いて充実していく原動力となることを示している。

謝辞

平成26年度 東京福祉大学(伊勢崎キャンパス) 赤城山宿泊研修にご参加・ご協力いただいた全教職員に深謝いたします。

文献

- 栗原 久(2007): なるほど赤城学 ―赤城山の自然、歴史・文化―. 上毛新聞社, 前橋.
- 栗原 久・佐々木貴雄・春原路人ら(2010): 赤城山宿泊研修 教員・学生座談会. Voyage 大海へ(東京福祉大学広報誌) 2010. 春夏合併号, 2.
- 栗原 久(2013): 赤城山宿泊研修 全学的取り組みの完成!! Voyage 大海へ(東京福祉大学広報誌) 2013. 夏号, 1.
- 栗原 久・森 正人・守 巧(2013): 某短期大学学生の健康観と健康状態とのギャップ ―健康に関するスピーチ・作文と質問紙「健康チェック票THI」による評価―. 東京福祉大学・大学院紀要 3, 39-47.
- 栗原 久・古俣龍一・佐々木貴雄ら(2015a): 東京福祉大学赤

城山宿泊研修の成果と課題 その1. 2年生学生スタッフアンケート結果の分析. 東京福祉大学・大学院紀要 **5**, 83-92.

栗原 久・小野智一・佐々木貴雄ら(2015b): 質問紙「健康チェック票THI」からみた地方都市および大都市の大学生における健康度の比較検討. 環境福祉学会誌 **10**, 印刷中.

文部科学省(2011):平成23年度学校基本調査. 文部科学省, 東京.

日本中退予防研究所(2010): 中退白書 2010. NEWVERY, 東京.

内田千代子(2011): 大学生における休・退学、留年学生に関する調査 第31報. 「休・退学、留年学生調査」事務局(茨城大学保健管理センター内), 水戸.

The Results and Issues of Summer Seminar of Tokyo University of Social Welfare (Iseaki Campus)

2. Analyses of the Reports of the First Grade Students

Hisashi KURIBARA^{*1}, Takao SASAKI^{*2}, Ryuichi KOMATA^{*3}, Masato MORI^{*1}, Tomokazu ONO^{*3},
Ken KOKI^{*2}, Takashi KAMIMURA^{*3}, Masao IIDA^{*2}, Hiroshi OKAMURA^{*2}, Motoyuki OGINO^{*2},
Koji MINO^{*2}, Katsuhiko KITADUME^{*2}, Tatsuya ISHIZAKI^{*3}, Masaki SAITO^{*1}, Hitomi SAITO^{*4},
Haruka KANO^{*5}, Yuichi NAKAJIMA^{*5}, Takahiro KANAI^{*6} and Arisa NAKAJIMA^{*6}

*1 Junior College, *2 School of Social Welfare *3 School of Education,,
*4 School of Psychology, *5 Department of General Affairs and
*6 Department of School Affairs, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : The purpose of this research was to assess the Summer Seminar of Tokyo University of Social Welfare at Mt. Akagi from the reports of the first grade students. Key words and phrases written in the reports were picked up. The results showed that the students satisfied the participation to summer seminar, and they could construct the friendship, promote the confidence of him/her self, and image the future through the activities in the summer seminar. The present findings indicated an important role of summer seminar in the university life.

(Reprint request should be sent to Hisashi Kuribara)

Key words : Tokyo University of Social Welfare, Summer Seminar at Mt. Akagi, First grade student,
Report for the summer seminar

数学学習における後ろ向き推論例題の効果

佐々木隆宏

東京福祉大学 教育学部 (池袋キャンパス)

〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-14-2

(2014年10月14日受付、2015年2月12日受理)

抄録: 数学の問題解決では、演繹的、帰納的、類推的な考え方が用いられる。これらの考え方をを用いて数学の問題解決を行なう場合の推論の流れは、前向き推論と後ろ向き推論に分類することができる。前向き推論の流れは初期状態から目標状態へ向かう。一方、後ろ向き推論では目標状態から副目標を導くことが行われる。本研究では、数学の問題について、学習者が前向き推論のみの例解と、後ろ向き推論を組み合わせた例解で学習した場合の解答の差異を検討した。その結果、後者の方法は前者の方法よりも問題解決に有効であることが示唆された。

(別刷請求先: 佐々木隆宏)

キーワード: 問題解決、前向き推論、後ろ向き推論、高校数学

緒言

数学の学習は問題解決を伴うことが多い。学習者は問題の解法知識を教科書や参考書の例題から学ぶので、例題の質とその解法の説明、つまり、わかりやすさが問題となる。例題のわかりやすさは、例題を読む側の既有知識、例題に含まれる情報、および問題と解答の表現形式により差が生じると考えられる。特に、解答の表現形式は、学習者の思考過程に直接影響を及ぼす可能性が高い。また、2009 (平成21) 年告示の高等学校学習指導要領 (文部科学省, 2009) における数学科の目標に、「事象を数学的に考察し表現する能力を高める」とある。これは、数学的な思考力や表現力に関わることについて述べ、問題解決過程において、演繹、帰納、類推などによる解決の方向を構想したりするときの見方や考え方が含まれている。このような思考過程を獲得する学習は、例題を通して行なわれることが多いことから、例題の解答の表現形式が、学習にどのような影響を与えるのかを考察することは興味深い。

数学の問題解決過程における推論には、前向き推論と後ろ向き推論がある。

前向き推論とは、初期状態から目標状態へ向かう流れで行う推論である。例えば、初期状態を $P(0)$ 、目標状態を $P(n)$ として、その間の問題状態を $P(1)$ 、 $P(2)$ 、 \dots 、 $P(n-1)$ として、問題状態を変化させるオペレータを「 \rightarrow 」で表わすと、前向き推論とは、

$$P(0) \rightarrow P(1) \rightarrow P(2) \rightarrow \dots \rightarrow P(n)$$

と推論することである。

一方で、後ろ向き推論とは、目標状態から副目標を導く推論である。例えば、「目標状態 $P(n)$ となるためには $P(n-1)$ であればよい」という流れである。

数学の問題解決過程において、初期状態から1つの段階のみで目標状態へと至ることは稀であり、与えられた初期状態から前向き推論と後ろ向き推論を組み合わせて目標状態に至ることが多い。前向き推論と後ろ向き推論の効果については、これまでに多くの研究がなされてきた。特に認知心理学における問題解決の領域で、エキスパート (熟達者) とノービス (初心者) の推論方式の比較研究がなされてきた。例えば、証明問題を題材として、問題解決者は前向き推論と後ろ向き推論を組み合わせた双方向推論により証明を完成させることが知られている (ポズナー, 1991)。しかし、エキスパートは、前向き推論のみによる問題解決も可能であることが知られている。前向き推論のみによる問題解決は、問題解決者が解決手順を手続的知識として持っており、プランニングをほとんど必要としない場合の問題解決であるとされる。したがって、エキスパートでも、手続的知識では解決できそうもない問題が与えられた場合には、後ろ向き推論を用いて問題を解決せざるを得ないことになる。

Anzai (1991) もポズナーの主張を支持する研究結果を得ている。力学問題の学習に関する研究の中で、問題解決

過程で用いられる推論方法の変化に注目した。学習者は、学習前のノービス段階では煩雑な図を描き、推論としては試行錯誤的な解決をしていたが、学習が進むにつれて解決に無駄な図や不都合であった図が整理され、推論としては後ろ向き推論がみられるようになってきた。後ろ向き推論が表れるのは、解決のために使えそうな宣言的知識を探索して組み合わせている学習段階に達し、一度この問題解決の過程を学習すると解決手順のようなものができあがり、それが手続的知識として使われるようになると考えられる。こうなるとエキスパートの段階になり、問題文を読んだ後の作図には解決のための必要事項だけが描かれ、思考過程には前向き推論が見られるようになるだろう。

高等学校の数学の教科書にある問題解答や証明の表現形式は前向き推論が多い。このことには、主に2つの問題点がある。第1は、教科書はノービスを対象として書かれていることである。新規内容を学ぶ学習者に、エキスパートの問題解決における前向き推論のみによる解決方法を「例」として示すことが適切であるか問題である。第2は、前向き推論と後ろ向き推論を組み合わせて推論することを「自然な」推論であるとする、前向き推論のみで書かれた「不自然な」推論を「例」として示すことが適切であるかという問題である。学習者が教科書の例題で学習する場合、教師による後ろ向き推論を取り入れた説明などの支援があれば、学習者は例題の思考過程を実際の思考過程に変換することができる。しかしながら、学習者が教科書の例題から自ら学習する場合、例題の思考過程を実際の思考過程に変換しなければならない。この変換が実行できない学習者は、例題の解答をわかりにくいと判断してしまうと思われる。

そこで本研究は、第一の仮説「前向き推論型例解と双方向推論型例解の表現形式の相違が学習に影響を及ぼす」および第二の仮説「両群の獲得する知識に相違がある」を検証することを目的とし、前向き推論と後ろ向き推論を組み合わせて表現した解答を高校生に学習してもらい、その効果を検討した。

研究対象と方法

1. 調査対象

被験者は、千葉県にある私立R高等学校の第1学年普通科進学コース2クラスの生徒72名である。

2. 調査実施期間

2014(平成26)年12月20日、25日

3. 調査方法

1) 学習課題の作成

本論文では、前向き推論のみで表現した解答を「前向き推論型例解」、前向き推論型例解に対して、前向き推論と後ろ向き推論を組み合わせて表現した解答を「双方向推論型例解」と呼ぶことにする。

前向き推論型例解と双方向推論型例解を以下のように作成した。

数学教師(教師歴20年)に問題(図1)を解いてもらい、採取した発話プロトコル(図2)をもとに双方向推論型例解を作成した。さらに、数学教師が解答用紙に記述式で作成した答案をもとに、前向き推論型例解を作成した。なお、図2には、問題文を読んでいるときの発話プロトコルは省略してある。また、数学教師は問題を解く際、問題理解や問題解決を目的とした作図を行っていたが、作図についても省略してある。さらに、計算式も筆記しているが、筆記の際は発話するように依頼してあることから、筆記内容についても省略してある。

【問題】

正三角形ABCは半径Rの円に内接している。点PがAを含まない弧BC上を動くとき、

$$AP + BP + CP$$

 の値の最大値を求めよ。

図1. 例解作成用の問題

S1: $AP+BP+CP$ を求めるには AP, BP, CP を求める必要がある。
 S2: AP を求めるためには、三角形 ABP に着目する。
 S3: 三角形 ABP に正弦定理を使うために $\angle BAP = \theta$ とおく。
 S4: 正弦定理により $\frac{BP}{\sin \theta} = 2R$ が成り立つから $BP = 2R \sin \theta$ を得る。
 S5: 次に、三角形 ACP において
 $\angle PAC = 60^\circ - \theta$ 、 $\angle ACP = 60^\circ + \theta$
 S6: したがって、正弦定理により

$$\frac{CP}{\sin(60^\circ - \theta)} = \frac{AP}{\sin(60^\circ + \theta)} = 2R$$

 が成り立つから
 $CP = 2R \sin(60^\circ - \theta)$
 $AP = 2R \sin(60^\circ + \theta)$
 S7: よって

$$AP + BP + CP$$

$$= 2R \{ \sin \theta + \sin(60^\circ - \theta) + \sin(60^\circ + \theta) \}$$

$$= 2R \{ \sin \theta + \sqrt{3} \cos \theta \}$$

 S8: 次に最大値を求める。
 関数を1種類に統一するために合成すると
 $AP + BP + CP = 4R \sin(\theta + 60^\circ)$
 S9: $0^\circ < \theta < 60^\circ$ であるから、 $\theta = 30^\circ$ のとき、 $AP + BP + CP$ は最大値 $4R$ をとる。

図2. 数学教師の発話プロトコル

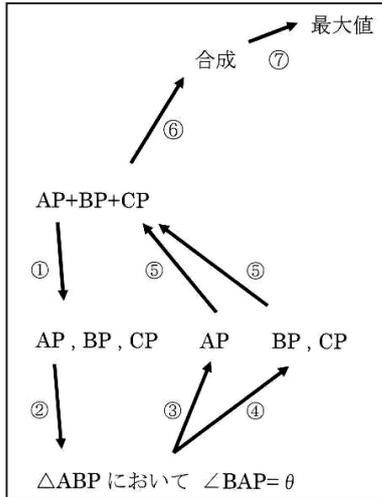


図3. 数学教師の推論の流れ

数学教師の発話プロトコル(図2)から、問題解決過程における推論を解答木に表現したものが図3である。解答木の①、②が後ろ向き推論、③～⑦が前向き推論を行っている部分であり、数学教師が双方向推論によって問題解決を行なっていることがわかる。

図2の発話プロトコルと図3の推論の流れをもとに双方向推論型例解(図4)を作成した。

次に、数学教師が記述形式で作成した解答を前向き推論型例解(図5)として採用した。数学教師は、問題解決場面では前向き推論と後ろ向き推論を含む推論を行っていたが(図3)、解答を記述する段階になると前向き推論のみであった。また、前向き推論型例解における推論の流れは、図3における③から⑦から構成されていた。

2) 調査手続き

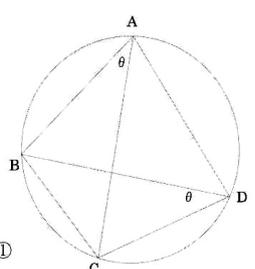
図4、図5に示す「前向き推論型例解」および「双方向推論型例解」を使用して、高校生の例題学習と再構成の差異の比較実験を行なった。

2グループの選定:定期テストの数学の平均点をもとに、72名の対象者を36名ずつの2群に分類した。当然のことながら、両群間で成績に差はなかった。一方の群を「前向き推論型例解学習群」とし、他方の群を「双方向推論型例解学習群」とした。

プリントによる例解の学習:前向き推論型例解学習群は前向き推論型例解(図5)を、双方向推論型例解学習群は双方向推論型例解(図4)を学習した。学習時間は、いずれも20分であった。

同一問題の例解の再構成:両群の被験者は例題学習の5日後に、配布したワークシートに同じ問題の例解の再構成をした。また、ワークシートには問題文の他に、次の3つの質問があった。

【解答】
 AP+BP+CP を求めるためには、AP, BP, CP を求めればよい。
 AP を求めるためには、AP を一辺とする三角形 ABP に着目する。
 三角形 ABP の外接円の半径はRであるから、正弦定理を使うために∠BAP = θ とおく。正弦定理により

$$\frac{BP}{\sin \theta} = 2R \Leftrightarrow BP = 2R \sin \theta \dots\dots\dots ①$$


次に、三角形 ACP において、正弦定理を使って AP, CP を求めるために、対角∠CAP、∠ACP を求めると
 ∠CAP = ∠BAC - ∠BAP = 60° - θ
 ∠ACP = ∠ACB + ∠BCP = 60° + θ
 が成り立つ。したがって、正弦定理により

$$\frac{CP}{\sin(60^\circ - \theta)} = \frac{AP}{\sin(60^\circ + \theta)} = 2R$$

$$\begin{cases} CP = 2R \sin(60^\circ - \theta) \dots\dots\dots ② \\ AP = 2R \sin(60^\circ + \theta) \end{cases}$$

①と②により
 AP+BP+CP
 = 2R { sin θ + sin(60° - θ) + sin(60° + θ) }
 = 2R { sin θ + √3 cos θ }
 = 4R sin(θ + 60°)
 θ + 60° = 90° のとき sin(θ + 60°) は最大値 1 をとる。
 このとき、AP+BP+CP の最大値は 4R ……[答]

図4. 双方向推論型例解

【解答】
 ∠BAP = θ とおく。
 三角形 ABP に正弦定理を使うと

$$\frac{BP}{\sin \theta} = 2R \Leftrightarrow BP = 2R \sin \theta \dots\dots\dots ①$$

次に、三角形 ACP において
 ∠CAP = ∠BAC - ∠BAP
 = 60° - θ
 ∠ACP = ∠ACB + ∠BCP
 = 60° + θ
 したがって、正弦定理により

$$\frac{CP}{\sin(60^\circ - \theta)} = \frac{AP}{\sin(60^\circ + \theta)} = 2R \dots\dots\dots ②$$

①と②により
 AP+BP+CP
 = 2R { sin θ + sin(60° - θ) + sin(60° + θ) }
 = 2R { sin θ + √3 cos θ }
 = 4R sin(θ + 60°)
 よって、θ + 60° = 90° のとき sin(θ + 60°) は最大値 1 をとる。
 このとき、AP+BP+CP の最大値は 4R ……[答]

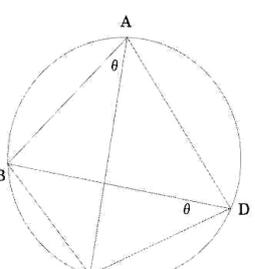


図5. 前向き推論型例解

[質問1] 問題文を読んだとき、「どのようなこと」を思い浮かべましたか。思い浮かべた内容や言葉を一つ書いてください。

[質問2] あなたは、この問題を「どのように解こう」と考えましたか。解答の見通しを書いてください。

[質問3] 問題に解答してください。計算だけではなく説明も書いてください。

3) 統計処理

統計ソフト SPSS Statistics22 を使用し、 χ^2 検定および t 検定により、群間の比較を実施した。

結果

1. 問題文からの想起内容の相違

[質問1] 『問題文を読んだとき、「どのようなこと」を思い浮かべましたか。思い浮かべた内容や言葉を一つ書いてください』に対する被験者の回答は、表2の通りであった ($\chi^2(6) = 27.87, p < 0.05$)。有意であったので、残差分析を行なったところ、双方向推論型例解学習群において「AP+BP+CP」を想起した被験者が多かった(調整された残差は 2.3, $p < 0.05$)。また、前向き推論型例解学習群において「△ABP」を想起した被験者が多かった(調整された残差は 2.1, $p < 0.05$)。

2. 問題解決の見通しに関する相違

[質問2] 『あなたは、この問題を「どのように解こう」と考えましたか。解答の見通しを書いてください。』に対する被験者の回答から、後ろ向き推論が生起している回答を、次のように抽出した。質問2に対して、「APを求めるために、APを1辺とする三角形ABPに着目する」、「三角形ABPに正弦定理を使うために $\angle BAP = \theta$ とおく」をあげる

表1. 問題文からの想起内容の比較

想起した内容	前向き推論型 例解学習群	双方向推論型 例解学習群
AP + BP + CP	0	11
AP, BP, CP	3	10
△ABP	18	4
∠BAP	10	4
正弦定理	2	5
四角形 ABPC	2	1
△ACD	1	1

$\chi^2(6) = 27.87, p < 0.05$

表2. 問題解決の見通しに関する相違

群	獲得	非獲得
前向き推論型例解学習群	9	27
双方向推論型例解学習群	23	13

$\chi^2(1) = 11.03, p < 0.05$

ことができた被験者を「目標-副目標に着目した見通しの獲得者(以下、「獲得者」と呼ぶ)」とし、それ以外の見通しをあげた被験者を「目標-副目標に着目した見通しの非獲得者(以下、「非獲得者」と呼ぶ)」とした。ここで、非獲得者は「目標-副目標に着目した見通し」の非獲得者であり、獲得者よりも優れていないわけではない。別の考え方で解答した可能性や、エキスパートにみられるように前向き推論により解答した可能性もある。見通しの獲得と非獲得について、前向き推論型例解学習群と双方向推論型例解学習群の人数は表2の通りであった。両群における人数の偏りについて χ^2 検定を行ったところ、統計的に有意差が認められた ($\chi^2(1) = 11.03, p < 0.05$)。

3. 解答の再構成の相違

[質問3] 『問題に解答してください。計算だけではなく説明も書いてください。』に従って被験者は記述解答を作成した。ここでは、被験者の問題解決の達成度を算出する目的から「獲得段階数」を定めた。獲得段階数は、正しい根拠が述べられて1つの段階が達成されたとき、推論が1段階進められたと判断した。両群の獲得段階数を調整するために、獲得段階数は図3における③~⑦の5段階に対して算出した。前向き推論型例解学習群と双方向推論型例解学習群の獲得段階数の平均値と標準偏差を表3に示した。

前向き推論型例解学習群の獲得段階数の平均値は 2.47 点、標準偏差は 0.941 であった。他方で、双方向推論型例解学習群の獲得段階数の平均値は 3.50 点、標準偏差は 1.06 であった。さらに、t 検定により両群の平均値には有意差が認められた ($t = 4.36, df = 70, p < 0.05$)。

表3. 両群における獲得段階数の比較

群	平均値	標準偏差
前向き推論型例解学習群	2.47	0.941
双方向推論型例解学習群	3.50	1.056

$t = 4.36, df = 70, p < 0.05$

考察

本論文の第一の仮説「前向き推論型例解と双方向推論型例解の表現形式の相違が学習に影響を及ぼす」を検証する。解答の再構成については、前向き推論型例解学習群と比較して双方向推論型例解学習群の獲得段階数が有意に高かった。したがって、例解の表現形式の相違が学習に影響を及ぼしたと結論づけることができる。

続いて、本論文の第二の仮説「両群の獲得する知識に相違がある」を検証する。表1に示した通り、両群の被験者が問題文を読んで想起した内容には有意な偏りが認められた。被験者が想起した内容は、例題の学習において被験者がどのような情報を使用して知識をつくりあげていったか(体制化していったか)を後から知る手掛かりとなるという(佐伯, 1987)。「AP+BP+CP」を想起した被験者が双方向推論型例解学習群に有意に多く偏っていたことから、双方向推論型例解の学習者が問題の解法についてのスキーマをつくりあげる過程で、「AP+BP+CP」をキーワードにしたと考えることができる。また、「△ABP」を想起した被験者が前向き推論型例解学習群に有意に多く偏っていたことから、前向き推論型例解の学習者が問題の解法についてのスキーマをつくりあげる過程で、「△ABP」をキーワードにしたと考えることができる。他の内容や言葉をキーワードにして問題の解法についてのスキーマをつくりあげたならば、思い浮かべた内容や言葉を一つ書く質問において、他の内容や言葉を回答するはずだからである。したがって、両群の学習者が例題から知識を獲得する過程は異なっていたと考えることができる。

また、表2に示されているように、前向き推論型例解学習群の中に「∠BAP」を想起した学習者が10名いたが、「∠BAP」は「△ABP」の内角であることから、「△ABP」をキーワードとして問題の解法についてのスキーマをつくりあげたと考えることができる。一方、双方向推論型例解学習群の中に「AP, BP, CP」を想起した学習者が10名いたが、「AP, BP, CP」は「AP+BP+CP」の各項であることから、「AP+BP+CP」をキーワードとして問題の解法についてのスキーマをつくりあげたと考えることができる。

両群の学習者が知識を獲得する過程の差異を、[質問2]『あなたは、この問題をどのように解こうと考えましたか。解答の見通しを書いてください。』の回答をもとに検討することにする。この質問に対する双方向推論型例解学習群

の典型的な回答は、「AP+BP+CPの最大値を求めるためにAP, BP, CPを求める。BPを求めるためには、△ABPに正弦定理を使う。BPを求めるために対角である∠BAPをθとおく。」であった。他方、前向き推論型例解学習群の典型的な回答は、「どこかの角を文字において正弦定理を使って、AP+BP+CPの最大値を求める。」であった。両群であげられた見通しを比較すると、双方向推論型例解の学習者は、問題の目標と、その2段階前までに着目した見通しをたてたが、前向き推論型例解の学習者は、解答の初期段階と目標段階に着目した見通しをたてていることがわかる。

以上のことから、双方向推論型例解の学習者が形成した問題解決スキーマは、目標から副目標を導いた推論である可能性が高い。他方、前向き推論型例解の学習者が形成した問題スキーマは、前提から目標を導く推論である可能性が高いことが示唆される。

結論と課題

本研究により、前向き推論型例解よりも双方向推論型例解の学習者の方が、同一問題の解決における達成が促進されることが示唆された。すなわち、後ろ向き推論による表現形式の方が、学習をより促進すると考えられる。今後は、次の2つの課題について検討する必要がある。

第一に、同一問題に対して学習の効果を検証したが、他の同型問題を用いて学習の効果を検証する必要がある。

第二に、本研究における前向き推論と後ろ向き推論は、推論の流れに関する内容である。推論の流れに関して、高等学校では単元「数と式」の中で「必要十分条件」や「逆、裏、対偶命題」を学習する。これらの学習前後で、双方向推論型例題による学習の効果を検討する必要もある。

文献

- Anzai, Y. (1991): Learning and use of representations for physics expertise. In: Ericsson, K.A. and Smith, J. (Eds.), *Toward a General Theory of Expertise*. Cambridge University Press, Cambridge, pp64-92.
- 佐伯 胖(編)(1987): 知識の獲得と学習. オーム社, 東京.
- ポズナーM.I.(編)(1991): 記憶と思考. 産業図書, 東京.
- 文部科学省(2009): 高等学校学習指導要領解説 数学編 理数編. 東洋館出版社, 東京.

An Examination of Studies Based on Backward Reasoning in High School Mathematics

Takahiro SASAKI

School of Education, Tokyo University of Social Welfare (Ikebukuro Campus),
2-14-2 Minami-ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-0022, Japan

Abstract : To solve the mathematic problems of high-school level, we have been used deductive, inductive and analogical thinking as well as the functions and figures. Problem solving techniques using these thought processes can be classified as forward or backward reasoning depending on the flow of reasoning. Forward reasoning is the process conducted from initial state to target state. On the other hand, backward reasoning is the process conducted by deriving a sub-goal from target state. In this research, it is shown that there is a significant difference between groups in the solving activity of a mathematic problem, and that the academic result of the group conducted the combination of forward and backward reasoning is higher than that of the group conducted the forward-only reasoning.

(Reprint request should be sent to Takahiro Sasaki)

Key words : Problem solving, Forward reasoning, Backward reasoning, High-school mathematics

初等教育における論理的に「書くこと」の指導

國府田祐子

東京福祉大学 短期大学部

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

(2015年2月20日受付、2015年3月10日受理)

抄録: 論理的思考力を育成する国語科の役割として、「書くこと」の指導の方法は開発途上にある。義務教育の現場における「書くこと」の指導では、児童・生徒にパンフレットや新聞のような作品を書かせる指導が行われているが、指導目標も漠然としており、評価体系も示されていない。論理的思考力を育成するという観点から、小論文を「論理的な構成をした小さい文章」と定義し、テーマを変えながら繰り返し書かせた。添削指導を段落ごとに具体的に行ったところ、一定の成果が表れた。1年間継続して行ったところ、書くことに対する児童の苦手意識が克服され、論理的文章の書き方を身に付けさせることができた。その小学校5年生での具体的実践を報告する。

(別刷請求先: 國府田祐子)

キーワード: 論理的表現、小論文、作文力、文章構成

緒言

1. 「書くこと」の指導の現状

1-1. 「書くこと」の配当時間増を自覚していない

小学校学習指導要領(文部科学省, 2010)では、第2学年は国語の年間授業時数315時間のうち100時間(約32%)、中学年では245時間のうち85時間(約35%)、高学年では175時間のうち55時間(約31%)である。私は平成23・24年度、東京都の施策による東京教師道場のリーダーとして経験年数4年から10年未満の教員を教えてきた。多くの若手教員は、学校経営上ベテラン教員と同じ学年に配置される。彼らはベテラン教員と一緒に教材研究を行うが、国語は漢字と読解中心、という考えのベテラン教員は多い。彼らの指導法が若手教員に伝えられており、「書くこと」の指導の改善は進んでいなかった。

1-2. 「書く」時間が少なく、書き方が明確に示されていない

小学校学習指導要領「第2章第1節国語第3指導計画の作成と内容の取扱い(4)」(文部科学省, 2010)には、「実際に文章を書く活動をなるべく多くすること」とある。しかし教科書の実態は異なっている。例えば、光村図書の国語六創造(常田寛, 2010)「平和について考える」では8時間扱いの授業の中で、1、2時間目に「平和のとりでを築く」を読み学習計画を立てる。続けて3～8時間で意見文を書くことになっている。6時間もの間、児童がずっと書き続けることはできない。実際は、調べ学習や互いに読み合う活動で

授業時間が使われている。

本稿では各教科書会社の教材分析を行い、長所や短所を明らかにする。さらに、現場で活用できる論理的文章を書く指導方法を明示していく。

研究対象と方法

1. 各教科書会社の指導分析

2011(平成23)年度使用の小学校国語教科書のうち、光村図書、東京書籍、教育出版の3社から、第5学年「書くこと」について、次に示す3点を分析した。説明的文章(論理的文章)を書く單元の中で、配当時数4時間以上の單元のみとし、文学的文章を書く單元は対象外とした。

i 学習の進め方

◎段階や方法がわかりやすい。

○一部、段階や方法がわかりやすい。

△わかりにくい。

ii 書き方の手引き

◎書き方がわかりやすい。

○一部、書き方がわかりやすい。

△わかりにくい。

iii 見本文の有無

◎見本の文章に文章構成があり、文字数が妥当である。

○見本の文章があるが、文章構成が整わず、文字数が多い。

△見本の文章がない。

1-1. 東京書籍

単元名・教材名	頁数	i 進め方	ii 書き方	iii 見本文	配当時間	考察・備考
立場を明確にして書こう	5	◎	◎	◎	7	見本文が約400字で書きやすい。学習の進め方も書き方も明確である。
資料を読んで考えたことを書こう	4	◎	◎	○	4	見本文が約500字あり長い。教科書に載っている資料を使って書くことが可能である。
森林について興味を持ったことを調べよう 森林のおくりもの	3	△	△	○	4	「読む」(教材文12ページ)で5時間学習した後、書く。見本例が少なく、ブックガイドを書く活動につなげにくい。
活動したことを伝える文章を書こう 伝えよう、委員会活動	5	○	△	○	9	構成メモ例がある。グラフや写真を効果的に使う方法がわかりにくい。
メディアとわたしたちのかかわりについて考えよう テレビとの付き合い方	2	○	○	△	4	「読む」(教材文6ページ)を5時間学習した後、筆者の意図を踏まえて書く学習である。教材文を正しく読み取れていることを前提としてあり、児童の実態によっては教え方が困難である。
人間の生き方をえがいた伝記を読もう 手塚治虫	2	△	△	△	5	「読む」教材文(15ページ)を5時間学習した後の関連単元であり、文章構成は意識されていない。

【分析結果】

- (1) 学習の進め方が、一段階1ページか一段階見開き1ページで構成され、進めやすい。
- (2) 1年間の前半では、文章構成が意識され、書き方の説明が詳しい。
- (3) 文章構成が意識されている単元が多く、見本文の字数が妥当である。
- (4) 1年間の後半になると、「読む」との関連単元が増える。
- (5) 具体的な見本文が多く、言語技術の指導が明確だった。

1-2. 光村図書

単元名・教材名	頁数	① 進め方	② 書き方	③ 見本文	配当時間	考察・備考
活動を報告する文章を書こう 次への一歩—活動報告書	5	△	△	○	10	グループ学習と個別学習の区別が曖昧で、学習の進め方がわかりにくい。
自分の考えをまとめて、討論をしよう 豊かな言葉の使い手になるためには	3	○	○	○	5	討論(9時間)と関連させた5時間である。見本文は約660字あり、手本とするには長すぎる。
理由づけを明確にして説明しよう グラフや表を引用して書こう	4	◎	○	○	4	見本文が約580字で長い。グラフや表を説明するための書き方の記述はわかりやすい。
本は友達 わたしたちの『図書館改造』提案	6	△	△	○	4	「読む」2時間と関連させた単元である。書き方の説明は提案書の構成のみでほかには見当たらない。

【分析結果】

- (1) 「活動の流れ」という名称で学習の進め方が書いてあるが、単元によってわかりやすさに差がある。
- (2) 調べ方や話し合いの仕方は明確に書かれているが、書き方については文末表現にとどまっている。
- (3) 見本の文章が長く、文章構成が単元によって異なっている。
- (4) 単元によって目的も文章構成も変わり、年間を通じた系統性は見当たらない。
- (5) 総合的な学習と結びつけた言語活動が特徴であった。

1-3. 教育出版

単元名・教材名	頁数	① 進め方	② 書き方	③ 見本文	配当時間	考察・備考
紹介のポスターを作ろう	4	○	△	○	8	ポスター例が6例あり見通しを持ちやすい。文章構成は特に意識されていない。
情報を深める新聞を作ろう	8	△	△	○	9	「読む」で5時間学習した後の関連単元である。新聞の仕組みや編集を説明する文章が長く、読むのに時間が費やされる。
世界遺産白神山地からの提言 一意見文を書こう	6	○	△	○	12	「読む」(教材文8ページ)で2時間学習した後の単元である。見本文は約600字である。文章構成が意識されている。
自分の考えを明確にして書く コラムを書こう	4	○	○	◎	10	文字数を400字と決めて書かせており、書きやすい。

【分析結果】

- ページ数が全体的に長く、学習の進め方がわかりにくくなっている単元がある。
- 文章構成が意識されている単元と、そうでない単元がある。
- 見本分の長さは、500字から700字程度の幅があり、段階的ではない。
- 一単元あたりの配当時間が他社に比べて長い。
- 単元学習を意識した言語活動が特徴であった。

結果と考察

1. 教科書会社3社の傾向

- 学習の進め方に関する手引きは、全体的に詳しい。
- 取材や読解をした後で書く学習に入る学習過程の時間が長く、書き方の指導の時間が少ない。
- 見本文が長すぎる。文章構成の説明はあるが、単元ごとに異なっている。次の単元や次の学年へつなげにくい。

- 下書きをさせる過程が少なく、構想後にいきなり文章化する学習過程が多い。
- 3社ともグループで書かせる学習があるが、評価の方法が示されていない。

以上のように、現行の教科書では、「書くこと」の説明にとどまっている教材が多く、「書き方」の学習指導が明確に示されていない。教科書会社の配当時間に含まれている、調べ学習や読み合う学習を最小限にとどめれば、年間20時間から24時間程度の「論理的に書くこと」の時間を確保することができる。

2. 論理的文章を書く指導の構想

論理的思考の種類は、大まかに「帰納論理」と「演繹論理」の2つと考えることである。(定義については大淵和夫・思想の科学研究科会編(1959); 哲学・論理用語辞典を参照) 初等教育では、「帰納論理」を中心とした論理的思考力・表現力の育成が望ましいと考えている。市毛勝雄監修・埼玉県春日部市立武里南小学校(2009)では、帰納論理の型に従って書かせる実践を行っている。「帰納論理」を中心とする理由は下記の2点である。

- 社会のいろいろな職業に就いて仕事を学び、社会生活に適応していくためには、「帰納論理」による思考法が有効である。
- 小学生は抽象概念がまだ十分に発達していない。そのため1つの定義から別の定義を導き出すための演繹的な思考操作や、記号による思考法などの「演繹論理」の学習は難しい。算数の学習がやっとなのである。

以下、論理的文章を書く指導の理論を示す。理論記述方法として、10年にわたって改善を重ねてきた具体的な指導技術として示すこととする。「小論文」については、小さな論理的な形式を持った文章という意味で表記する。

3. 書く指導の全体構想

3-1. 長さを決める

全体で360字の長さを持つ、短めの学習用の文章とした。原稿用紙1枚で全体を見渡すことができるからである。段落ごとの役割を教え、その文章構成に従って書かせる。

はじめ	40字	全体のあらまし
なか1	140字	具体的事例1
なか2	140字	具体的事例2
まとめ	40字	共通の性質

3-2. 小論文のテーマは教師が決める

テーマは児童任せにせず、共通のテーマで、年間5回、1回4時間の指導計画で書かせる。学び合いができるよう、

学級全員の共通体験とする。テーマ例は下記の通りである。

- 6月 運動会
- 7月 宿泊行事
- 11月 お手伝い
- 1月 委員会活動
- 3月 1年間の思い出

3-3. 経験を箇条書きにし、「まとめ」を書く。

小論文の第1・第2学習)

最初に、自分の経験をキーワードで書いた一覧表を作る。自分の経験を端的に思い出し、「名づけ」をする作業である。S.I.ハヤカワ(1985)は、名づけを「行為と関心に対する関係」と述べており、経験した現実を言語に置き換える論理的思考を伸ばす学習である。指導者は複数書けたら○を付ける。

3-4. 一次原稿と二次原稿を書く

- (1) 一次原稿では400字詰め原稿用紙を配布し、2行、7行、7行、2行に赤線で区切らせる。
- (2) ○を付けた児童に、一次原稿と同じ原稿用紙を配布し、二次原稿を始めさせる。

3-5. 小論文の評価と添削指導

(1) 机間指導

キーワード表、まとめの表、一次原稿の3つの段階で、教師が机の間を回って○をつける。語句の間違ひは添削しない。段落ごとの役割に従って書いていけば○をする。二次原稿の段階でそろえて提出させ、最後の4時間目の授業で返却する。

(2) 板書添削

まとめの表、一次原稿、二次原稿それぞれの段階で終わる時間に差ができる。早く書けた児童に黒板に書かせ、それらを全体に向けて添削するのが板書添削である。

(3) 良い例を読んで聞かせる

4時間目の授業で良い例を読んで聞かせる。

4. 1年間実践した結果

この書き方で1年間書かせたところ、書くことを苦手としていた児童が論理的に書くことができるようになった。下記は、指導を始めた6月と、繰り返し書かせた後の1月の変容である。

テーマ「運動会」 6月

題名	運動会		B男
	ぼくは、 <u>応援団と、組み体そう</u> をやりました。	○	〔はじめ〕
	応援団で応援してみんなに写真をとられていたり、見られて <u>すごいきんちょう</u> ました。(マ)けど、そんなのは気にしないで <u>しっかり</u> やりました。(空き)		
	そのときは足のほねにひびがはいついて、たいじょうするとき走るから、 <u>すごいいたかった</u> です。来年は、けがをしないようにします。(2文字オーバー)	○	〔なか1〕
	組み体そうのドラゴンター(マ)でバランスをくずしかけたけど、せなかに手をついたら、 <u>安定してひやっ</u> としました。(空き)		
	おりるとき、くろき君のせなかに足をつけたけど、したがみえなかったから <u>ちよっとこわかった</u> です。けど、落ちないで、おりられたので <u>うれしかった</u> です。	○	〔なか2〕
	(1マス空けなし) <u>すごいきんちょう</u> したけど、 <u>すごい楽しかった</u> です。	○	〔まとめ〕 佳良

テーマ「委員会活動」1月

題名	集会委員		B男
	ぼくは <u>集会いいんだ</u> 。(1行空き)	○	〔はじめ〕
	ぼくは、もうじゅうがりに行こうよのお手本をやった。 <u>ポスターをやりたい</u> と言った。けど、 <u>だめ</u> といわれた。 <u>司会か、お手本どっちかにしろ</u> と言われた。司会よりお手本のほうがよかったから、お手本をえらんだ。(2行空き)	○	〔なか1〕
	前、ポスターを書いた。しっぽりのポスターを書いた。何度も、先生によべられた。ぼくのたんとうは、 <u>絵を書くこと</u> だった。ひる休み(マ)に <u>やってください</u> と言われた。ひる休みに、やって、絵を書いた。先生に見し(マ)たら、 <u>いい</u> と言われた。(1行空き)	◎	〔なか2〕
	はじめてで、 <u>ぜんぜん</u> なれないけど、 <u>すごい楽しい</u> 。	○	〔まとめ〕 優秀

【考察】

- (1) 6月の「なか」には、「きんちょう」「こわかった」など感想が混じっている。(傍線)
- (2) 1月は、かぎ(「 」)を使うことはできないが、「なか1」も「なか2」も会話を用いて書けている。(傍線)意見を一言も書かず、事実だけを書くことができるようになった。
- (3) 6月から「はじめ」と「まとめ」の書き方ができており、1月でも定着している。
- (4) 6月は「なか1」「なか2」が一段落で書けなかった。常体でも書けなかった。1月はどちらもできるようになった。
- (5) 文字数は減ったが、決められた字数の中で論理的に記述できるようになった。評価は優秀である。

今後の課題

多くの先生方が確実に効果的に授業で使えるように、指導の手順をさらに明確にしていく。また、高校以上の論文になると、論理的主張を述べるために、「まとめ」の後に演繹論理を用いた「むすび」の記述が必要になる場合がある。帰納論理と演繹論理を組み合わせた小論文の書かせ方は、高等教育段階でも有効であるので、実践例を多くしていきたい。

文献

- ハヤカワ, S.I. 著・大久保忠利訳(1985): 思考と行動における言語 原書第四版. 岩波書店, 東京.
- 市毛勝雄監修・埼玉県春日部市立武里南小学校(2009): 論理的思考力を育てる「発信型の読み」の授業. 明治図書, 東京.
- 川畑慈範(2010): 新しい国語五上・五下. 東京書籍, 東京.
- 川畑慈範(2010): 新しい国語五上・五下 教師用指導書研究編. 東京書籍, 東京.
- 小林一光(2010): ひろがる言葉 小学国語5上・5下. 教育出版, 東京.
- 小林一光(2010): ひろがる言葉小学国語5上・5下 教師用指導書解説・展開編. 教育出版, 東京.
- 文部科学省(2010): 小学校学習指導要領. 東洋館出版社, 東京.
- 大淵和夫・思想の科学研究科会編(1959): 哲学・論理用語辞典. 三一書房, 京都.
- 常田 寛(2010): 国語五 銀河. 光村図書, 東京.
- 常田 寛(2010): 国語六 創造. 光村図書, 東京.
- 常田 寛(2010): 小学校国語学習指導書5 銀河(上)(下). 光村図書. 東京.

A Guideline of “Writing” to Boost the Logical Thinking and Expression in the Primary Education

Yuko KOUDA

Junior College, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2010-1 San’o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : The role of language arts is to boost the logical thinking and expression. Although written works such as making brochures and newspapers are carried out in the school, the Guideline of “writing” in the compulsory education stage has not been established. The purpose and goal of these activities have been vague, and the rating system has not been determined. I defined that a short essay was a small sentence with logical configuration. To boost the logical thinking and expression, while changing the theme, the process of making short essays and correction of the sentences was repeated for one year. This effort resulted in a marked progress of the logical thinking and expression, i.e., writing skills, of students.

(Reprint request should be sent to Yuko Kouda)

Key words : Logical thinking and expression, Short essay, Writing skill, Sentence structure

スペンセリアン・ペンマンシップによる筆記体書法 —その史的展開と基礎理論—

鈴木貴史

東京福祉大学教職課程支援室(池袋キャンパス)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-7-12

(2015年1月7日受付、2015年2月12日受理)

抄録: 19世紀後半の米国における筆記体書法であるスペンセリアン・ペンマンシップ(以下、「スペンセリアン法」) 他人に読みやすい文字の美しさと、文字を書く速さの両立を目指した筆記体書法であった。しかしながら、従来のわが国における筆記体は、速記に重点が置かれ、非正規の書体として誤解される傾向がみられた。そこで本稿は、スペンセリアン法による筆記体書法を正確に理解することを目的として、その史的展開と基礎理論である(1)姿勢、(2)ペンの持ち方と動作、(3)形、(4)7原則の4項目について解説した。スペンセリアン法において、他人に読みやすく、美しい文字を書くことを徹底的に追及するという姿勢は、文字言語によるコミュニケーション能力の一つとして現代においても評価できるものであり、今後、筆記体の意義を再考するための一助となるものと考えられる。

(別刷請求先: 鈴木貴史)

キーワード: 英語教育、ペンマンシップ、筆記体、スペンサー、書字教育

はじめに

近年、小学校に外国語活動が導入されて英語教育が重視されるなか、小学校だけでなく中学校以上の英語学習においてはオーラルコミュニケーションが重視されている。たとえば、現行の「中学校学習指導要領(以下「指導要領」)」における外国語科の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」とされており、音声に関わる「聞くこと、話すこと」、文字に関わる「読むこと、書くこと」の順に記述されている(文部科学省, 2008)。このように、「指導要領」における記載順からも外国語科における音声重視の傾向を窺うことができる。

とりわけ、「書くこと」に関して軽視される傾向が著しく、筆記体については、「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、「文字指導に当たっては、生徒の学習負担に配慮し筆記体を指導することもできること」とされ、「中学校学習指導要領解説(外国語編)」においても発展的な内容という位置づけである(文部科学省, 2008)。その結果、現状において、多くの学生が大学入学までに筆記体を習っていないという状況が報告されている(豊永, 2011)。こうして、かつ

て英習字とよばれたペンマンシップ、すなわち筆記体によって速く美しく手書きする技能は、今や瀕死の状態にあるといつてよい。

中等教育において筆記体の指導が積極的に行われない主要な要因として、音声によるコミュニケーション能力の重視、情報入力機器の発展に伴う手書き文字の実用性低下、さらに米国をはじめとした英語圏における筆記体の地位低下などが考えられる。

しかし、筆記体が重視されないこと背景には、上に挙げた環境の変化による外的な要因だけではなく、筆記体そのものに対する誤解や、その意義について理解不足があるものと思われる。

そこで、本稿においては、こうした筆記体に対する誤解や理解不足を補うことを目的として、19世紀の米国における筆記体書法の代表ともいえる *Spencerian Penmanship* (以下「スペンセリアン法」) に注目し、筆記体の意義について再考を試みる。スペンセリアン法とは、*Platt Rogers Spencer* による体系的な英習字理論であり、この理論が後に *H. C. Spencer* を中心とする5人の息子らによって “*Spencerian Key to Practical Penmanship*” (1866, 以下 “*Key*”) としてまとめられた。

本稿においては、この “*Key*” のほか、ワークブックである “*The System of Practical Spencerian Penmanship*”

(1864, 以下“System”)、およびその解説書である“Theory of Spencerian Penmanship for Schools and Private Learners” (1874, 以下“Theory”)を参照しながら、スペンセリアン法の概要及び書法について解説する。

なお、それぞれの資料の記述に相違点がみられる場合は、より新しい年代の記述であること、学校や家庭向けに平易な書法を提供しようとする趣旨であることを踏まえ、原則的に“Theory”の記述を優先することとした。

スペンセリアン法の概要とわが国における史的展開

吉田(1932)では、ペンマンシップを意味する英習字について、「英語の基本字たる Alphabet 二十六字及びこれに附随する記号数字の単一的若しくは、総合的書き方を研究する一つの技術である」と定義されている。19世紀におけるペンマンシップの代表ともいえるスペンセリアン法の母体となる書体は、17世紀中葉に英国で生まれた Roundhand とよばれる流暢かつ装飾性の高い書体である(図1上段)。先行研究において、スペンセリアン法(図1下段)は、その「Roundhandの実用性を受け継ぎ、之に前腕運筆による速書法と適度の装飾性を加味したもの」であるものとされ、19世紀のアメリカで広く普及した書体および書法であるとされている(森義, 1970)。

それでは、わが国における筆記体書法の受容について概観してみたい。まず、スペンセリアン法は、1872(明治5)年に大学南校教頭フルベッキの教科書具申で『スペンセリアン習字本』として紹介されている(倉沢, 1963)。この『スペンセリアン習字本』を特定することは困難であるが、望月(2007)は、ワークブックの“System”のことでありと推定している。しかし、明治学制期に“System”が翻訳された形跡はみられず、スペンセリアン法に関する当時の文献で現在所蔵が確認できるものは、国立国会図書館及び筑波大学附属中央図書館所蔵の“Key”2冊のみである。

学制期以降、筆記体の学習は英習字と呼ばれ、主に中等教育や実業教育において教授されていた。しかし当時の資料として、1873(明治6)年の吉田(1873)や嶋(1873)では、

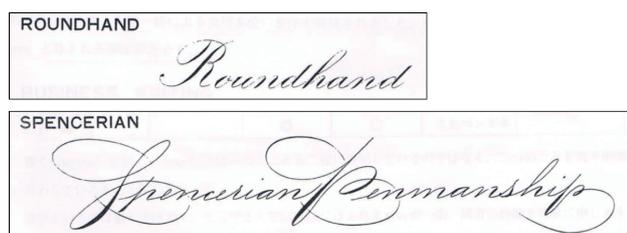


図1. RoundhandとSpencerian書体(森義, 1970より)

スペンセリアン法の理論を忠実に紹介したものではなく書体も異なっている。たとえば、吉田(1873)で示された文字の傾き角度は、50度と45度であり、後述するスペンセリアン法で提示された角度や基本原則も異なっていることから、スペンセリアン法だけが普及していたわけではないことが確認できる。

その後、明治10年代後半の学校教育における実用性重視の動きと相俟ってスペンセリアン法の翻訳本が出版され始めた。スペンセリアン法を紹介したものとしては鈴木(1884)があり、ワークブックである“System”の翻訳本も出版された(スペンセリアン著・森訳, 1885)。

こうして明治20年代になるとスペンセリアン法が広く普及し、東京高等師範学校附属小学校中等科では、「習字ハ思想ヲ可視的ニ表出スルニ必要ナル文字ノ書方ヲ練習スルモノニシテスペンセリアンペンマンシップヲ用ヒ一学年間大凡二冊ヲ習ハシム又書取ト連絡シテ白紙上ニ練習セシム」とあり、この時期においてスペンセリアン法が推奨されていることが確認できる(東京茗溪会, 1892)。

このスペンセリアン法の理論と、現代のわが国で一般的に使用される筆記体(本稿では、「中学校体」と称する)を比較した場合に際立って異なる特徴を挙げると下記の6点に要約できる。

- 特徴Ⅰ 速記術の一つではあるが、なぐり書きや走り書きの類ではなく、公的な文書にも用いられた書体であり、美しさ、読みやすさも追求していたこと。
- 特徴Ⅱ 小文字では、斜線の角度、文字のサイズなどを細かく数値で規定し、一点画ごとに分解して学ぶ方法(いわゆる「分解結合法」)であること。
- 特徴Ⅲ 理論上は、すべての小文字が続け字可能であること(ただしi, jの点およびtの横線を除く)。
- 特徴Ⅳ 大文字は、shading(文字の陰影)を駆使して線の太さに変化をつけているため、高い装飾性と豊富なバリエーションが可能であること。
- 特徴Ⅴ 上記の特徴Ⅰ～Ⅳを体得するためのワークブック(練習帳)には、現代の英語ノートのように4線3行ではなく、6線5行(ベースラインを基準として上3行、下2行)を使用すること
- 特徴Ⅵ ノートは20度前後左に傾けて筆記していくこと。

これらの特徴の詳細については後述するが、とりわけ重要なものは、特徴Ⅰである。これは、冒頭で述べた筆記体に対する誤解の一つであり、富山(2007)は、「日本語の文化圏では半ば公的な文書においては楷書体が要求されるよう

に、そうした場面(中略)では、「楷書体」でない筆記体は好ましくない」というネガティブな考えが広まっていると指摘している。

しかし、当時の米国におけるペンマンシップ教育は、Northend (1874) で示された“Good writing is characterized by legibility, rapidity, and beauty.” にその要点が端的に表れているといえる。わが国においては、1876 (明治9) 年ファンカステールによって『教師必読』として翻訳され、ここでは「凡ソ能書ノ名ハ其書草スル所ノ字々他人ヲシテ読下シ易カラシメ之ヲ書スル頗ル快速ニシテ且ツ美巧ナルコトヲ得タル者ニシテ始メテ之ニ下スニ此名ヲ以テスヘキナリ」と訳されている(ノルゼント, 1990)。つまり、ペンマンシップでは、「快速ニシテ且ツ美巧ナルコト」が重要であった。これはスペンセリアン法でも同様であり、たとえば、“Theory” では、“Scrawls that cannot be read may be compared to talking that cannot be understood” と述べられており、なぐり書き、走り書きを戒めている。

そもそも、ブロック体とは英語圏では、“printing” であり、「活字体」の訳が相応しいといえる。一方の「筆記体」の“cursive” は、その訳語のとおり、手書きによる続け字を特徴とする書体である。両者の最大の相違点は、「ブロック体＝正規の字体、筆記体＝非正規の字体」という図式ではなく、続け字で書くか否かにあるといえる。つまり、手書きで公的な文書を作成する場合は、美しい続け字で書くことができる筆記体こそが正式の書体なのであった。

要するに、本来の筆記体は、速く書くことよりも他人が読みやすく美しい文字を書くことが優先されるべきなのであり、スペンセリアン法は、まさにこの美しさ、読みやすさを保ちながら速くスムーズに書くことを目指した書字法であった。

その後、明治後期から大正期以降、鉛筆、万年筆等の登場で筆記具が変化したことに伴い、装飾性の高いスペンセリアン法よりも商業字体と呼ばれた実用的なビジネスライティング(Business Writing, Commercial Cursive) が普及した。これは、shading を用いず、単一線(原則的に同じ線の太さ)によって書かれる書体であり、現代における筆記体に近い書体である。その後、タイプライターの登場も加わり、実用性がますます重視されるなかで、筆記体書法におけるスペンセリアン法の相対的地位は低下していくのである(森義, 1970)。

当時の状況について、たとえば、佐々木(1912) は、その頃、「所謂直立体を書くことが流行し出した」と述べており、さらに、Spencerian Style を書く人も少なくなったため、「従って今日は、文字の傾斜の度は、実に種々で、たとひ同

一人と雖も中々一定しない」状況であったと述べている。

こうした実用性偏重の傾向は、昭和以降の英語教育でますます顕著となり、戦後の中学校で模範とされた中学校体が採用されていった。中学校体は、文字全体が右斜めに大きく傾いていたスペンセリアン法と比較して、傾斜角度が小さくなっており、立ち上がったような形状になっている。これは、装飾性よりも実用性を重視したため、その書法にも大きな変化が生じたことが要因と考えられる。たとえば、篠田(1948) では、英習字の目標として、「字体の正確さと運筆の軽快さ」を挙げている。ここでは、「美しさ」や「読みやすさ」といったペンマンシップで重視された理念が欠落している。さらに、篠田は、「従来、清書帳を傾斜させて練習する方法が行われているが、これは文字を一定の角度に傾斜させて書くための便法であると思われるが、これは正しい書き方ではなく、清書帳の傾斜に気を取られて、姿勢も崩れて来るし、文字も委縮する様な結果になることが多い」として、用紙を傾けることを採用せず、逆に清書帳に予め15度から20度の斜線を引いて書く方法を推奨している。

こうして、わが国の学校教育においては実用性と装飾性を兼ね備えたスペンセリアン法による筆記体書法は忘れ去られ、筆記体は、速記の手段としての性格を強めていったと考えられる。以上、わが国におけるスペンセリアン法の史的展開について駆け足で追ってみたが、次にスペンセリアン法の基礎理論を確認していきたい。

スペンセリアン法の基礎理論

(1) 姿勢 (Position)

姿勢については、右の腕と手指がスムーズに動かせる姿勢がよいとされる。その姿勢は、わが国の書字教育と同様に、肩を丸めずに背筋を伸ばしておくことが重要であるとされている。

しかし、わが国の書字教育と異なる点は、体の向きに対する用紙の傾きである。この紙の傾きは、机に対して体をどの方向に向けるかという問題と密接に関連している。

わが国の書字教育においては、原則的に机と正対する姿勢が一般的であるが、スペンセリアン法では、①“Front” (正面姿勢)、②“Left-side” (左側姿勢)、③“Right-oblique (またはRight-side)” (右側姿勢)の三種があるとされている。

一般的な正面姿勢(図2)は、まず、両足を床にしっかりと着け、机にもたれないで座る。以下、図2から図4では、それぞれの姿勢の体の向きを太い矢印で示している。右の前腕部を軽く机に置き、手首は机または紙の上に置かずに浮かせる。そして、ペンをもった右手指は、薬指と小指の爪を紙に付けて支え、用紙は、左手で支える。

正面姿勢で重要なことは、先ほど述べた用紙の傾きである。机と正対する正面姿勢では、ノートや紙の下辺を机の手前の縁に対して20度左に傾けるとされている。この傾きは、次に述べる指(食指)の動作(Movement)に大きく影響するため極めて重要である。以下、図2から図4の中の細い矢印が食指を動かす向きを示している。

次に、左側姿勢Left-side (図3)は、主に立った姿勢で書く場合に用いられる。とりわけ、机の上で傾けることができないような大型のノートや紙に書く場合に有効である。正面姿勢と異なり、机の上で用紙を傾けないで真っ直ぐに置く。そして、右足を一步後ろに下げ、自分の体を右に開き、正面姿勢を基準として右斜め前方を向くように構える。つまり、左側姿勢は、このように用紙に対して自分の体を傾けることによって、用紙を傾けずに正面姿勢で用紙を傾けた状態と同じ態勢をつくるのである。

つぎに、右側姿勢“Right-oblique (または Right-side)”は、図4に示したように机に触れずに左斜め前(左側)を向く姿勢である。この姿勢の特徴は、用紙を左に90度回転させて横置きにし、用紙と側面と机の下の縁とが並行にな

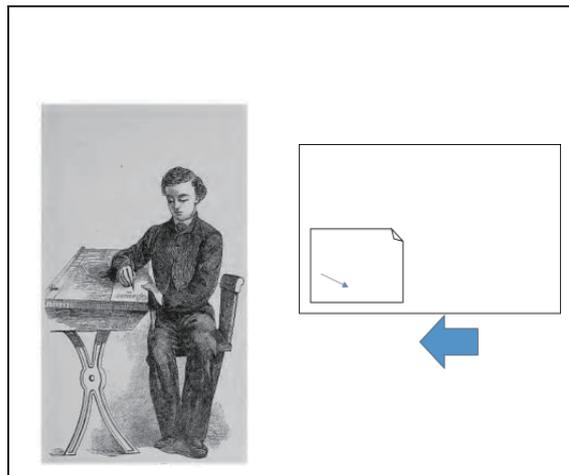


図4. 右側姿勢Right-oblique (Right-side) (“Key”より)

るようになる。こうすることで、体を左に向ければ、体と用紙も左方向を向いていることになる。この時の注意点は、用紙を体の真横に置くのではなく、右腕の位置に当たるやや前方(机上の位置でいえば、左側)に置くことが重要である。

以上のような、目的に沿った正しい姿勢を保つことで、食指を正しい方向にスムーズに動かすことができることされている。

(2) ペンの持ち方(Holding the pen)と動作(Movements)

自由に手を動かすには、(1)で述べた姿勢に加えて正しくペンを持つことが重要である。こうした正しい方法が習慣的かつ容易にできるようになるまで持続的に訓練することが必要であるとされている。スペンセリアン法では、頭で考えたことを表現するというよりは、むしろ、繰り返し丁寧に練習して書字法を体得することにより、しなやかに従順に書けるように変化するとされている。

正しいペンの持ち方は図5に示したとおりである。その上で動作(Movement)すなわち運筆の方法には、①手指運筆法(Finger Movement)、②前腕運筆法(Fore-arm Movement)、③連合運筆法(Combined movement)、④全腕運筆法(Whole-arm Movement)の4種がある。

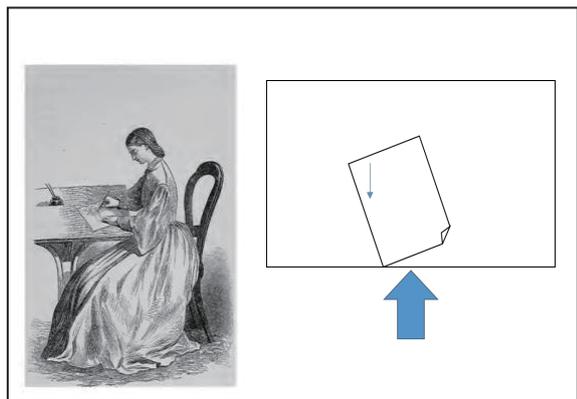


図2. 正面(Front)姿勢 (“Key”より)

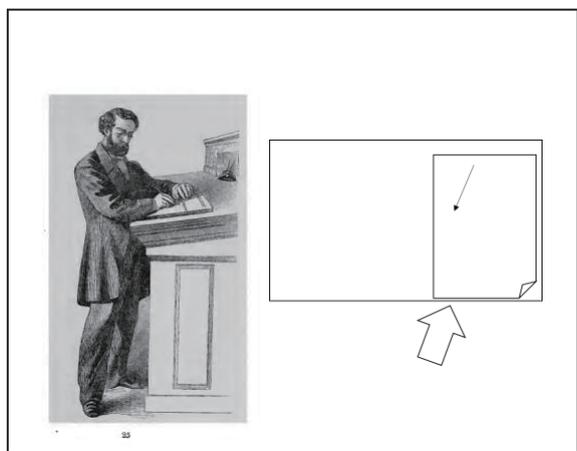


図3. 左側姿勢Left-side (“Key”より)

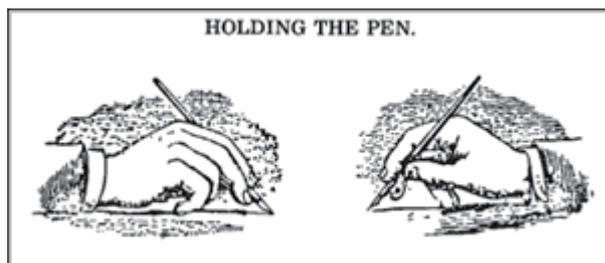


図5. ペンの持ち方 (“System”より)

まず、①手指運筆は主に、食指、中指、拇指の動きによって運筆する方法で、斜線を書くことに使用される。「(1) 姿勢」で述べた正面姿勢では、紙を傾けているため、食指を縦方向に上下運動することにより、おのずと斜線が書ける仕組みになっている。そのため、左側姿勢、右側姿勢は、この右手指の上下運動により斜線がスムーズに書ける角度が最も適した姿勢であるといえるだろう。

次に、②前腕運筆法は、前腕の肘に近い部分を机の上につけ、前腕の動きによって文字を書く方法である。薬指と小指の爪を紙の上に置いて滑らせるように書いていく。これは、あらゆる方向の線を書くことが可能であるが、特に横方向への移動に適している。

この両者を合わせた運筆法が③連合運筆法であり、これが最も実用的な書法であるとされている。最後に、④全腕運筆法は、肘をわずかに机から持ち上げ薬指と小指を滑らせて書く方法である。これは、肩から指まで自由な動きが可能であり、大文字に適している。

要するに、運筆法は、小文字を書くための③連合運筆法を確実に身につけ、大文字を書く際の④全腕運筆法と組み合わせ美しくスムーズに書けるように練習することが求められる。

(3) 形 (Form)

欧米では伝統的に文字は図形描画の延長であると考えられる傾向がある。たとえば、ペスタロッツィ(1960, 初出1801)は、「習字より先に図画をやらせると、それによって字の形を正しく書くことが児童にとって途方もなくやさしくなり、時間の大きな節約になる」と述べており、直観に基づき正確な図形描画を習得した上で、文字の練習をすることを推奨していた。

スペンセリアン法においても、“Key”には、“Writing and drawing are sister arts, children of form, deriving from her their common element, the line, with all its beautiful variations”との表記があり、“writing”は“drawing”と類似性があるとされている。既に述べたようにスペンセリアン法は、いわゆる分解結合法である。分解結合法とは、文字を分解して字画ごとに練習し、それを結合させて字形を系統的に学習する書字教育法である。スペンセリアン法では、文字を書く前には、文字を構成する部分、すなわち線の種類、線の傾き、線の結合に関して正しい概念をもたなければならないとされている。すなわち、正確に美しく書く写すためには、そのサイズ、形状を理解した上で、書法を身につけていくことが求められるのである。そのため、まずはスペンセリアン法で使用される線の種類について把握し、それぞれの線を結合した字形、サイズ等について十分に理解したうえで練習する必要がある。

まず、線の種類には、直線、曲線の2種類があり、さらに曲線には、右曲線、左曲線がある。ここでいう曲線の左右の区別は、楕円を描いたときに、その向かって右側にある弧を右曲線、左側の弧を左曲線と呼ぶのである。

また、直線、曲線ともに線は、ベースラインに対する傾きによって水平線、垂直線、斜線の3種に分けられる。ベースラインとは、図6で示したように英語ノートにみられる文字を書くための複数の横罫線のうち基準となる線(通常の4線3行の英語ノートであれば下から2本目の線)ことであるが、スペンセリアン法においては全6本の線のうち、上から4本目の線である。なお、図6では、下の2本を省略している。

この水平線、垂直線、斜線の3種類の線のなかで、通常最も多く使用するのは斜線である。スペンセリアン法における斜線の角度には、基本角度(Main Slant)と結合角度(Connective Slant)があり、それぞれ、ベースラインに対して右斜め上方向にそれぞれ52度、30度の傾きである。多くの文字は基本角度(52度)で構成されており、一方の結合角度(30度)とは、一つの文字から次の文字へと結合させる際の斜線に多用される。

スペンセリアン法においては、ほとんどの斜線がこの二つの角度のいずれかを使用しているため、この数値は極めて重要である。この二つの角度をもった斜線がさらに直線と曲線(右曲線、左曲線)に細分化される

二つの角度の斜線に次いで重要なものは、水平線である。水平線には、水平直線と水平曲線があり、水平直線は、小文字のtの横線に使用される(図7左)。水平曲線(horizontal curve)は、上に開いた形の曲線である(図7右)。これは、

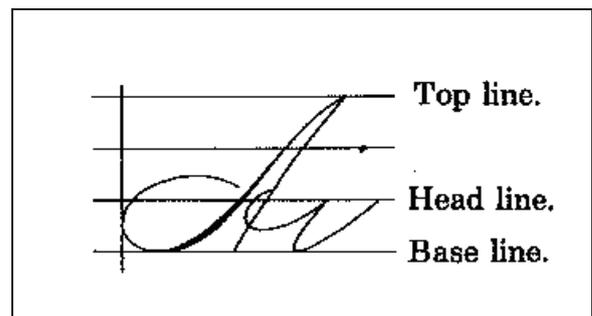


図6. ベースラインとヘッドライン

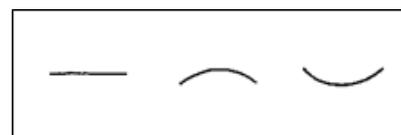


図7. 水平線

水平直線よりも使用頻度が高く w, v, o などの最後の部分で、次の文字への結合部に使用される。

また、2本以上の線を繋ぐ際の曲がり方について押さえておく必要がある。これには、①鋭角結合“angular joining”、②小回転“short turn”、③ループ曲線“loop”、④楕円回転“oval turns”の4種の曲がり方がある(図8①~③、図9)。

まず、①の鋭角結合は、図8の小文字iの上部にあるいわゆるV字ターンである。ターンする点でペンの動きが一瞬止まり、方向転換する。ただし、V字というよりは、ターンした直後にそのままわずかに引き返してから方向転換することもある。次に、②の小回転は、図8の小文字iの下部にあるいわゆるU字ターンであり、ペンの動きを止めずにできる限り小さなカーブで回転することが重要であるとされている。

③のループ曲線は、左曲線と右曲線を小回転でつないだ曲線で、この2曲線が交差しているものである。最後に、④楕円回転(図9)は、主に大文字を書く際に使用する。卵を描くように楕円を書き、左右の曲線を結合する。楕円を書く際の方向として、“Direct oval”、“Reversed oval”の2種の向きがある。“Direct oval”は、外側から中に巻き込んで書く左回りの楕円であり、“Reversed oval”は中から外に広がるように書いていく右回りの楕円である。

以上みてきたように、スペンセリアン法において字形をとるためには、線の種類、傾き、線の結合の知識を押さえておく必要がある。

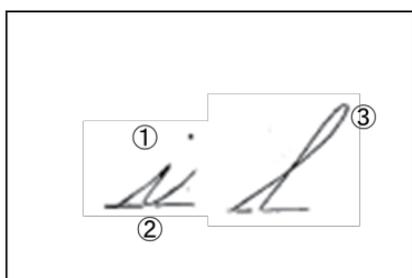


図8. 線の結合

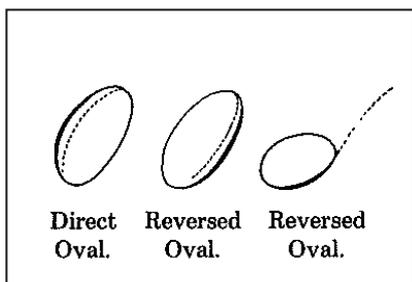


図9. 楕円回転

(4) 7原則 (Seven Principles)

これまで紹介した「線」及びその「曲がり方」の理論を組み合わせて、スペンセリアン法では、7つの原則を示している。この7原則こそ、スペンセリアン法の核となる理論であり、(3)で述べた基本角度(52度)、結合角度(30度)とともに極めて重要である。

この7原則を組み合わせていくことにより、小文字、大文字を構成していくのである。

文字を構成する原則には、「第1原則：直線(straight line)」、「第2原則：右曲線(right curve)」、「第3原則：左曲線(left curve)」、「第4原則：ループ曲線(loop)」、「第5原則：楕円(direct oval)」、「第6原則：反転楕円(reversed oval)」、「第7原則：大文字軸(the capital stem)」の7つが挙げられている(図10)。

このうち、第1原則から第4原則までを小文字で使用し、第5原則から第7原則までを大文字で使用する。この7つの原則とその結合法を徹底して身につけることにより、理論上は、すべての大文字、小文字を書くことが可能となる。

ところで、“Key”では、8つの原則が提示されており、この8原則のうち、“System”、“Theory”では大文字の原則の一つ減らして7原則が示されたのである。この8原則について、鈴木(1884)では、「英字八法」と名付けて、この8原則を紹介している。すでに2節においてスペンセリアン法の特徴Ⅱで述べたように、スペンセリアン法における分解結合法は、わが国の毛筆書字教育に伝わる本来の「永字八法」と異なり、はじめに原則にある一点画ずつ練習し、その後それぞれの点画を結合し、一つの文字に完成させる方法であった。すなわち、最初は、第1原則の直線の斜線のみを繰り返して練習させ、次に第2原則の右曲線のみ練習してこれらを結合して一つの文字を完成させるのである。「永字八法」が一つの文字「永」を完成させていく過程において、「永」の文字に含まれる基本点画を学んでいく方法であったのに対して、スペンセリアン法における分解結合法は、アルファベット一文字ずつ学習していくことから、字義を重視しないという点においてもわが国の書字教育とは異質であった。

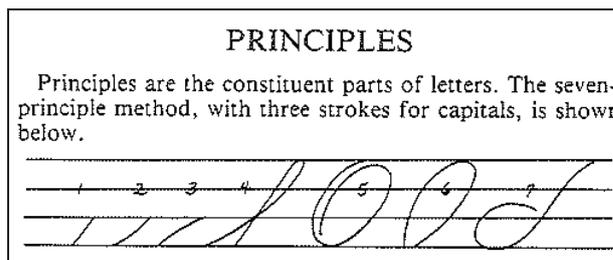


図10. スペンセリアン法の7原則

結びにかえて

本稿では、スペンセリアン法の概要を示し、その基礎理論について述べてきた。スペンセリアン法は、美しさと速さを追求し、両立するための緻密に体系付けられた英習字理論であった。

とはいえ、本稿で紹介しているスペンセリアン法は、あくまでも19世紀のアメリカにおける筆記体書法であり、情報入力機器の普及した現代においてこれをそのまま適用できるわけではない。たとえば、第3節で紹介した姿勢について、机に正対せずに筆記する方法は現代の学校教育では考えにくい。さらに、わが国では、用紙を傾けて筆記するという方法にも、抵抗を感じるものが少なくないだろう。

しかしながら、このように、他人に読みやすく、美しい文字を書くことを徹底的に迫る姿勢は、文字言語によるコミュニケーション能力の一つとして現代においても評価できるものであり、今後、筆記体の意義を再考するための一助となるものと考えられる。

本稿では、紙幅の都合により主にスペンセリアン法の概要と基礎理論のみにとどめているが、次稿において、実践的な小文字書法および大文字書法について紹介する予定である。

文献

倉沢 剛(1963): 小学校の歴史 I . ジャパンライブラリービューロー, 東京, pp814-819.

Northend, C. (1874): *The Teachers Assistant*. A.S. Barnes & Company, New York, p179.

ノルゼント, C., カステール, V. 訳(1990): 教師必読 下. In: 上沼八郎編, 明治大正「教師論」文献集成第3巻, ゆまに書房, 東京, p94.

松本仁志(1989): いわゆる「ノメクタ」式教材配列の成立と変遷(1). 書写書道教育 **3**, 54-55.

望月久貴(2007): 明治初期国語教育の研究. 溪水社, 広島, pp301-304.

文部科学省(2008): 中学校学習指導要領解説 外国語科編. 開隆堂, 東京, p6, p49.

森義秀一(1970): 英字の書体と書法. In: 日本ペンマンシップ協会編, 日本のペンマンシップ. 日本ペンマンシップ協会, 東京, pp8-11.

ペスタロッチー, J.H., 長田 新訳(1960, 初出1801): ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか. In: 長田 新編, ペスタロッチー全集第八巻. 平凡社, 東京, pp146-156.

佐々木秀一(1912): 小学校の英語科を如何にすべき. 教育研究 **103**, 33-41.

嶋次三郎(1873): 童蒙習字各国以呂波. 好文堂・富山堂, 出版地不明.

篠田治夫(1948): 英習字. In: 研究社新英語教育講座編集部編, 新英語教育講座 第3巻, 研究社, 東京, pp175-179.

Spencer, H.C. (1866): *Spencerian Key to Practical Penmanship*. Ivison, Blakeman, Taylor & Co., New York. pp24-33, pp39-40, pp151-157.

Spencer, P.R. (1864): *The System of Practical Spencerian Penmanship*. Ivison, Phinney, Blackman, Taylor & Co., New York. (復刻版)

スペンセリアン, P.R., 森 孫一郎訳(1885): ペンマンシップ 4巻. 森本専助, 大阪.

鈴木篤三(1884): 英習字本. 巻之1-3, 鈴木篤三, 和歌山.

The Spencerian Authors (1874): *Theory of Spencerian Penmanship for Schools and Private Learners*. Ivison, Blakeman, Talor & Co., New York. (復刻版)

東京茗溪会編(1892): 高等師範学校附属小学科教授細目. 文学舎, 東京. p195.

富山真知子(2007): 筆記体が読めない、書けない大学生. 大学時報 **56 (313)**, 98-103.

豊永知恵子(2011): 最近の学生のアルファベット筆記体に関する考え並びにペン書写の効用と提案. 仏語仏文学 **37**, 263-280.

吉田一郎(1932): 英習字の理論と実際. 大日本英習字研究会, 東京, p9.

吉田庸徳(1873): 横文字運筆自在. 東京書林, 東京.

The Theory and Handwriting Method of Spencerian Penmanship

Takashi SUZUKI

Teacher Training Support office, Tokyo University of Social Welfare (Ikebukuro Campus),
1-7-12 Higashi-ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 170-0013, Japan

Abstract : This paper gives an explanation about the theory of Spencerian penmanship, which was one of the most famous cursive handwriting theories in the United States in the 19th century. This volume referred to the history and the basic theory of Spencerian penmanship. This writing skill works to write legible and beautiful letters speedily. Now in Japan cursive writing is considered as shorthand skills and misunderstood as informal writing style. Therefore this study aimed to urge exact understanding about cursive writing and explained the basic theory of Spencerian penmanship, which consisted of position, holding the pen and movements, form, and the seven principles. Spencerian penmanship is valuable as one of the communication methods by literal language and helps to reconsider the significance of cursive writing. (Reprint request should be sent to Takashi Suzuki)

Key words : English education, Penmanship, Cursive, Spencer, Writing Education

旧学制下群馬県における小学校教員検定制度 — 1900年9月以前 —

内田 徹^{*1}・丸山剛史^{*2}

*1 東京福祉大学 教職課程支援室 (伊勢崎キャンパス)
〒372-0831 伊勢崎市山王町2020-1

*2 宇都宮大学 教育学部
〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350

(2015年1月7日受付、2015年2月12日受理)

抄録: 本研究の目的は、旧学制下群馬県における小学校教員検定制度の形成過程を、詳細に明らかにすることである。資料として群馬県立文書館所蔵文書を主に用いた。分析に際して、1)出願・検定手続きの方法、2)試験の時期・実施回数および試験会場、3)検定の方法あるいは判定基準、4)手数料の有無および金額の4点に着目した。検討の結果、文書館所蔵文書から新たに4つの関係規則を見つけ出すことができ、群馬県では「教育令施行規程」および「公立小学教員学力試験法」、「小学校教員免許状授与規則」、「小学校教員学力検定試験細則」および「小学校授業生規則」、「小学校教員検定等二関スル細則」を経て、1894年の細則全部改正において1900年9月以前の最終形態に至ったことが明らかになった。その過程では、検定受験者の質低下が報告され、その後、検定施行回数が削減されたが、合格判定基準は隣接する栃木県より低く設定されていたこと、などが明らかになった。

(別刷請求先: 内田 徹)

キーワード: 19世紀、小学校教員検定、群馬県

緒言

船寄(1994)は、初等教員養成史研究の一環としての検定試験制度史研究の必要性について、「小学校教員養成史は師範学校史と同一ではなく、検定試験制度史を合わせて明らかにしなければその研究は完結しない」と述べている。また、検定の実施主体が道府県であり、都道府県庁文書の残存状況により研究の成否が左右されることも指摘している。こうした指摘に促され、岡山県(遠藤, 2008)、宮城県(笠間, 2010)、秋田県(釜田, 2012, 2014)、静岡県(丸山ら, 2014)、兵庫県(山本, 2014)の事例研究が蓄積されてきた。

ところで、群馬県の県立文書館は史資料がよく整備された文書館として知られている。地域学校史研究に取り組んだ花井(2011)は、「見事に整理された史料群」があることを記している。筆者ら(内田・丸山, 2011)も、さきの事例研究において同館所蔵文書を使用したことがあり、小学校教員検定に関し有意義な史料群とその整備状況に注目していた。

群馬県の初等教員検定に関しては、『群馬県教育史』(全4巻)(群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局・群馬県教育センター, 1972, 1973, 1974, 1975)が検討している。

同書は、小学校教員検定に関する諸規則の存在とその変遷について記述しているが、すべてについて言及しているわけではない。例えば、秋田・静岡県で1886(明治19)年から1887(明治20)年にかけて授業生に関する免許規則が存在することが確認されているが、同書は言及していない。

そこで、本研究の目的は、第二次大戦前の日本の小学校・国民学校教員(以下、初等教員)検定制度史研究の一環として、群馬県の初等教員検定制度を取り上げ、その形成と展開の過程をより詳細に明らかにすることにある。

研究対象と方法

本研究では、群馬県立文書館所蔵文書を用い、群馬県における初等教員検定制度の形成と展開の過程を、より詳細に明らかにすることを試みた。ただし、本論文では紙幅の都合により、学制制定から1900(明治33)年10月17日の群馬県令第87号「小学校令同施行規則実施二関スル細則」制定以前までの時期を扱うこととする。

分析にあたっては、1)出願・検定手続きの方法、2)試験の時期・実施回数及び試験会場、3)検定方法あるいは判定基準、4)手数料の有無及び金額の4点に着目した。

1. 教育令施行規程及び公立小学教員学力試験法

教員資格取得に関して今回確認し得た最も古い規程として、1880(明治13)年1月20日付け甲第9号「教育令施行規程」及び同年「公立小学教員学力試験法」があげられる。

「教育令施行規程」は、全22条からなり、第11条において教員資格取得に関して規定している。第11条の条文は以下の通りである。

「第十一条 師範学校ノ卒業証書ヲ得スシテ公立小学ノ教員タラントスルモノハ其有スル学力カヲ本県師範学校ニ於テ試験ナサシム」

「教育令実施規程」では、師範学校卒業証書を所持しない、公立小学校教員希望者には師範学校において試験を実施することが明記されていた。「教育令実施規程」ではこれ以上の言及はない。同年1月に加除更訂された「群馬県師範学校規則」でも上記の点は規定されていない。この点に関して、「群馬県年報」(同年度)は、「公立小学教員学力試験法」について述べ、公立師範学校卒業証書を所持しない、公立小学校教員希望者に「本県師範学校」において試験を実施することを記している(文部省, 1914)。

「〔公立小学教員学力試験法〕此法ハ公立師範学校ノ卒業証書ヲ有セスシテ本県公立小学教員タランヲ望ム者ノ学力ヲ試験判定スル為ニ設クルモノトス 試験ハ毎年一八月ノ両月ヲ除キ毎月第一次月曜日ヲ以テ期日ト定メ本県師範学校ニ於テ施行ス 試験ヲ請フ者ハ願書ヲ製シ本庁ニ差出フ法トス 試験ヲ分チテ甲乙丙ノ三科トス而シテ其科ニ適合スルモノニハ本県公立小学教員委嘱法ニ照準シ学力証明書ヲ交付シ本県規定スル訓導准訓導及授業生タルヲ得ルモノトス 丙科ニ適合スルモノノ学力証明書ヲ得テ授業生タルヲ得ルト雖モ特ニ助手タルヲ以テ公立小学教員ト認ムルヲ得ス 試科ハ本人ノ志願ニ依リ履歴書ニ照シ三科ノ中其一ヲ試ムルモノトス 甲乙丙三科ノ試験ヲ経テ合格セサル者再ヒ試験ヲ請フハ六月月ヲ経過スルニ非サレハ之ヲ許サス 試験科目 甲科 地理学、歴史学、修身学、物理学、化学、生理学、博物学、経済学、文章学、算術、幾何学、簿記学、作文、書法、画学、授業法 乙科 地理学、歴史学、修身学、物理学、化学、生理学、博物学、経済学、文章学、算術、作文、画学、書法、授業法 丙科 地理学、歴史学、修身学、算術、作文、書法、授業法」

「公立小学教員学力試験法」は、公立小学校教員志望者に対し、「願書」を県庁に提出することを求め、1、8月を除く毎月(年10回)、師範学校において「試験」を施行することを定めていた。「試験」は「甲乙丙」の三科に分けて実施され、試験結果に応じて訓導、准訓導、授業生に任用されることとされた^{注1}。判定基準や手数料に関しては記述されていない。

2. 小学校教員免許状授与規則

1882(明治15)年4月29日、甲第32号により「小学校教員免許状授与規則」が制定された。『群馬県教育史』では規則が制定されたことは記されているが、その詳細は明らかにされていない。文書館には規則を掲載した文書が残されている。同文書によれば、規則の条文は以下の通りである(群馬県, 1882)。

第一条 官立公立師範学校ノ卒業証書ヲ有セスシテ本県小学校教員タルヲ望ム者ハ小学初等科若クハ中等科若クハ高等科ヲ教授シ得ルニ足ルノ学力アルヲ検定シタル後第一号書式ノ教員免許状ヲ授与スルモノトス最小学各等科中唱歌体操裁縫家事経済及土地ノ情況ニ因リテ加フル所ノ農業工業商業等ノ一科若クハ数科ハ之ヲ検定セサルコトアルヘシ

但小学高等科教員免許状ヲ有スル者ハ亦中等科若クハ初等科ノ教員タルヲ得中等科教員免許状ヲ有スル者ハ亦初等科ノ教員タルヲ得ルハ勿論タルヘシ

第二条 唱歌体操裁縫家事経済等ノ学科ニ関シテハ特ニ之ヲ教授スルモノヲ置キ第一条合格ノ教員ヲ得難キ土地ニ於テハ一学科若クハ数学科ヲ教授シ得ル者ヲ合セテ合格教員ニ代用スルヲ許可スルコトアルヘシ此等ノ場合ニ於テハ各自ノ学力ヲ検定シテ第二号書式ノ某学科教授免許状ヲ授与スヘシ

但本文免許状ヲ有スル者ト雖モ教員ノ資格ハ有セサルモノトス

第三条 教員免許状及某学科教授免許状ノ効有スル年限ハ五箇年トス此期限ヲ過キ尚教員タルヲ望ム者ハ更ニ学力ヲ検定シテ免許状ヲ授与スヘシ

第四条 小学校教則ニ変更ヲ生シタルカ為メ教員免許状及某学科教授免許状モ亦変更セサルコトヲ得スト認ムル場合ニ於テハ前条年限内ト雖モ更ニ其要スル所ノ学力ヲ検定シテ免許状ヲ補正スヘシ

第五条 碩学老儒等ノ徳望アリテ修身科ノ教授ヲ善クスル者若クハ小学各等科中土地ノ情況ニ因リテ加フル所ノ農業工業商業等ノ學術ニ長スル者ハ学力ノ検定ヲ要セス文部卿ノ認可ヲ経テ第三号書式ノ該学科教授免許状ヲ授与シテ教員トナスコトアルヘシ

第六条 免許状ヲ乞フ者ハ年齢十八年以上タルヘシ

第七条 品行不正ニ因リテ其ノ職ヲ解罷スルハ免許状ヲ没収スルモノトス

第八条 学力検定ハ隔月一月三月五月等第一月曜日ヲ期トシ本県師範学校ニ於テ施行ス

但第一月曜休日ニ当レハ次ノ月曜日ヲ用フヘシ

第九条 免許状ヲ請フ者ハ第四号及第五号書式ニ準シ前条期日十日前郡役所ヲ経県庁へ出願シ期日午前第八

時師範学校へ出頭スヘシ

第十条 試科ハ本人ノ志願ニ依リ初等中等高等ノ一科ヲ試ムヘシ

第十一条 試験不合格ノ者ハ六箇月ヲ経過スルニアラサレハ再試ヲ許サス

但初回高等科ニ合格セスシテ次回低科ノ試験ヲ請フ者ハ此限ニアラス

第十二条 試験ハ点数ヲ以テ此ヲ判決ス先各科ニ定点三十点ヲ付シ失誤ニ随テ之ヲ減殺シ其得点ヲ合セ全点ノ六分以上ニシテ一科二分以上ヲ得ルモノヲ合格トス

但減点ノ法ハ失誤ノ大小ニ從テ差等ス假令ハ読書科字音正シカラサルモ義明カナレハ半点ヲ減シ字音正シト雖モ義解セサル者ハ一点ヲ減シ音義共ニ不正ナル者ハ二点ヲ減シ又算術科ノ如キハ三題ニシテ一題ヲ失スレハ十点ヲ減シ式正シクシテ答正シカラサルモノハ半失即チ五点ヲ減スル等ノ類

第十三条 各等科試験得点ノ多寡ニ依リ其等差ヲ定ムルヲ左ノ如シ

高等科合計十八科 唱歌体操裁縫家事経済ヲ除ク ニシテ一科三十点ツツ総点五百四十点ナリ是六分以上即チ三百二十四点以上ヲ及第トシ其得点数ヲ分チ四等トス

(等級及び点数については省略 引用者)

中等科合計十三科 唱歌体操裁縫ヲ除ク ニシテ一科三十点ツツ総点三百九十点ナリ是六分以上即チ二百三十四点以上ヲ及第トシ其得点数ヲ分チ三等トス

(等級及び点数については省略 引用者)

初等科合計九科 唱歌体操ヲ除ク ニシテ一科三十点ツツ総点二百七十点ナリ是六分以上即チ百六十二点以上ヲ及第トシ其得点数ヲ分チ三等トス

(等級及び点数については省略 引用者)

第十四条 試験科目ヲ定ムル左ノ如シ

但時宜ニ因リ□書ヲ講義ニ訓点及文法ヲ素読及質□ニ筆記ヲ口述ニ換フルヲアルヘシ又授業ハ時トシテ実地演習セシムルヲアルヘシ(□は判読不能 引用者)

(等科別学科目一覧表省略 引用者)

「小学校教員免許状授与規則」によれば、免許状申請者は、「小学校教員試験願」(第4号書式)及び身元保証に関する文書(第5号書式)を、郡役所を経由して県庁に提出することとされた。提出書類は戸長及び学務委員の署名が必要とされており、人物保証に関する要素が含まれている。「学力検定」は、隔月とされ年6回の施行が予定されており、師範学校において施行することとされた。試験は、初等科は修身、読書、作文、習字、筆算、珠算、地理、歴史、実地授業の9科が課された。中等科は初等科の9科目に加えて図画、博物、物理、体操、裁縫、教育学学校管理法の6科が課され

た。高等科は中等科の15科目に加えて、生理、化学、幾何、代数、経済、家事経済の6科が課された(なお、いずれも「唱歌ハ当分之ヲ欠ク)。試験は各科目30点満点であり、各科目20%以上、合計得点が60%以上の得点を獲得した者が合格とされた。手数料に関しては特に記されていない。

なお、県立文書館所蔵文書の中には、同規則下での検定実施状況を記した文書が残されている。同文書によると、1884(明治17)年頃、毎回100前後の検定応募者がいるが、受験者の学力は低下傾向にあり、合格者は少なかったと記されている(群馬県, 1883)。同年7月には北甘楽郡において講習会を開設させて、その後試験を実施したところ、「例月ノ試験ニ比スレハ頗ル美績ヲ現シタリ」と成績が向上したことが記され、講習会の効果が着目されている。その後の教員養成講習会の起源とも思われ、興味深い記述である。

3. 小学校教員学力検定試験細則・小学校授業生免許規則

1887(明治20)年2月10日、県令第16号により「小学校教員学力検定試験細則」が制定された。同日付で県令第20号により「小学校簡易科教員及小学校授業生規則」も制定されたと考えられるが、県立文書館所蔵文書で確認できたのは「小学校授業生免許規則」である。『群馬県小学校教員検定試験問題集全』(村山, 1890)収録の「附録 各試験規則」には「小学校簡易科教員及小学校授業生規則」が掲載されており、制定当初は簡易科教員規則も含まれていたと考えられる。

3-1 小学校教員学力検定試験細則

県令第16号によれば、「小学校教員学力検定試験細則」は、1886(明治19)年の文部省令第12号「小学校教員免許規則」第16条に基づき制定されたとされる。「小学校教員免許規則」第16条は、「小学校教員学力検定試験細則」制定を府知事県令に求めた規定であった。「小学校教員学力検定試験細則」は、全7条からなる。条文は以下の通りである(群馬県, 1887)。

第一条 学力検定試験ハ毎年一回(五月)第一月曜日ヨリ本庁ニ於テ之ヲ施行ス

第二条 検定試験評点ハ每学科一百点ヲ定点トシ其四分以上ヲ得テ各科平均定点ノ六分以上ヲ得ルモノヲ及第トス

第三条 一科若クハ数科ニ限りタル教員学力検定試験ヲ乞フモノハ別ニ其ノ学科ノ教授法ヲ試ムルモノトス

第四条 検定試験用図書ハ別ニ之ヲ定ム

第五条 検定試験ヲ乞フモノハ試験手数料トシテ金壹円差出スヘシ

第六条 験定試験ヲ受ケントスルモノハ左式ノ願書及履歴書ヲ試験三十日前ニ戸長ノ奥書ヲ得テ郡長ニ差出スヘシ郡長ハ本人品行書ヲ審査シ之レニ意見ヲ付シ直ニ本庁ヘ進達スヘシ（書式省略 引用者）

第七条 教員免許状所持ノ者ニシテ満期ニ至リ尚試験ヲ受ケントスル者モ此ノ細則ニ依ルヘキモノトス

「小学校教員学力験定試験細則」によれば、「学力験定試験」受験希望者は、願書及び履歴書を、戸長の奥書を得て郡長に提出することとされた。郡長は受験希望者の品行を審査し、意見を付して群馬県庁に進達することとされた。試験は、毎年1回、5月に群馬県庁にて施行することとされた。試験は各科目100点満点であり、各科目40%以上、合計得点が60%以上の得点を獲得した者が合格とされた。手数料に関しては、「試験手数料」として1円を支払うことが記されていた。

さきの「小学校教員免許状授与規則」と比較すると、提出書類に関して郡長による品行審査が行われ、意見が付されることになったこと、試験施行回数が年6回から年1回へと大幅に削減させられたこと、合格最低点が一科目20%以上から40%以上へと引き上げられたことがわかる。いずれも基準が高められたと考えられる。新たに試験手数料が求められるようになったことも着目される。

3-2 小学校授業生免許規則

県令第20号によれば、「小学校授業生免許規則」は、1886年の文部省令第12号「小学校教員免許規則」第14条に基づき制定されたとされる。「小学校教員免許規則」第14条は、「小学校簡易科教員及小学校授業生規則」制定を府知事県令に求めた規定であった。

ここでは、県立文書館所蔵文書に基づき、要点のみを確認しておく。授業生規則は、全11条からなる（群馬県、1887）。「小学校授業生免許規則」によれば、学力験定受験希望者は、願書及び履歴書を、戸長の奥書を得て郡長に提出することとされた。郡長は受験希望者の品行を審査し、意見を付して群馬県庁に進達することとされた。試験は、毎年3回、1、7、11月に群馬県庁にて施行することとされた。試験科目は、修身、読書、作文、習字、算術、教授法、体操の各科目であった。判定基準に関しては、各科目100点満点であり、各科目40%以上、合計得点が60%以上の得点を獲得した者が合格とされた。手数料に関しては、「試験手数料」として30銭を支払うことが記されていた。

3-3 その他の関係規則

その他、同年、「小学校教員学力験定試験用図書」及び「小学校尋常科教員仮免許規程」が制定されたことにも着

目しておきたい。

3月3日、県令第36号により「小学校教員学力験定試験用図書」が制定された（群馬県、1887）。これは前記の県令第18号に基づく措置である。県令第18号では、第4条において「験定試験用図書ハ別ニ之ヲ定ム」と定めており、約1ヵ月遅れて検定用図書が明示された。

10月11日、県令第105号により「小学校尋常科教員仮免許規程」が制定された（群馬県、1887）。同規程は、同年8月の文部省令第7号に基づき制定されたとされ、全12条からなる。同規程によれば、検定試験受験希望者は願書に履歴書を添え、戸長の奥書を得て郡長に提出することとされた。郡長は品行審査を行い、意見を付し、群馬県庁に進達することとされていた。試験は年2回、3、9月に群馬県庁で施行することとなっていた。試験科目は、修身、教育、授業法、読書、習字、作文、算術、地理歴史、理科、体操の各科目であった（第2条）。判定基準に関しては、各科目100点満点であり、各科目40%以上、合計得点が60%以上の得点を獲得した者が及第とされた（第3条）。手数料に関しては、「試験手数料」として50銭、「免許手数料」として30銭、「書換」の場合には15銭を支払うことが規定されていた。ここでは、手数料の種類が1種類から3種類に増加し、それぞれ分けて徴収するよう規定されていたことが着目される。

ただし、同規程は、教員供給を目的とした規定であり、第2条の但し書きに「但從來教員ノ職ニ従事シ勤務ノ経歴ニヨリ特ニ其職ニ堪ユルモノト認ムル者ニハ試験ヲ要セス仮免許状ヲ授与スルコトアルヘシ」と記され、勤務経験により試験が免除される場合があることに留意する必要がある。

4. 小学校教員検定等二関スル細則

1892（明治25）年7月7日、県令第53号により「小学校教員検定等二関スル細則」が制定された。同細則は、前年11月の文部省令第19号「小学校教員検定等二関スル規則」第20条に基づき制定されたとされ、全17条からなる（群馬県、1892）。同条文は、『群馬県教育史』に掲載されているので、ここでは取り上げない。要点を確認しておけば次の通りである。

制定当初の「小学校教員検定等二関スル細則」は、検定受験希望者に願書に履歴書及び体格検査書を添え、市内の者には市長に提出し、町村の者は町村長の奥書を得て郡長に提出することとした。郡市長は受験者の品行について意見を付記して知事に提出することとされた。試験は、甲種検定は毎月1回施行することとされ、乙種検定は正教員の場合、年1回6月、准教員の場合、年2回2、10月に施行することとされた。試験は、准教員の場合、各科目100点満点で

あり、各科目40%以上、合計得点が60%以上の得点を獲得した者が及第とされた(専科教員は60%以上で及第)。手数料に関しては、「検定手数料」「免許手数料」「書換手数料」の3種が設定され、正教員の場合それぞれ1円、50銭、30銭、准教員の場合、50銭、30銭、20銭と決められていた。

しかし、2年後の1894(明治27)年4月の県令第17号により全部改正が行われている。改正後の条文は『群馬県教育史』でも取り上げられていないので、以下に記す。全部改正後は全20条の条文からなる(群馬県, 1894)。

第一条 小学校教員ノ甲種検定ハ出願者アルトキハ毎月一回之ヲ施行シ乙種検定ハ左ノ時期ニ於テ県庁内ニ之ヲ施行ス但乙種検定ハ臨時ニ施行スルコトアルヘシ

正教員 六月第一月曜日ノ准教員 二月十月第一月曜日

第二条 検定ヲ受ケントスルモノハ願書ニ履歴書及体格検査書ヲ添ヘ試験期日二十日前マテニ市内ニ在テハ市長ニ差出スヘク町村内ニ在テハ町村長ノ奥書ヲ得テ郡長ニ差出スヘシ郡市長ハ本人ノ品行ニ付キ意見ヲ付記シテ知事ニ差出スヘシ但甲種検定ヲ請ハントスルモノハ本文ノ手續ニ依リ何時ニテモ出願スルコトヲ得

第三条 尋常小学校本科准教員ノ試験科目及其ノ程度ハ左ノ如シ但裁縫ハ女子ニ限ル

- 修身 人倫道德ノ要旨
- 教育 教授法
- 国語 講読ノ仮名遣(用言及字音ヲ除ク)ノ作文 日用文、漢字交り文
- 算術 珠算 加減乗除ノ筆算 加減乗除、諸等、分数、小数、
- 地理 日本地理及外国地理ノ大要
- 歴史 日本歴史ノ大要
- 習字 楷書、行書、草書
- 裁縫 通常衣服ノ縫方、裁方
- 図画 自在画法
- 音楽 単音唱歌、楽器用法
- 体操 準備法、矯正、徒手、啞鈴、(男子ニ限ル)

第四条 高等小学校本科男准教員ノ試験科目及其ノ程度ハ左ノ如シ

- 修身 人倫道德ノ要旨
- 教育 教育学及学校管理法ノ大要、教授法
- 国語 講読ノ仮名遣(字音ヲ除ク)ノ作文 日用文、漢字交り文
- 漢文 講読
- 数学 珠算 加減乗除ノ筆算 加減乗除、諸等、分数、小数、比例、百分算
- 簿記 単記
- 地理 日本地理及外国地理ノ大要

- 歴史 日本歴史ノ大要
- 博物 人身ノ生理及衛生、植物、動物、鉱物ノ大要
- 物理 大要
- 化学 大要(無機)
- 習字 楷書、行書、草書
- 図画 自在画法
- 音楽 単音唱歌、楽器用法
- 体操 普通体操 準備法、矯正術、徒手、啞鈴ノ兵式体操柔軟体操、各個教練、小隊運動

第五条 高等小学校本科女准教員ノ試験科目及其ノ程度ハ左ノ如シ

- 修身 人倫道德ノ要旨
- 教育 教育学及学校管理法ノ大要、教授法
- 国語 講読ノ仮名遣(字音ヲ除ク)ノ作文 日用文、漢字交り文
- 数学 珠算 加減乗除ノ筆算 加減乗除、諸等、分数、小数、比例、百分算
- 地理 日本地理及外国地理ノ大要
- 歴史 日本歴史ノ大要
- 理科 人身ノ生理及衛生、植物、動物、鉱物、物理、化学ノ初歩
- 家事 衣食住ニ関スル事項ノ通常ノ衣服ノ縫方、裁方、
- 習字 楷書、行書、草書
- 図画 自在画法
- 音楽 単音唱歌、楽器用法
- 体操 普通体操

第六条 高等小学校専科准教員ノ試験科目ノ程度ハ左ノ如シ但外国語ハ当分英語トス

- 図画 自在画法、幾何画法
- 音楽 単音唱歌、楽器用法
- 体操 普通体操 準備法、矯正術、徒手、啞鈴、ノ兵式体操 柔軟体操、各個教練、
- 家事 衣食住、育児ニ関スル事項及家計簿記ノ大要
- 裁縫 通常ノ衣服ノ縫方、裁方
- 手工 紙、木、竹、銅線等ヲ用ヒル簡易ナル細工
- 農業 土壤、肥料、農具、耕耘、栽培、養蚕、養畜等ニ関スル事項ノ大要
- 商業 商店、会社、売買、金融、運送、保険ニ関スル事項ノ大要
- 外国語 読方、文法、訳解

第七条 試験評点ハ毎科一百点ヲ以テ定点トシ本科准教員ニ在テハ其四分以上ヲ得テ各科平均定点ノ六分以上ヲ得タルモノヲ及第トシ専科教員ニ在テハ其六分以上ヲ得タル科目ヲ及第トス

第八条 乙種検定ヲ受クル者其ノ試験ニ合格セサルモ
 定点ノ六分以上ヲ得タル科目ニ限り合格証ヲ附与シ次
 回ノ検定期ニ於テハ其ノ試験ヲ行ハス但合格証ハ次回
 ノ検定期マテ有効トス

第九条 本科教員ノ試験科目中図画男女音楽男女体操
 女子ノ一科目若クハ数科目ハ受験者ノ望ニ依リ当分
 ノ欠クコトヲ得

第十条 高等小学校専科正教員ニ就テハ先ツ読書習字
 及算術ニ関シ其学力ヲ試験シ之ニ合格シタルモノニア
 ラサレハ其ノ試験ヲ行ハサルモノトス

前項ノ学力ヲ試ムル程度ハ第三条尋常小学校本科准教
 員ニ於ケル程度ニ準ス

第十一条 小学校教員ノ検定ヲ請フモノ免許状ヲ受ク
 ルモノ及書換ヲ請フモノハ左ノ手数料ヲ納ムヘシ但
 尋常師範学校卒業生ハ其ノ服務年限間本文ノ手数料ヲ
 納ムルコトヲ要セス

	検定手数料	免許手数料	書換手数料
正教員	金 壹 円	金 五 拾 銭	金 参 拾 銭
准教員	金 五 拾 銭	金 参 拾 銭	金 貳 拾 銭

検定手数料ハ願書ト共ニ差出スヘシ又該手数料ハ其ノ既
 ニ差出シタル後何等ノ事情アルモ之ヲ還付セサルモノト
 ス

第十二条 郡長ニ於テ小学校教員検定願ヲ受理シタル
 トキハ其ノ資格ノ有無並手数料額ヲ調査シ出納吏ヲシ
 テ直ニ現金ノ取納ヲ取扱ハシムヘシ

第十三条 郡長ニ於テ小学校教員免許状ヲ伝達シタル
 トキハ其収入スヘキ手数料額ヲ調査シ収入告知書ヲ発
 シ出納吏ヲシテ取納ヲ取扱ハシムヘシ

第十四条 郡長ハ毎月十日限り其ノ前月中ニ収入シタル
 手数料額ヲ報告スヘシ

第十五条 免許状ヲ段損亡失シ若クハ氏名ヲ変更シタル
 トキハ其ノ事由ヲ具シテ書換ヲ請フハシ

第十六条 尋常師範学校生徒卒業ノ際ニ限り別ニ出願ヲ
 要セス同校長ノ上申ニ依リ検定ヲ行ヒ免許状ヲ授与スヘ
 シ

第十七条 准教員ノ免許状ハ七箇年間有効トス

第十八条 准教員免許状ノ書式左ノ如シ(書式省略 引用者)

第十九条 小学校教員検定願ニ関スル書式左ノ如シ(書
 式省略 引用者)

附則

第二十条 本則発令前ニ於テ授与シタル合格証ニ限り尚
 ホ其授与ノ日ヨリ三箇年間有効トス

全部改正では、乙種検定の臨時施行、試験科目の「倫理」
 から「修身」への変更、郡長の手数料収入額報告義務が新た
 に規定された。

確認した限りでは、その後、4度の一部改正が行われた。
 1896(明治29)年5月4日の県令第42号により乙種検定正
 教員試験試行月が6月から7月に改められた(群馬県、
 1896)。1898(明治31)年2月25日の県令第16号により
 乙種臨時試験施行の場合は期日や場所を告示することとさ
 れ、同年6月23日の県令第31号では、合格証の有効期間が
 従来次期の検定までとされていたものが「三箇年有効」
 へと大幅に延長された(群馬県、1898)。1899(明治32)年
 5月18日の県令第18号では、郡市長の意見書について、従
 来は受験者すべてに意見を記すことになっていたが、意見
 を記すのは「特別ノ事情アルモノ」のみに限定されること
 になった(群馬県、1899)。

結果と考察

今回の調査研究により、『群馬県教育史』で取り上げられ
 ていなかった諸規則を新たに見つけ出すことができた。
 具体的には、小学校教員学力検定試験細則、小学校授業生
 規則、図書、小学校尋常科教員仮免許規程といった1887年
 に制定された諸規則をさす。

群馬県は、当初、教員学力試験の施行回数を多く設定し
 ていたが、回数多さは質の低下を顕著にすることが報告
 された。小学校教員学力検定試験(1887年)以後、試験実施
 回数を減らし(正教員は年1回、授業生・准教員は年2回)、
 受験機会を少なく設定した。こうした措置は、質の低下を
 防ぐ狙いがあったのではないと思われる。

しかし、合格判定基準は、他県よりやや低く設定されて
 いた。群馬県は合格判定基準に関して一科目の最低点数を
 40%以上としていた。これは隣接する栃木県より低い
 点数であった。栃木県では、各科目50%以上が求められ、
 一科目だけは40%以上でもよいこととされた(平均点
 60%以上は栃木県でも同じ。栃木県の関係規則の検討に
 よる。)。教員供給との関係で最低基準はやや低く設定し
 たことが考えられる。

いずれにしても、「教育令施行規程」および「公立小学教
 員学力試験法」、「小学校教員免許状授与規則」、「小学校教員
 学力検定試験細則」および「小学校授業生規則」、「小学校教
 員検定等ニ関スル細則」を経て、1894年の細則全部改正に
 おいて1900年9月以前の最終形態に至ったことが明らか
 になった。また、1887年の「小学校教員学力検定試験細則」
 において、人物を保証された者が必要書類を、郡役所等
 を通じて提出し、郡市長が意見を付して県庁に提出し、年1回

程度、県庁を主な試験会場として試験を実施する検定実施システムの基本骨格が形成されたと考えられる。

付記

本研究は、科学研究費補助金(26381011、基盤研究(C)「戦前日本の初等教員養成における初等教員検定の果たした役割に関する府県比較研究」:研究代表者・丸山剛史)の助成を受けたものである。

注1)「群馬県年報」には「公立小学教員委嘱法」も紹介されている。

文献

- 遠藤健治(2008):岡山県下における小学校教員養成所の展開ー設置目的の変遷を中心としてー. In: 中国四国教育学会 教育学研究紀要 **54**, 276-281.
- 船寄俊雄(1994):教員養成史研究の課題と展望. 日本教育史研究 **13**, 83-84.
- 船寄俊雄(2014):論集現代日本の教育史2 教員養成・教師論. 日本図書センター, 東京.
- 花井 信(2011):山峡の学校史. 川島書店, 東京, p243.
- 釜田 史(2012):秋田県小学校教員養成史研究序説ー小学校教員検定制度を中心にー. 学文社, 東京,
- 釜田 史(2014):小学校教員無試験検定制度に関する研究ー秋田県を事例としてー. 日本教育史学会紀要 **4**, 1-19.
- 笠間賢二(2010):近代日本における「もう一つ」の教員養成ー地方教育会による教員養成講習会の研究ー. In: 梶山雅史(編), 続・近代日本教育会史研究. 学術出版会, 東京, pp251-281.
- 群馬県(1882):教育事務便覧 第一・第二編. 受入記号 A0181A0M, 文書番号2058.
- 群馬県(1883):明治十六、十七両年学事年報分類事項. 受入記号 A0181A0M, 文書番号2074.
- 群馬県(1887):自明治19年至明治20年群馬県報(県令). 請求番号: 県報FP1.
- 群馬県(1892):明治25年群馬県報(県令). 請求番号: FP1.
- 群馬県(1894):明治27年群馬県報(県令・訓令甲). 請求番号: FP19 1/2.
- 群馬県(1896):明治29年群馬県報(県令). 請求番号: FP24.
- 群馬県(1898):県令綴. 受入記号 A0181A0M, 文書番号2756.
- 群馬県(1899):明治32年群馬県報. 請求番号: FP32.
- 群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局(1972):群馬県教育史 第一巻: 明治編上巻. 群馬県教育センター, 前橋.
- 群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局(1973):群馬県教育史 第二巻: 明治編下巻. 群馬県教育センター, 前橋.
- 群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局(1974):群馬県教育史 第三巻: 大正編. 群馬県教育センター, 前橋.
- 群馬県教育史研究編さん委員会編さん事務局(1975):群馬県教育史 第一巻: 昭和編. 群馬県教育センター, 前橋.
- 丸山剛史(2014):静岡県の中等教員養成と初等教員検定制度ー研究ノートー. In: 丸山剛史(代表), 戦前日本の初等教員養成における初等教員検定の意義と役割に関する通史的事例研究. 平成23~25年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書. pp55-102.
- 文部省(1914):群馬県年報, 文部省第八年報明治十三年, p125.
- 内田 徹・丸山剛史(2011):昭和戦前期の女教員の小学校教員検定利用に関する事例研究. 関東教育学会第59回大会研究発表要旨, pp15-16.
- 山本朗登(2014):兵庫県における小学校教員検定制度についての一考察. In: 丸山剛史(代表), 戦前日本の初等教員養成における初等教員検定の意義と役割に関する通史的事例研究. 平成23~25年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書, pp9-17.

Historical Analysis on Certificate Examination System for Elementary School Teachers in Gunma Prefecture in the 19th Century

Toru UCHIDA^{*1} and Tsuyoshi MARUYAMA^{*2}

^{*1} Teacher Training Support Office, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

^{*2} Faculty of Education, Utsunomiya University,
350 Mine-machi, Utsunomiya-city, Tochigi 321-8505, Japan

Abstract : The purpose of this study was to clarify the formation process of the certificate examination system for the elementary school teachers in Gunma prefecture in the 19th century by analyzing chiefly documents in Gunma prefectural archives. Points of view are as follows: 1) the procedure of application, 2) the time of number and the place of the examination, 3) the passing criterion and 4) the charge. The principal results can be summarized as follows: 1) The revised regulation in 1894 was the end form before September 1900. Regulation for the public elementary school teacher achievement test was established in 1880. The basic structure was formed by regulation for the elementary school teacher achievement test, which was established in 1887. Regulation on certificate examination for elementary school teachers was established in 1892, and it was revised in 1894. 2) A decline of the quality of the official approval examinee was regarded as a problem, and the number of times of the test decreased. The number of examinees of each time was about 100 in around 1884, but the successful candidate was little. The teacher achieve test number was reduced from 6 times a year to once a year by the established regulation in 1887. 3) The acceptance standard was established low. The examinees with score rate of higher than 40% could pass the examination in Gunma prefecture. Whereas, the score rate of higher than 50% was needed to pass the examination in Tochigi prefecture.

(Reprint request should be sent to Toru Uchida)

Key words : Nineteenth century, Official certification for elementary school teacher, Gunma prefecture

卒業研究レポート

幼児の行動と脳機能における男女差について — 幼稚園・保育所実習を通して —

萩原由佳・安 智澄・山川湧貴・山本絵里香

指導教員

栗原 久

東京福祉大学 短期大学部
〒372-0831 伊勢崎市山王町2020-1
(2015年1月30日受付、2015年3月10日受理)

要旨: 教育実習(幼稚園)と福祉実習(保育所)を行う中で、同年齢の男児と女児の間で、遊びや幼児同士の関係などを含めた行動に違いがあることに気づき、その原因について興味を持ち、文献にて調べた。男性脳・女性脳の形成は、受精から7週から12週齢の間の男性ホルモン分泌の有無に強く支配され、また化学物質や妊娠中のストレスが関与していることから、乳幼児の健やかな成長を考えると、出生後だけでなく、胎児期の健康(母体の健康)も大事であることが理解できた。(別刷請求先: 栗原 久)

キーワード: 幼児の行動発達、男女差、脳機能

緒言

人は、精子と卵子の合体(受精:単細胞の状態)以来、組織・器官の形成が中心の胎芽期、それらの充実と脳機能による調節機能の発達が中心である胎児期を経て、38週で出生する。出生時の細胞数は約6兆個といわれており、身体についてはすでに成熟の状態にある。しかし、脳については、出生時までには形態的には発達しているものの、機能的には未完成で、出生後も環境との相互作用によって発達・機能分化をしていく(三木, 1983; 栗原, 2005, 2014)。これらのことから、出生から約1年間の乳児は、体外胎児(ネオテニー)の状態であるといわれている。しかし、脳機能が未発達な乳児であっても、男児と女児の間で行動に違いがみられるという(三田ら, 2007)。

著者らは、教育実習(幼稚園)と福祉実習(保育所)を行う中で、同年齢の男児と女児の間で、遊びや幼児同士の関係などを含めた行動に違いがあることに気づき、その原因について興味を持った。すでに、男女の思考パターンに性差が存在し、胎児期や出生後の生育環境に起因することが報告されているが(榎原, 2004; 三田ら, 2007; 小西, 2011)、学生実習における実習生の目線で行動観察を行ったレポートはほとんどない。

そこで本レポートでは、著者の一人である萩原が気づいた男児と女児の行動の特徴を中心に、胎児期における脳機能の発達との関連をまとめてみた。

実習について

実習日程

著者の4名の学生は、以下のスケジュールで4回ずつ実習を行った。

- 2年次 教育実習Ⅰ(幼稚園)(2013年6月:2週間)
福祉実習Ⅰ(保育所)(2013年7月~8月:2週間)
- 3年次 教育実習Ⅱ(幼稚園)(2014年6月:2週間)
福祉実習Ⅱ(保育所)(2014年7月~8月:2週間)

実習の概要

萩原の実習では、以下の取り組みが行われた。

教育実習Ⅰ(幼稚園)では、子ども達の園生活の様子を観察しながら、1日の生活リズム、活動の進め方を観察・理解し、4歳児の発達段階や遊びについて学習した。また、部分実習を通して、手遊びやピアノの弾き歌いを実践した。

教育実習Ⅱ(幼稚園)では、5歳児の発達段階、季節の行事への取り組み、食育体験を観察しながら、4歳児との生活リ

ズムや遊び、発達段階の違いについて学んだ。また、部分・責任実習を通して指導案の作成、活動を行う上での留意点について学び、帰りの会の進行、絵本の読み聞かせ、手遊び、ピアノの弾き歌い、主活動の進行を実践した。

福祉実習Ⅰ(保育所)では、実際の保育現場に参加し、乳児保育の基本である保育の仕方や保育士と子どものかかわりを観察した。また、責任実習を通して、指導案の作成、教材の準備、保育活動の進行の仕方、保育を行う上で留意すること、朝の会や帰りの会の進め方について学び、実践した。

保育実習Ⅱ(保育所)では、0～5歳児の発達段階を観察しながら、年齢に沿った活動を学習した。また、責任実習を通して、指導案の作成、教材の準備、保育活動の進行の仕方、保育を行う上で留意することについて学び、実践した。3～5歳児においては、統合保育における幼児同士のかかわりや、保育活動の進め方、留意点について学んだ。

実習で気づいた男児・女児の行動

萩原が作成した実習日誌に記載された文面から、行動に関する語句を抜き出し、「遊び」、「興味」、「集団行動」、「作業」、「人間関係」の5種類に分類した。表1は、教育実習(幼稚園)や福祉実習(保育所)において、主に3歳の男児・女児の行動について、特に気づいた特徴である。

これら男児と女児の行動の特徴を比較すると、以下のよ

うにまとめることができる。

遊び・興味: 男児は活動的で戸外での遊びが目立ち(B1-1～B1-5)、理科に関連する事項に興味を持ちやすい(B2-1とB2-2)。一方、女児は室内での遊びが目立ち(G1-1～G1-4)、本と関係する遊びを好む傾向がある(G2-1～G2-3)。

集団行動・作業: 男児は落ちつきがなく集中できない(B3-1～B3-3)、また不器用である(B4-1とB4-2)。一方、女児は知的発達が早く行動が速やかで(G3-1～G3-2)、集団での行動も可能である(B4-1)。

人間関係: 男児は人懐こくて頼ることが多い(B5-1とB5-2)。一方、女児は幼児同士の関係が蜜であるが、自己主張が強く対立もある(G5-1～G5-3)。

男児・女児の脳機能

「五体満足」という言葉があるが、形態的奇形に関心を持つこと以上に、受精から出生、および成長に至るまでの脳の形成と機能発達にも注意する必要があることは、古くから指摘されている(荒井, 1976; 三木, 1983; 榊原, 2000, 2004; 栗原, 2005)。本レポートでは、教育実習(幼稚園)と福祉実習(保育所)を行う中で気づいた男児と女児の行動の違いが脳機能の差異に起因するとして、それに関する文献を利用した学習内容をまとめたものである。

表1. 幼稚園や保育園での実習で観察された男児・女児の行動の特徴

種類	男児	女児
遊び	B1-1 自転車に乗って遊ぶ子が多い。 B1-2 広告紙を使って武器を作る。 B1-3 砂場で穴を掘る事が好き。 B1-4 滑り台、うんてい、鉄棒遊びが好き。 B1-5 思い切り遊ぶ。	G1-1 ままごとが好き。 G1-2 歌やダンス、ピアノが好き。 G1-3 折り紙が好き。 G1-4 しりとりゲームに熱中する。
興味	B2-1 石を集めることが好き。 B2-2 図鑑が好き。	G2-1 パズルを覚えるのが早く、飽きにくい。 G2-2 絵本の挿絵を見ながら自分でストーリーを作って読む。 G2-3 色塗りの時の色の配色や塗り方が上手。
集団行動	B3-1 食事中に席を立つ子が多い。 B3-2 整列に時間がかかる。 B3-3 寝つきが悪い。	G3-1 身支度の作業が早い。 G3-2 やるべきことをすぐ済ませてしまう。
作業	B4-1 スプーンをうまく使いこなせない。 B4-2 セロハンテープを大量に使う。	G4-1 整列するのが早い。
人間関係	B5-1 読み聞かせの際に前に近づいてくる。 B5-2 声かけをすると率先して行う。	G5-1 お菓子の交換をよくする。 G5-2 よくおしゃべりをする。 G5-3 好き嫌いの喧嘩が多い。

男女の決定は、性染色体であるX染色体とY染色体の組合せに依存し、XXなら女兒、XYなら男児になる。しかし、雌雄の形態は受精直後から分かっているのではなく、胎児(胎芽)はもともと雌の形態をとっている。XY染色体を持つ男性胎児では、Y染色体上の睾丸決定遺伝子(SRY)によって5週までに睾丸が作られ、7~12週に睾丸からアンドロゲン(男性ホルモン:テストステロン)の大量分泌(ホルモンシャワー)によって内性器・外性器の男性化が起こる。アンドロゲンは脳内に取り込まれて脳の男性化も引き起こす。ホルモンシャワーを受けない女性胎児では、女性脳としてそのまま発達していく。これが、男性的性格と女性的性格の形成に、一部影響しているという。例えば、統計学的に、男児より女兒のほうが言語活動は早く始まり、お喋り好きで、知的能力が優れているとの報告がある(田中, 1977; 三田ら, 2004; 乾, 2013)。

実習を通して気づいた男児と女兒の行動の特徴(表1参照)は、これらの知見とよく一致している。男児は活動的で戸外での遊びを好むが、落ち着きがなく不器用であるのに対して、女兒は室内での遊びを好み、集団行動も可能で器用である傾向がみられたのである。

男女の性格決定にホルモンシャワーが重要であるばかりでなく、発達障害(ADHD、LD、自閉症スペクトラム障害など)の出現率が、男児の方が女兒より圧倒的に高いこと(榎原, 2000, 2002)とも関係するといわれている。そして、ホルモンシャワーに強く影響する危険因子として、天然あるいは合成の性ホルモン製剤(エストラジオール、テストステロン、DESなど)、内分泌かく乱物質(ダイオキシン、PCBなど)などの化学物質や、妊娠中の母親のストレス状態が挙げられている(福島, 2000)。

結論

今回の卒業研究を通して、男児・女兒がそれぞれの特徴を持って健やかに成長するためには、出生後のみならず、胎児期の健康(母胎の健康)もきわめて重要である、ということが理解できた。

謝辞

実習の機会を与えてくださった幼稚園・保育所(園)の理事長・園長先生、お忙しい中にもかかわらず丁寧なご指導をしていただいた諸先生方に深謝いたします。

付記

本レポートは、東京福祉大学 短期大学部 平成26年度専門演習IIにおける卒業研究レポートをもとに作成したものである。

文献

- 荒井 良(1976): 胎児の環境としての母体 一幼い命のために一. 岩波新書, 東京.
- 福島 章(2000): 子どもの脳が危ない. PHP新書, 東京.
- 乾 敏郎(2013): 脳科学からみる子どもの心の育ち 認知発達のリーツをさぐる. ミネルヴァ書房, 京都.
- 小西行郎(2011): 子どもの脳によくないこと: 赤ちゃん学、脳科学を生かす子育て. PHP研究所, 京都.
- 栗原 久(2005): 脳 一創り・育て・守り・輝かせる一. 圭文社, 東京.
- 栗原 久(2014): 発達と障害 一ヒトの形成・成長と危険因子一 (平成26年度教員免許状更新講習用テキスト). 東京福祉大学, 伊勢崎.
- 三木成夫(1983): 胎児の世界 人類の生命記憶. 中公新書, 東京.
- 三田雅敏・伊藤知佳・指宿明星(2007): 男女の思考パターンに違いはあるか? 男脳・女脳の分析. 東京学芸大学紀要出版委員会, 東京.
- 榎原洋一(2000): 「多動性障害児」「落ち着きのない子」は病気か? 講談社, 東京.
- 榎原洋一(2002): アスペルガー症候群と学習障害 ここまでわかった子どもの心と脳. 講談社, 東京.
- 榎原洋一(2004): 子どもの脳の発達 臨界期・敏感期: 早期教育で知能は大きく伸びるのか? 講談社, 東京.
- 田中敬二(1977): 発達心理学. 日本文化科学社, 東京.

Differences in the Behavioral Characteristics and Brain Functions between Boys and Girls in Preschool

Yuka HAGIWARA, Ji-Hyon AN, Yuuki YAMAKAWA and Erika YAMAMOTO

Director
Hisashi KURIBARA

Junior College, Tokyo University of Social Welfare,
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : We interested in the differences in the behavioral patterns between boys and girls in preschool, and discussed about the origin of such differences. The development of brain at fetus state is dependent on presence or absence of the hormone shower of androgen at 7 to 12 weeks impregnation; the former and latter make male-brain and female-brain, respectively. Furthermore, the development of brain is strongly affected by many kinds of risk factors such as chemicals, stress, etc. It is therefore important to avoid these risk factors not only during the fetus stage but also infant stage.

(Reprint request should be sent to Hisashi Kuribara)

Key words : Behavioral development of infant, Male and female differences, Brain function

業績リスト (2013年4月～2014年3月)

伊勢崎キャンパス

伊勢崎キャンパス (社会福祉学部)

著書

- 秋山智久 (編著)：ソーシャルワーク基本用語辞典. 川島書店, 東京 (2013.6)
- 岡田 稔：老人福祉論, 介護概論, 介護保険制度. In: 保育児童福祉要説 (東京福祉大学編), pp588-599, pp602-610, pp612-621, ミネルヴァ書房, 京都 (2013.6)
- 岡村 弘：82. トマト. In: 明日へ歌い継ぐ 日本の子どもの歌：唱歌童謡 140年の歩み (全国大学音楽教育学会編), p96, 音楽の友社, 東京 (2013.5)
- 荻野基行：グループワークに関する相談援助演習. In: 保育児童福祉要説 第4版 (東京福祉大学編), pp47-50, 中央法規出版, 東京 (2013.6)
- 荻野基行：相談援助の理論と方法. In: 社会福祉士国家試験模擬問題集 2014 (日本社会福祉士養成校協会編), p50, p53, p121, p126, p190, p191, p195, 中央法規出版, 東京 (2013.7)
- 荻野基行：実習先の情報を集める, 利用者を理解する, 実習指導者の仕事を知る, 実習テーマ・達成課題の修正, 実習先全体をみる, 利用者との関係の終結, 指導者との評価会, 実習経験の共有と分かち合い, 実習経験を振り返る. In: 事例で深めるソーシャルワーク実習 (川村隆彦編), pp10-21, pp72-75, pp82-85, pp156-173, 中央法規出版, 東京 (2014.2)
- 北爪克洋：福祉行財政と福祉計画 (模擬問題, 解答編). In: 精神保健福祉士国家試験模擬問題集 2014 (日本精神保健福祉士養成校協会編), pp63-65, pp57-59, 日本精神保健福祉士養成校協会, 東京 (2013.7)
- 北爪克洋：第2編 2章 認知症予防の基礎②, 第2編 3章 認知症予防の基礎③. In: 認知症予防支援相談士試験公式テキスト (一般財団法人国際技能振興財団監修), pp179-182, pp184-190, 日本能率協会マネジメントセンター, 東京 (2013.12)
- 北爪克洋：第4章 第2節 地域福祉の組織. In: 地域福祉の原理と方法 (井村圭壯, 相澤讓治編), pp37-47, 学文社, 東京 (2013.12)
- 喜多村悦史：消費増税が医療に及ぼす影響. In: 医療白書 2013年度版 (矢崎義雄編集委員代表), pp202-214, 日本医療企画, 東京 (2013.9)
- 澤口彰子：認知症, その時あなたは. In: 至誠の灯 (小関温子編), pp59-60, ホンゴ出版, 横浜 (2013.6)
- 澤口彰子：公益社団法人男女共同参画事業委員会の軌跡：女性医師キャリアシンポジウムから. In: 医学を志す女性のためのキャリアシンポジウム集：男性医師から言いたいこと (澤口彰子編), pp29-30, 公益社団法人日本女医会, 東京 (2013.10)
- 先崎 章：高次脳機能障害. In: 今日のリハビリテーション指針 (伊藤利之, 江藤文夫, 木村彰男編), pp68-75, 医学書院, 東京 (2013.5)
- 風間雅江, 先崎 章：リハビリテーション医療における心理臨床. In: 臨床心理学増刊号 5：実践領域に学ぶ臨床心理ケーススタディ (村瀬嘉代子, 森岡正芳編), pp199-203, 金剛出版, 東京 (2013.8)

- 先崎 章：機能障害の評価、心理的問題. In：わかりやすいリハビリテーション（岡島康友編），pp146-152，中山書店，東京（2013.10）
- 鈴木雄司：第8章 子どもの健全育成とは何だろう. In：知識を生かし実力をつける『子ども家庭福祉』（浦田雅夫編），pp100-101，保育出版社，東京（2013.12）
- 鈴木雄司：第6章 子育て支援施策の動向. In：新版 児童家庭福祉（植木信一編），pp143-165，北大路書房，京都（2014.3）
- 田中利光：現代社会と福祉. In：精神保健福祉士国家試験模擬問題集 模擬問題編（2014）（日本精神保健福祉士養成校協会編），pp54-57，中央法規出版，東京（2013.7）
- 田中利光：現代社会と福祉. In：精神保健福祉士国家試験模擬問題集 解答編（2014）（日本精神保健福祉士養成校協会編），pp47-52，中央法規出版，東京（2013.7）
- 保原伸弘：第9章 ヒット曲は景気を語る（唄う）か？ 実証分析にみるマクロ経済と社会心理の相関関係. In：変貌する日本のコンテンツ産業（河島伸子，生稲忠彦編），pp241-278，ミネルヴァ書房，京都（2013.10）
- 前川美智子（監修）：介護用語辞典. 新星出版，東京（2013.11）
- 前川美智子（総監修）：介護の現場で役立つ介護技術 & 急変時対応ハンドブック. ユーキャン国民自由社，東京（2013.6）
- 三野宏治：第6章 実践と研究の反復から考える対人援助学の射程. In：対人援助学を拓く（村本邦子，土田宣明，徳田完二，春日井敏之，望月 昭編），pp68-80，晃洋書房，東京（2013.7）
- 山下喜代美：あい～きん、A～Y. In：介護用語辞典（前川美智子監修），pp6-94，pp409-426，新星出版，東京（2013.11）
- 山下喜代美（監修）：第3章 状態別・疾患別介護技術，第4章 急変時対応. In：介護の現場で役立つ介護技術 & 急変時対応ハンドブック（前川美智子総監修），pp124-146，pp148-181，ユーキャン国民自由社，東京（2013.6）
- 山本 豊：書いて理解する教育法規. オフィス・サウス，東京（2014.3）
- 山本 豊：教育法規相談ハンドブック 30. 東京教育研究所，東京（2014.3）
- 尹 文九：高齢者福祉制度の発展過程. In：高齢者への支援と介護保険制度（大和田 猛編），pp56-69，みらい社（2014.2）

報告書

- 喜多村悦史：大規模災害時における遺体の埋火葬の在り方に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業：研究代表者 横田 勇）平成 25 年度総括研究報告書（2014.3）
- 喜多村悦史：大規模災害時における遺体の埋火葬の在り方に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業：研究代表者 横田 勇）平成 24・25 年度総括研究報告書（2014.3）
- 関口はつ江（共編著）：震災を生きる子どもと保育 ―日本保育学会災害時における保育問題検討委員会報告書―. 日本保育学会（2013.5）

原著論文

- 上村孝司, 村松 憲: 拮抗筋条件収縮および跳躍動作における足関節底屈時の筋活動の増強. 日本スポーツリハビリテーション学会誌 **3**: 19-23 (2014.3)
- 兒嶋 昇, 升佑二郎, 上村孝司: 日本トップレベルの大学バドミントン選手におけるオーバーヘッドストロークの筋活動. スポーツ健康学研究 **5**: 33-39 (2014.3)
- 金 貞任: 韓国の高齢者の介護の社会化と家族介護支援の現状. 海外社会保障研究 **184**: 42-56 (2013.9)
- 江津和也, 亀田良克, 幸喜 健, 吉濱優子: 保育者養成校学生の就職先選択の要因に関する研究 (1). 清和大学短期大学紀要 **42**: 1-15 (2014.1)
- 土村宜明, 大森孝造: ペイアウト政策のエージェンシーコスト. 現代ファイナンス **34**: 33-52 (2013.9)
- 土村宜明, 吉田 靖: 30代・40代家計の資産選択: ライフプランニング意識調査における実証分析. ファイナンシャル・プランニング研究 **13**: 35-48 (2014.3)
- 洪 金子: 日本植民地期韓国の社会事業に関する一考. 梨花女子大学校社会福祉研究所第2回専門家招聘セミナー資料集 pp1-28 (2013.5)
- 洪 金子: 家族療法の登場と進展およびその3つのモデルの比較. 日米高齢者保健福祉学会誌 **5**: 57-76 (2013.11)
- Hon, K.-J.: Quality of life and family quality of life across the life span: The trend of QOL and FQOL in Asia. IASSIDD 知的障害アカデミーワークショップ記録集 pp109-141 (2013.8)
- 洪 金子: 日本の幼保一元化の動き - 「子ども・子育て関連3法」を中心に. 韓国嬰幼兒保育学会国際学術大会資料集 pp1-24 (2013.12)

総説・解説

- 喜多村悦史: 社会保障夏季集中講座(上)「社会保障を独立行政法人で運営」. 時評 **55(7)**: 168-173 (2013.7)
- 喜多村悦史: 社会保障夏季集中講座(中)「社会保険機構の運営方式」. 時評 **55(8)**: 168-175 (2013.8)
- 喜多村悦史: 社会保障夏季集中講座(下)「社会保険と国家責任」. 時評 **55(9)**: 150-155 (2013.9)
- 喜多村悦史: (巻頭言) 生老病死と社会保険. 東京福祉大学・大学院紀要 **4**: 1-2 (2013.10)
- 金 貞任: (文献紹介)「スウェーデン: 高齢者福祉改革の原点 - ルポルタージュからの問題提起-」. 家族社会学研究 **2**: 184 (2013.10)
- 佐々木貴雄: 総合健康保険組合の今後について. 週刊社会保障 **2729**: 50-55 (2013.6)
- 澤口彰子: 日本女医会男女共同参画事業の軌跡. 日本女醫会誌 **214**: 1-2 (2013.4)
- 澤口彰子: これからの臨床研修医教育. 女醫会 **807**: 9 (2013.5)
- 澤口彰子: (巻頭) 公開講座「認知症、その時、あなたは」について. 至誠の灯 副刊 **6号**: 60 (2013.6)
- 澤口彰子: 一般社団法人至誠会第二病院における臨床研修医教育. 女醫会 **810**: 1 (2013.11)
- 先崎 章: 医療従事者が生活空間に入っていくということ. 臨床リハビリテーション別冊 pp97-99 (2013.6)
- 先崎 章: 高次脳機能障害者の在宅支援、低酸素脳症者の2例を通して. 臨床リハビリテーション別冊 pp112-117 (2013.7)
- 先崎 章: 精神科リハビリテーションの過去、現在、国内外の動向 - その背景にある日本の精神科医療の事情も含めて. 総合リハビリテーション **41**: 611-612 (2013.10)

- 先崎 章：回復期を過ぎた一酸化炭素中毒症のリハビリテーション、社会参加と就労に向けて、リハビリテーションの先達に学ぶ. 臨床リハビリテーション **22**: 1028-1033 (2013.10)
- 先崎 章：高次脳機能障害 低酸素脳症（意欲発動低下例）. MB Med. Reha. **163**: 104-107 (2013.11)
- 土村宜明：家計のポートフォリオ選択 ー実証研究にみるリスク資産投資の要因ー. 日本FP協会調査研究レポート **63**: 日本FP協会ホームページ (<https://www.jafp.or.jp/>) (2014.1)
- 土村宜明：（書評）菅原周一著『日本株式市場のリスクプレミアムと資本コスト』. ファイナンシャル・プランニング研究 **13**: 64-65 (2014.3)
- 花村誠一：（書評）中谷陽二著『刑事司法と精神医学 ーマクノートンから医療観察法へ』. 臨床精神医学 **42**: 1573-1574 (2013.12)
- 藤田伍一：（論壇）介護保険をめぐる政策展望. 週刊社会保障 平成 **25** 年 7 月 8 日号: 50-53 (2013.7)
- 三野宏治：脱精神科病院『わが国の脱精神科病院 ①補遺』. 対人援助学マガジン **13**: 135-144 (2013.6)
- 三野宏治：脱精神科病院『わが国の脱精神科病院 ②』. 対人援助学マガジン **14**: 144-155 (2013.9)
- 三野宏治：脱精神科病院『わが国の脱精神科病院 ③』. 対人援助学マガジン **15**: 140-152 (2013.12)
- 三野宏治：脱精神科病院『わが国の脱精神科病院 ④』. 対人援助学マガジン **16**: 174-185 (2014.3)
- 山本 豊：教育管理職選考試験の法規に関する予想問題とその解説. 別冊 教職研修管理職合格セミナー **2013-8**月号: 44-47 (2013.7)
- 山本 豊：教育管理職選考試験の法規に関する予想問題とその解説. 別冊 教職研修管理職合格セミナー **2013-9**月号: 46-49 (2013.8)
- 山本 豊：教育管理職選考試験の法規に関する予想問題とその解説. 別冊 教職研修管理職合格セミナー **2013-10**月号: 48-51 (2013.9)
- 山本 豊：教育管理職選考試験の法規に関する予想問題とその解説. 別冊 教職研修管理職合格セミナー **2013-11**月号: 46-49 (2013.10)
- 山本 豊：教育管理職選考試験の法規に関する予想問題とその解説. 別冊 教職研修管理職合格セミナー **2014-1**月号: 49-52 (2013.12)
- 山本 豊：教育管理職選考試験の法規に関する予想問題とその解説. 別冊 教職研修管理職合格セミナー **2014-2**月号: 49-52 (2014.1)
- 山本 豊：教育管理職選考試験の法規に関する予想問題とその解説. 別冊 教職研修管理職合格セミナー **2014-3**月号: 49-52 (2014.2)

2012 年度追加

- 藤田伍一：（巻頭言）マックス・ウェバー雑感. 東京福祉大学・大学院紀要 **3**: 1-2 (2013.3)

特別講演・シンポジウム

- 秋山智久：シンポジウム「世界のソーシャルワーカー資格」(司会者). 日本社会福祉士会・社会福祉学会 (2013.7)
- 秋山智久：シンポジウム「社会福祉哲学の内容と枠組」(司会者). 日本社会福祉学会特別課題シンポジウム (2013.9)
- 秋山智久：シンポジウム「ヒューマンサービスの現状と課題 ー人間尊重への全人的視点ー」(司会者). 国際ヒューマンサービス学会 第 1 回記念大会 (2013.11)
- 岡野雅子：現代の生活環境が子どもに及ぼす影響 ー時間的環境を中心にー. 日本家政学会児童学部会主催公開討論会「子どもの発達を支える生活づくりに今、児童学ができること」. 日本家政学会 第 65 回大会 (2013.5)

- 上村孝司：健康獲得のための幼児期の体力向上とそのためのヒューマンサービス. シンポジウム「ヒューマンサービスの現状と課題－人間尊重への全人的視点－」. 国際ヒューマンサービス学会 第1回記念大会 (2013.11)
- 澤口彰子：シンポジウム「高齢者医療を考える－急性期から在宅医療まで」(司会者). 公益社団法人日本女医会 第7回 医学を志す女性のためのシンポ (2013.10)
- 澤口彰子：眼科、皮膚科からの報告のまとめ. パネル「羽ばたく女性医師とともに考える－将来の夢に向かって」. 第10回 一般社団法人至誠会神奈川支部公開講座 (2013.11)
- 関口はつ江：シンポジウム「放射能災害下における保育のこれまでとこれから」(企画・司会者). 日本保育学会 第55回大会 (2013.5)
- 関口はつ江：クリエイティブフォーラム「危機における関係発展」(企画・司会者). 関係学会 第35回大会 (2013.6)
- 関口はつ江：シンポジウム「子どもの視点から幼児教育を考える－制度と質－」(企画・司会者). 国際幼児教育学会 第34回大会 (2013.9)
- 田中利光：ヒューマンサービスにおける価値の問題. シンポジウム「ヒューマンサービスの現状と課題－人間尊重への全人的視点－」. 国際ヒューマンサービス学会 第1回記念大会 (2013.11)
- 田中良幸：子ども家庭支援と児童虐待への対応. 公益法人 栃木県国際交流協会 第5回 多文化ソーシャルワーカー養成セミナー(講師). (2014.10)
- 土村宜明：シンポジウム「片岡淳, 菅原周一著『リスククラスによるリスク配分戦略』」(指定討論者). 日本FP学会 2013年度大会 (2013.9)
- 花村誠一：ワークショップ「DSM-5と精神病理学」(企画・司会者). 第36回日本精神病理・精神療法学会 (2013.10)
- 保原伸弘：The dense leisure time contributes economic growth in augmented Lucas (1988) model. 筑波大学 ミクロ経済理論・ゲーム理論セミナー (2014.1)
- 洪金子：韓国の認知症高齢者福祉の事情と早期認知症ケア(大会長指名演題). 日本早期認知症学会 第14回学術大会 (2013.9)

学会報告

- 太田節子：保育者養成課程における教育課題－保育者の学習課題に関する意識調査を中心として－. 日本乳幼児教育学会 第23回大会 (2013.11)
- 岡野雅子, 浅川沙織：電子媒体遊びが幼児に及ぼす影響－「人とかかわる力」との関連－. 日本保育学会 第66回大会 (2013.5)
- 岡野雅子, 長谷部あゆみ：父親の育児行動に対する母親の満足度－3歳未満児をもつ夫婦を対象に－. 日本家政学会 第65回大会 (2013.5)
- 岡村 弘, 原 浩美：保育士をめざす学生の音楽的嗜好と子どもの歌に対する反応の比較. 日本保育学会 第66回大会 (2013.5)
- Okamura, H., Sekijima, H. and Higuma, S.:** Newborn infants' response to music: Research on brain activity in using near infrared spectroscopy. Pacific Early Childhood Education Research Association 14th Annual Conference (Seoul, Korea) (2013.7)
- 岡村 弘, 日隈史穂：保育を学ぶ学生のJ-popと童謡・唱歌の聴取時における反応の相違－近赤外光脳機能測定装置による脳血流量の変化－. 全国大学音楽教育学会 第29回全国大会 (2013.8)
- 岡村 弘, 関島英子, 日隈史穂：母親の歌声に対する新生児の反応－近赤外光脳機能測定装置による脳内活動の研究－. 第34回 国際幼児教育学会 (2013.9)

- 岡村 弘, 関島英子, 日隈史穂: オルゴール聴取時における新生児の反応 —近赤外光脳機能測定装置による脳内活動の研究—. 日本音楽教育学会 第 44 回大会 (2013.10)
- 荻野基行: 明治期のキリスト教的思想に基づいた女性福祉・家族福祉に関する研究 —萩原鎌太郎の思想と実践を中心に—. 日本社会福祉学会全国大会 第 61 回秋季大会 (2013.9)
- 矢上克己, 荻野基行, 石坂公俊, 橋本理子, 畠中 耕, 吉田博行, 大塚良一, 田代国次郎: 新潟県における
 免囚者保護事業の展開. 日本社会福祉学会全国大会 第 61 回秋季大会 (2013.9)
- 藤野和樹, 上村孝司, 升佑二郎: バドミントン競技におけるスマッシュストロークの筋電図学的分析.
 日本生理人類学会 第 68 回大会 (2013.6)
- Kamimura, T. and Muramatsu, K.:** Potentiation of electromyographic activities of plantar flexor by antagonist conditioning contraction and jump. 18th European College of Sport Science (Barcelona, Spain) (2013.6)
- 上村孝司, 幕田 純, 迎 鋼治: ウェイトトレーニングの補助動作が上肢筋活動に及ぼす影響. 日本生理人類学会 第 69 回大会 (2013.10)
- 藤野和樹, 上村孝司, 林 直樹, 升 佑二郎: バドミントン競技におけるサービスストロークの筋電図学的分析. 日本生理人類学会 第 69 回大会 (2013.10)
- 小林健太郎, 渡辺 健, 武井 咲, 上村孝司, 関口賢人, 升 佑二郎: バドミントン競技のスマッシュ動作における背筋群が腰痛に及ぼす影響. 第 3 回 スポーツリハビリテーション学会大会 (2014.3)
- Kim, J.-N.:** Preferences and actual place of death and care of the end-of-life for frail elderly in Japan and South Korea. International Association of Gerontology and Geriatrics, 2013 (Soul, Korea) (2013.6)
- 金 貞任: 韓国の介護保険制度の事情. 第 24 回 全国介護老人保健施設大会 (2013.7)
- 金 貞任, 武川正吾, 和気康太: 全国市区町村の男性家族介護者の介護実態の認知と相談内容に関する研究. 社会福祉学会 第 61 回秋期大会 (2013.9)
- 金 貞任: 韓国の介護保障システムの現状と課題. 東アジア介護保障セミナー (2013.11)
- 江津和也, 幸喜 健, 亀田良克, 吉濱優子: 保育者養成校学生の就職先選択の要因に関する一考察 —幼稚園、保育所および福祉施設等の中から就職先を決定させるものは何か? 日本保育学会 第 66 回大会 (2013.5)
- 幸喜 健, 亀田良克, 江津和也: 保育所保育士として就職を決定する学生の傾向について —保育者養成校学生が就職先として保育所を選択する要因は何か? 全国保育士養成協議会 第 52 回大会研究大会 (2013.9)
- Sawaguchi, A., Sawaguchi, T. and Kawahara, K.:** GIS analysis of the success critical care following traffic accidents in Tokyo prefecture. 29th International Congress of the Medical Women's International Association (Seoul, Korea) (2013.7)
- Tsuda, T. and **Sawaguchi, A.:** Support for female physicians in Japan: A change of view. 29th International Congress of the Medical Women's International Association (Seoul, Korea) (2013.7)
- 澤口聡子, 澤口彰子: 交通事故被害者に医療過誤が発生した症例について. 第 61 回 九州学校保健学会 (2013.8)
- 澤口彰子, 石川かずみ: 教職員の喫煙調査から. 第 1 回 群馬県地域保健研究発表会 (2014.3)
- 関口はつ江, 加藤孝士, 澤井洋子, 滝田良子: 災害後の保育所保育の変化と課題Ⅱ —保育所の取り組みと保護者の意識—. 日本保育学会 第 66 回大会 (2013.5)
- 長田瑞恵, 関口はつ江, 野口隆子: 子どもの発達に対する保育者の評価 —評価項目の評定一致率と項目妥当性の検討—. 日本保育学会 第 66 回大会 (2013.5)

- 吉濱優子, 関口はつ江, 魏 孝棟: 保育者専門性獲得のための基礎要因に関する研究 I - 日本保育学会 第 66 回大会 (2013.5)
- 滝田良子, 関口はつ江: 東日本大震災後の保育の取り組みの変化と課題 - 2 年の経過を追って - . 国際幼児教育学会 第 34 回大会 (2013.9)
- 長田瑞恵, 関口はつ江, 野口隆子: 幼児の発達評価調査におけるコホート間比較. 日本発達心理学会 第 25 回大会 (2014.3)
- 土村宜明, 吉田 靖: 意識調査にみる資産選択行動. 第 79 回 証券経済学会全国大会 (2013.6)
- 橋本由利子, 山下喜代美: 付着細菌数からみた歯ブラシの清掃と保管. 第 10 回 日本口腔ケア学会総会 (2013.6)
- 橋本由利子: 幼稚園・保育所における昼食後の歯みがきについて. 第 34 回 国際幼児教育学会 (2013.9)
- 橋本由利子: 大学生の歯科保健に関する知識と保健行動. 第 72 回 日本公衆衛生学会総会 (2013.10)
- 日隈史穂: 母子相互の音楽的行動の発達 - 乳児期の保育観察を通して - . 日本保育学 第 66 回大会 (2013.5)
- 保原伸弘: Jump from trap to take-off in endogenous variety-expanding growth model with leisure. 日本経済学会 2013 年度春季大会 (2013.6)
- 保原伸弘: Do winner always love aggressive music or movie? Study about the phenomena that sad music is sustainedly loved even in economic boom. 文化経済学会 2013 年度研究大会 (2013.6)
- 保原伸弘: 金持ちは万病のもとか? - 栄養のバランスの所得 (価格) 弾力性と経済状況の相関分析. 行動経済学会 第 7 回大会 (2013.12)
- 保原伸弘: ヒット曲は景気を語る (唄う) か? - 昭和期と平成期の日本のヒット曲の性質 (調性、テンポ) と経済状況の実証分析によるマクロ経済と社会心理の関係の一考察 - . 第 47 回 コンテンツビジネス研究会 (2013.12)
- 山本 豊, 小林祐一: 大学と教育委員会の連携による若手教員育成に関する考察. 日本教師教育学会 第 23 回大会 (2013.9)

演奏会・美術展・競技会など

- 岡村 弘: 第 5 回福祉ふれあいコンサート. 伊勢崎市音楽協会主催 (伊勢崎市市役所東館ホール) (2013.9)
- 岡村 弘: クリスマスコンサート V. 伊勢崎市音楽協会主催 (伊勢崎教会礼拝堂) (2013.12)

翻訳

- 保原伸弘: 第 10 章 商業的文脈における音楽的コミュニケーション 消費行動にて / 「音楽的適合」と 雰囲気 / 時間知覚と待ち時間 / 仕事場にて / 反対運動家再論. In: 音楽的コミュニケーション: 心理・教育・文化・脳と臨床からのアプローチ (星野悦子監訳) (Miell, D., MacDonald, R. and Hargreaves, D.J. (Eds.): Musical Communication. Oxford University Press, New York, 2005), pp247-273, 誠心書房, 東京 (2013.4)
- 洪 金子 (翻訳文責): マーシャル・ジャング講演録 (2012), アメリカにおけるアジア系移住者への 家族療法 (Family therapy with Asian families). 日米高齢者保健福祉学会誌 5: 42-46 (2013.11)

著書

立松英子 (監修・著) : DVD 教材教具を活用した発達支援. アローウィン, 東京 (2013.12)

報告書

下出美智子 : 群馬の郷土芸能に対する学生の意識と保存会の活動状況 —人形芝居に焦点をあてて—. 「群馬学」リサーチフェロー第2回研究報告書 (群馬), pp68-77 (2014.3)

原著論文

Shite, K.: What do grammaticality judgment tests reveal within the framework of implicit and explicit knowledge? *Second Language* **12**: 43-60 (2013.12)

高橋みどり : フェミニストの書いた児童文学 —ウルストンクラフトの『実生活からの物語集』. *Tinker Bell 英語圏児童文学研究* **59** : 15-28 (2014.3)

Misawa, K.: On the place of the philosophy of education in educational research. *Proceeding of the International Conference on 'Reviewed? Renewed? Revisited! Past, Present, and Future of Philosophy and History of Educational Research'* : 131-138 (2013.6)

Misawa, K.: A critical analysis of the educational impact of Steve Fuller's social epistemology. *Philosophy Study* **3**: 867-879 (2013.11)

立松英子, 太田昌孝 : 自閉症様の行動傾向を測る改訂小児行動質問票 (CBQ-R) と認知発達評価の特別支援学校への適用. *自閉症スペクトラム研究* **11(2)** : 11-20 (2014.3)

Lopez, L.M. and Narbel, P.: Lamination languages. *Ergod. Th. & Dynam. Sys.* **33**: 1813-1863 (2013.10)

総説・解説

柴田隆史 : メディアの広場 : 3D 映像の教育活用. *視聴覚教育* **68** : 4-5 (2014.1)

立松英子 : 物を媒介としたコミュニケーション. *障害児基礎教育研究会研究紀要* **20(2)** : 8-19 (2013.8)

特別講演・シンポジウム

小川英光 : 標本化定理と科学の原理. 電子情報通信学会・信越支部講演会 (招待講演) (2013.5)

柴田隆史 : 小学校社会科の授業における 3D 映像活用の試み. 3D コンソーシアム・技術部会主催勉強会 (講演) (2013.6)

柴田隆史 : モバイルディスプレイにおける快適な立体映像表現. ミニシンポジウム「電子情報技術産業協会 (JEITA) ・ディスプレイデバイス事業委員会・人間工学専門委員会, 第 182 回人間工学専門委員会 (2013.7)

- 柴田隆史：SID 2013 報告－3D 技術－. SID 日本支部主催 SID2013 報告会. (2013.7)
- 柴田隆史：小学校の授業における 3D 活用事例紹介. 3D 映像産業振興協議会・3D 活用事例セミナー (講演) (2014.1)
- 柴田隆史：モバイル端末における快適な立体映像表現. フラットパネルディスプレイの人間工学シンポジウム 2014, 電子情報技術産業協会・ディスプレイデバイス事業委員会 (講演) (2014.3)
- 下出美智子：知的障害のある生徒の音楽づくりにおける楽しさの質の変容. シンポジウム「ヒューマンサービスの現状と課題」. 国際ヒューマンサービス学会第 1 回記念大会 (2013.11)
- 高橋みどり：フェミニストの書いた児童文学－ウルストンクラフトの『実生活からの物語集』. 群馬県立女子大学英米文化学会 平成 25 年度年度大会 (講演) (2013.11)
- 立松英子：特別な支援を必要とする子どもへの接し方について. 群馬県西部教育事務所放課後子ども教室教育支援活動関係者等研修会 (講演) (2013.6)
- 立松英子：不適応行動等に対する見方と支援の在り方. 埼玉県東松山特別支援学校夏季研修会 (講演) (2013.7)
- 立松英子：教育の視点から. シンポジウム「認知発達と行動との強い関係」. 国立のぞみの園福祉セミナー 2013 (2013.7)
- 立松英子：子どもの発達段階に応じた教材作りについて. 東京都立清瀬特別支援学校研修会 (講演) (2013.7)
- 立松英子：ことばの育ちを支援する－自閉症の子どもとのコミュニケーションを含めて－. 公益社団法人 発達協会実践セミナー (講演) (2013.7)
- 立松英子：発達支援と教材教具. 筑波大学公開講座 (講演) (2013.7)
- 立松英子：発達支援と教材教具. 障害児基礎教育研究会 第 20 回研究大会 (講演) (2013.8)
- 立松英子：特別な支援を必要とする子どもへの接し方について－個々の特性を読み取る視点－. 東京都立久我山青光学園夏季研修会 (講演) (2013.8)
- 立松英子：学校教育の現場から. 日本文化科学社 第 21 回自閉症セミナー「認知発達治療の理論と実践」 (講演) (2013.9)
- 立松英子：社会性の育ちと言葉の発達について. 社会福祉法人前橋あそか会 たんぼぼ学園 第 35 回発達を促す療育セミナー (講演) (2013.12)

学会報告

- 加藤鈴子：自由の実践としての日本語教育：ある日本語教師のライフヒストリーに学ぶ. 異文化間教育学会 第 34 回大会 (2013.6)
- Komata, R.:** Issues related to the 20-meter shuttle run during physical fitness test. The 55th ICHPER・SD Anniversary World Congress (Istanbul, Turkey, 2013.12)
- 古俣龍一, 吉田健人, 佐野航平, 濱中幹弘, 大平芽衣, 金子悦子：大学生女子におけるマウスピース装着の有無が握力向上に及ぼす影響について. 第 26 回 日本トレーニング科学会大会 (2013.11)
- Shibata, T., Oshima, K., Muneyuki, F. and Kawai, T.:** Visual comfort and viewing time of S3D content on mobile devices. SID 2013 DIGEST (Vancouver, Canada) (2013.5)
- Banks, M.S., Kim, J.-W. and Shibata, T.:** Insight into vergence/accommodation mismatch. SPIE Defense, Security, and Sensing (Baltimore, Maryland, USA) (2013.5)
- 柴田隆史, 大島佳介, 宗雪史弥, 吉竹淳樹, 河合隆史：モバイル型 3D ディスプレイにおける立体映像の見やすさと好み. 第 54 回 日本人間工学会 (2013.6)

- 柴田隆史, 渡邊 唯, 青柳智哉: 小学校社会科の授業における立体映像の活用. 第 20 回 日本教育メディア学会年次大会 (2013.10)
- Yamaguchi, Y., Hashiba, T., Inoue, T. and **Shibata, T.**: Effect of foreground images on self-motion induced by CAVE-like display. 5th Joint Virtual Reality Conference – JVRC 2013 (Paris, France) (2013.12)
- Shibata, T.**, Lee, J.-L. and Inoue, T.: Ergonomic approaches to designing educational materials for immersive multi-projection system. SPIE 9012 (San Francisco, California, USA) (2014.2)
- 下出美智子: 群馬の郷土芸能に対する学生の意識と保存会の活動状況 – 人形芝居に焦点をあてて –. 日本音楽教育学会 第 44 回全国大会 (2013.10)
- 志手和行: What ungrammatical judgment tells us about L2 learners' implicit and explicit knowledge?. 第 12 回 日本第二言語習得学会年次大会 (2013.6)
- Misawa, K.**: On the place of the philosophy of education in educational research. The International Conference on 'Reviewed? Renewed? Revisited! Past, Present, and Future of Philosophy and History of Educational Research' (Leuven, Belgium) (2013.6)
- 三澤紘一郎: 教育研究と哲学の関係: 教育哲学の貢献先をめぐって. 第 72 回 日本教育学会 (2013.8)
- 齋藤直子, Standish, P., 飯田 隆, 小野文生, 三澤紘一郎: 『自己を超えて』 – 哲学のサブジェクト転換 –. 第 23 回 教育思想史学会 (2013.9)
- 立松英子: 自閉症様の行動傾向を測る改訂小児行動質問票 (CBQ-R) と認知発達評価の特別支援学校への適用. 日本教育心理学会 第 55 回総会 (2013.8)
- Tatematsu, E.** and Ohta, M.: Relationship between visuo-spatial perceptions and autistic behavior in children developing concept formation. IASSID (アジア・太平洋発達障害学会) (Tokyo, Japan) (2013.8)

公演

- Shibata, T.**: Educational 3D Content: Tumulus. SD&A 3D Theatre, Stereoscopic Displays and Applications XXV, SPIE (3D コンテンツ上映) (2014.2)
- 下出美智子: 「終わりのない歌」田中暢追悼コンサート埼玉公演. 『終わりのない歌』実行委員会. 所沢市民文化センターマーキーホール (2013.4)

著書

- 中里克治：老年期. In：発達心理学Ⅱ（無藤 隆, 子安増生編）, pp143-169, 東京大学出版会, 東京（2013.9）
- 太田信夫（編集委員）：認知心理学ハンドブック. 有斐閣, 東京（2013.12）
- Nilsson, L.G. and **Ohta, N.**: *Dementia and Memory*. Psychology Press, London (2014.1)
- 太田信夫（編集代表）：心理学検定公式問題集（2014年度版）. 有斐閣, 東京（2014.3）
- 鶴 光代：臨床動作法. In：子育て支援と心理臨床 Vol.8, (『子育て支援と心理臨床』（編集委員会編）, pp24-29, 福村出版, 東京（2014.2）

原著論文

- 矢島裕子, 石川清子：青年期における挫折の乗り越えと社会的知恵の関連性. 東京福祉大学附属臨床心理相談室紀要 **3**： 1-12（2014.3）
- McCrae, R.R., Chan, W.; Jussim, L., De Fruyt, F., Löckenhoff, C.E., De Bolle, M., Costa Jr., P.T., Hřebíčková, M., Graf, S., Realo, A., Allik, J., **Nakazato, K.**, Shimonaka, Y., Yik, M., Ficková, E., Brunner-Sciara, M., Reátigui, N., de Figueora, N.L., Schmidt, V., Ahn, C.-K., Ahn, H.-N., Aguilar-Vafaie, M.E., Siuta, J., Szmigielska, B., Cain, T.R., Crawford, J.T., Mastor, K.A., Rolland, J.-P., Nansubuga, F., Miramontez, D.R., Benet-Martínez, V., Rossier, J., Bratko, D., Marušić, I., Halberstadt, J., Yamaguchi, M., Knežević, G., Purić, D., Martin, T.A., Gheorghiu, M., Smith, P.B., Barbaranelli, C., Wang, L., Shakespeare-Finch, J., Lima, M.P., Klinkosz, W., Sekowski, A., Alcalay, L., Simonetti, F., Avdeyeva, T.V., Pramila, V.S. and Terracciano, A.: The inaccuracy of national character stereotypes. *J. Res. Personal.* **47**: 831-842 (2013.12)
- 大島朗生：サイコドラマにおけるウォームアップの重要性. パフォーマンス教育 **12**： 21-28（2014.3）
- 大島朗生：サイコドラマに関する覚書 ～ヴィニエットという技法について～. 東京福祉大学附属臨床心理相談室紀要 **3**： 29-39（2014.3）
- Otani, H., Von Glahn, N., Libkuman, T.M., Goernert, P.N. and **Kato, K.**: Emotional salience and the isolation effect. *J. Gen. Psychol.* **141**: 35-46 (2014.1)

総説・解説

- 齋藤 瞳：糖尿病療養における臨床心理士の関わり. 2014年 *Diabetes in The News* **2**月号： 5（2014.2）
- Nilsson, L.-G. and **Ohta, N.**: Introduction: Early cognitive sign of dementia. *Dementia and Memory PART 1*: 15-17 (2014.1)
- Nilsson, L.-G. and **Ohta, N.**: Introduction: Is dementia inevitable? *Dementia and Memory PART 2*: 93-95 (2014.1)
- Nilsson, L.-G. and **Ohta, N.**: Introduction: Memory systems and dementia. *Dementia and Memory PART 3*, 141-144 (2014.1)
- 鶴 光代：（巻頭言）さらりとしたお茶と動作のこころ. *心と社会* **153**： 5-7（2013.9）

特別講演・シンポジウム

- 鶴 光代：シンポジウム「臨床心理学の発展における認知行動療法の役割と課題」（指定討論者）. 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会（2013.8）
- 鶴 光代：日本心理臨床学会における国家資格対応について. シンポジウム「国家資格化への課題」. 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会（2013.8）
- 鶴 光代：シンポジウム「新しい自殺総合対策大綱への心理職の関わりー若年層の自殺予防に焦点をあててー」（指定討論者）. 日本心理臨床学会第 32 回秋季大会（2013.8）
- 鶴 光代：シンポジウム「動作法の未来を語る」（司会者）. 日本臨床動作学会第 21 回学術大会（2013.8）
- 鶴 光代：シンポジウム「心理学における催眠研究と臨床実践の現在」（指定討論者）. 日本心理学会第 77 回大会（2013.9）
- 鶴 光代：シンポジウム「半世紀にわたる心理リハビリテーション」（対談者）. 第 39 回 心理リハビリテーションの会 全国大会 岩手大会（2013.11）
- 鶴 光代：心理職国家資格化への経過報告. シンポジウム「心理職の国家資格化の必要性」. 日本心理研修センター設立 1 周年記念公開シンポジウム（2014.3）

学会報告

- Ishikawa, K.:** Trust relationships and a sense of authenticity: The relationship between social wisdom and a sense of authenticity. The 12th Annual Conference in Cross Cultural Education (Birmingham, Michigan, USA) (2013.8)
- 矢島裕子, 石川清子：ナラティブ・アプローチによる不登校生徒への支援：挫折乗り越えと社会的知恵との関連. 日本特殊教育学会 第 51 回大会（2013.8）
- 石川清子, 矢島裕子：青年期の対人的信頼感と本来感：本来感と社会的知恵の関係. 第 77 回 日本心理学会（2013.9）
- 矢島裕子, 石川清子：青年期における挫折の乗り越えと社会的知恵の関連性：挫折経験を成長と思えること. 第 77 回 日本心理学会（2013.9）
- 田中芳幸, 大澤靖彦, 加藤宏一：メンタルヘルスの状態ごとの気分悪化の容易さに関する一考察. 日本心理学会 第 77 回大会（2013.9）
- 岡本 香, 中島早紀：13SNS の効用に関する一考察. 日本社会心理学会 第 54 回大会（2013.11）
- Saito, H. and Sato, S.:** Effects of homework intervention based on transactional analysis and cognitive behavioral therapy. 2013 International Transactional Analysis Association International Conference with the 38th Japanese TA conference in Osaka (Osaka, Japan) (2013.8)
- 新井雅人：主語と心理活動の相言に特徴のみられた一事例の語彙分析的検討. 日本心理臨床学会 第 32 回大会（2013.8）

著書

- 栗原 久：赤城山検定 (3 級) 用テキスト 2013 年版. 赤城自然塾, 前橋 (2013.12)
- 栗原 久：チョコレート, カフェイン. In: ニュートン別冊「食品の科学知識 ー身近な飲食物から栄養素・サプリメントまで」(ニュートン編集部編), pp58-61, pp122-125, ニュートンプレス, 東京 (2014.2)
- 駒井美智子 (編著)：幼児文化教材「理論と実践」ーてあそび・人形劇いっぱいあそんじゃおう. 大学図書出版, 東京 (2013.4)
- 駒井美智子：第 4 章 乳児と保育者の関わり. In: 乳児保育 (咲間まり子編), pp21-30, 大学図書出版, 東京 (2013.4)
- 駒井美智子：第 8 章 病気の予防, 第 10 章 衛生管理. In: 保育内容「健康」(宮下京子編著), pp88-110, pp121-127, 大学図書出版, 東京 (2013.4)
- 駒井美智子：第 2 章 領域「人間関係」と他領域との関連. In: 保育内容「人間関係」(咲間まり子編), pp21-30, 大学図書出版, 東京 (2013.4)
- 駒井美智子：気になるこの保育・保育の支援. In: たのしい実技集 (武井 純編著), pp14-15, 日本幼児教育研究会, 東京 (2013.7)
- 駒井美智子：第 9 章 子どもの児童文化教材に関する学び. In: 現代保育者入門 (高橋貴志編), pp159-170, 大学図書出版, 東京 (2013.9)
- 駒井美智子：第 4 章 事例「多文化保育に関わる保育者と保護者の在り方」. In: 多文化保育・教育論 (咲間まり子編), pp47-51, みらい社, 東京 (2014.3)
- Tetsuka, C.:** Collaborative learning for creativity: A case study of the KARUTA workshop. In: Spaces of Art Education: Collection of International Studies on Contemporary Art Education (Gaul, E., Kárpáti, A., Pataky, G. and Illés, A., Eds.), pp127-130, National Textbook Publishing House, Budapest (2013.12)
- 松木洋人：子育て支援の社会学 ー社会化のジレンマと家族の変容. 新泉社, 東京 (2013.10)
- 松木洋人：第 8 章 構築主義的家族研究の可能性 ーアプローチの空疎化に抗して. In: 越境する家族社会学 (渡辺秀樹, 竹ノ下弘久編著), pp124-138, 学文社, 東京 (2014.2)
- 松本岳志：第 6 章 歌ってみよう弾いてみよう. In: 幼児文化教材「理論と実践」ーてあそび・人形劇いっぱいあそんじゃおう (駒井美智子編著), pp87-120, 大学図書出版, 東京 (2013.4)
- 守 巧：第 5 章 室外のあそびのいろいろ. In: 幼児文化教材「理論と実践」ーてあそび・人形劇いっぱいあそんじゃおう (駒井美智子編著), pp61-87, 大学図書出版, 東京 (2013.4)
- 小櫃智子, 守 巧, 佐藤 恵, 飯塚朝子：幼稚園・保育所実習 パーフェクトガイド. わかば社, 東京 (2013.5)
- 守 巧：ぷちワンダー 2 月号「おにのパンツ」. 世界文化社, 東京 (2014.2)

原著論文

- Kuribara, H.:** Blockade of scopolamine tolerance and modification of methamphetamine sensitivity by pilocarpine, a muscarinic cholinergic drug, evaluated in terms of the ambulation in mice. Bull. Tokyo Univ. Graduate Sch. Social Welfare 4: 3-9 (2013.10)

- 浅井恭子, 中島 範, 岩田慎太郎, 清水謙太, 栗原 久: 軽度認知症を有する男性高齢者における「手作り日本人形」の使用による健康度の改善事例 —高齢女性との比較検討—. 東京福祉大学・大学院紀要 **4**: 33-41 (2013.10)
- 栗原 久: 教育系および医療系大学生の薬物乱用に関する認識 —作文の記述内容を基にした分析—. 東京福祉大学・大学院紀要 **4**: 55-61 (2014.10)
- Kuribara, H.:** Block of the tolerance to ambulation stimulant effect of scopolamine in mice by bethanecol, a peripheral cholinergic drug. Bull.Tokyo Univ.Graduate Sch.Social Welfare **4**: 97-103 (2014.3)
- 栗原 久: 人々を楽しませる赤城山の魅力 2. 赤城山をめぐる伝説とそのルーツの考察. 東京福祉大学・大学院紀要 **4**: 145-157 (2014.3)
- 松木洋人: 家族定義問題の終焉 —日常的な家族概念の含意の再検討. 家族社会学研究 **25**: 52-63 (2013.4)
- 守 巧, 横山文樹: 「気になる子ども」に関する研究の再考. 保育の実践と研究 **18**: 55-67 (2013.5)
- 守 巧, 松井剛太: 保育現場における気になる子どもの保護者支援 —気になる子どもと似た特性のある保護者の実態把握. 香川大学教育実践総合研究 **27**: 33-44 (2013.9)
- 守 巧, 山崎摂史, 駒井美智子: 「気になる子ども」に対する保育の検討 —「対象児の支援」「クラス集団作り」「保育展開の工夫」の視点から—. 東京福祉大学・大学院紀要第 **4**: 23-31 (2013.10)
- 守 巧, 山崎摂史, 駒井美智子: 保育現場における「気になる」姿への傾向分析. 東京福祉大学・大学院紀要 **4**: 63-71 (2013.10)
- 手塚千尋, 茂木一司, 佐藤真帆: 日本文化を学ぶ workshop をデザインする. 日本美術教育研究論集 **42**: 107-114 (2014.3)

総説・解説

- 栗原 久: 赤城山宿泊研修 全学的な取り組みの完成 !! 東京福祉大学広報誌 (Voyage 大海へ) **2013** 夏号: 2 (2013.8)
- 駒井美智子: 子育てに自信を持つための 5 つのポイント. 群馬タウン誌 **Vien 18**: 18 (2013.6)
- 駒井美智子 (監修): 0・1・2 歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2013-4**: 26-27, 40-41 (2013.4)
- 駒井美智子 (監修): 0・1・2 歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2013-5**: 26-27, 33-34 (2013.5)
- 駒井美智子 (監修): 0・1・2 歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2013-6**: 20-21, 26-27 (2013.6)
- 駒井美智子 (監修): 0・1・2 歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2013-7**: 20-21, 26-27 (2013.7)
- 駒井美智子 (監修): 0・1・2 歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2013-8**: 28-29, 34-35 (2013.8)
- 駒井美智子 (監修): 0・1・2 歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2013-9**: 20-21, 26-27 (2013.9)
- 駒井美智子 (監修): 0・1・2 歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2013-10**: 20, 21, 27 (2013.10)

- 駒井美智子(監修)：0・1・2歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2013-11**：26-27, 40-41 (2013.11)
- 駒井美智子：知育あそびと知育教材. 保育月刊誌「ひろば」**2013-11**：35-42 (2013.11)
- 駒井美智子(監修)：0・1・2歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2013-12**：25-30, 31 (2013.12)
- 駒井美智子(監修)：0・1・2歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2014-1**：28-29, 35 (2014.1)
- 駒井美智子(監修)：0・1・2歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2014-2**：16-17, 22 (2014.2)
- 駒井美智子(監修)：0・1・2歳児の壁面構成と手づくりおもちゃ. 保育月刊誌「ひろば」**2014-3**：26-27, 40-41 (2014.3)
- 松木洋人：ひろば運営の課題と今後の展望:事業継続をはかるには. シンポジウム「第10回ワーカーズ・コレクティブ全国会議 in 千葉：地域再生に向けてネットワークでつくる『新しい公共』」記録：pp23-25 (2013.4)
- 松木洋人：(書評) 沢山美果子著『近代家族と子育て』. 季刊家計経済研究 **100**：98-99 (2013.10)
- 守 巧：ワンダーブック. 月間絵本ガイド「ワンダー通信」**2013-5**：8-11 (2013.5)
- 守 巧：ワンダーブック. 月間絵本ガイド「ワンダー通信」**2013-9**：8-11 (2013.9)
- 守 巧：ワンダーブック. 月間絵本ガイド「ワンダー通信」**2014-1**：8-11 (2014.1)

シンポジウム・ワークショップ

- 駒井美智子：シンポジウム「日本における『外国人コミュニティ』の形成－多文化保育の実態と今後の課題－」(企画・司会者). 国際幼児教育学会 第34回大会 (2013.9)
- 小林保子：家族支援の視点から. シンポジウム「障害のある子どものきょうだい支援を考える(2)」。日本特殊教育学会 第51回大会 (2013.8)
- 小林保子：保育・幼児教育におけるヒューマンサービス－特別な支援を要する子へのサービスの視点を例に－. シンポジウム「ヒューマンサービスの現状と課題－人間尊重への全人的視点」。国際ヒューマンサービス学会 第1回記念大会 (2013.11)
- Tetsuka, C., Mogi, K., Sato, M., Ueda, N., Gunji, A., Sowa, T. and Onishi, K.:** The MITATE workshop –Practical workshop. Workshop “Identities of Creative Education and Practitioners”. In SEA European Regional Congress: Canterbury 2013 (Canterbury, UK) (2013.6)
- 守 巧, 咲間まりこ子, 柳澤剛文：保育者養成校からの今後の保育者への課題と方向性について. シンポジウム「日本における『外国人コミュニティ』の形成－多文化保育の実態と今後の課題－」。国際幼児教育学会 第34回大会 (2013.9)
- 守 巧, 宮崎由美, 山本牧子, 宮崎悦子：多様なニーズへの挑戦－たて糸とよこ糸で織りなす新たな教育の創造－. シンポジウム「登園登校しぶりや不登校の発達障害ケースにどう対応するか－様々な年齢段階における具体的な事例を中心に－」。日本LD学会 第22回大会 (2013.10)

学会報告

- 栗原 久, 中島 範, 浅井恭子, 岩田慎太郎: 「手作り日本人形」の短期提供による軽度認知症を有する高齢女性の健康度改善. 環境福祉学会 第9回年次大会 (2013.11)
- 永井伸一, 安原 稔, 栗原 久: 吸水紐を用いた植物の簡易栽培法ー9. トマト栽培における癒し効果の分析2. 環境福祉学会 第9回年次大会 (2013.11)
- 小林保子: 障害児通園施設における保育士の役割と専門性に関する研究. 日本保育学 第66回大会 (2013.5)
- 小林保子: 家族 QOL アセスメントに関する研究 報告1 障がい児の家族支援に活かす諸外国の FQOL の動向. 日本特殊教育学会 第51回大会 (2013.8)
- 小林保子, 松本健二, 齋藤歎能, 駒井美智子, 守 巧: 三年制短期大学の卒業生学習成果と大学の役割に関する研究ーアンケート調査による検証ー. 全国保育士養成協議会 第52回大会研究大会 (2013.9)
- 駒井美智子, 守 巧, 山崎摂史: 保育園における外発的模倣と内発的模倣による園児の活性化. 日本保育学会 第66回大会 (2013.5)
- 駒井美智子, 守 巧, 山崎摂史: 保育者の保育時間外の時間の使い方 (1) アンケート分析. 日本保育学会 第66回大会 (2013.5)
- 駒井美智子: 保育園における園児と保育士の情報の非対象性に関する研究. 日本小児保健学会 第60回大会 (2013.9)
- 駒井美智子, 守 巧: 日本の多文化コミュニティにおけるメンバーの対立と活性化. 国際幼児教育学会 第34回大会 (2013.9)
- 小川未季, 宮一滯奈, 横山菖子, 下山紗希, 伊沢 司, 駒井美智子, 守 巧: 多文化保育の実態についてー保護者との関わりに関する具体的事例ー. 国際幼児教育学会 第34回大会 (2013.9)
- 小林千鶴, 池田あやめ, 阿由葉成美, 駒井美智子, 守 巧: 多文化保育に関する研究ー高崎市の実態とその考察ー. 国際幼児教育学会 第34回大会 (2013.9)
- 渡部友美, 松田つづら, 阿部加歩, 駒井美智子, 守 巧: 多文化保育の実態についてー事例を通しての保育者と子どもの関わりについてー. 国際幼児教育学会 第34回大会 (2013.9)
- 手塚千尋: 協同的な学び論の検討Ⅲー「協同的創造」を支えるパートナーシップを中心にー. 第52回大学美術教育学会 (2013.10)
- 茂木一司, 手塚千尋, 郡司明子, 佐藤真帆: 日本文化・美術をテーマとしたワークショップ・デザインの検討ーMITATE Workshopを中心にー. 第52回大学美術教育学会 (2013.10)
- 手塚千尋, 佐藤真帆, 茂木一司: 日本の文化を学ぶ workshop をデザインする. 第47回日本美術教育研究発表会 (2013.10)
- 松本岳志: 保育者養成課程の音楽教育における ICT 活用について (2). 日本保育学会 第66回大会 (2013.5)
- 守 巧, 松井剛太: 保育現場における気になる子どもと似た特性を持つ保護者支援. 日本保育学会 第66回大会 (2013.5)
- 山崎摂史, 守 巧, 駒井美智子: 保育者の保育時間外の時間の使い方 (1). 日本保育学会 第66回大会 (2013.5)
- 山崎摂史, 守 巧, 駒井美智子: 多動傾向が強い幼児への反社会的行動の減少に向けての取り組み (1)ー加配教諭と担任教諭の支援効果の検討ー. 日本 LD 学会 第22回大会 (2013.10)
- 守 巧, 山崎摂史, 駒井美智子: 多動傾向が強い幼児への反社会的行動の減少に向けての取り組み (2)ー保育行事との連関ー. 日 LD 学会 第22回大会 (2013.10)

演奏会・写真展

栗原 久（監修）：写真展「昭和初期の赤城山を見る」. 群馬県中部県民局・赤城自然塾（2014.2）

松本岳志：かわさき市民オーケストラ 市民交響楽祭2013・コンサートマスター（ミューザ川崎シンフォニーホール）（2013.6）

松本岳志：宮前フィルハーモニー交響楽団 第36回定期演奏会・コンサートマスター（多摩市民館大ホール）（2013.12）

松本岳志：宮前フィルハーモニー交響楽団 音楽のおもちゃ箱Ⅶ・コンサートマスター（宮前市民館大ホール）（2014.2）

松本岳志：かわさき市民オーケストラ オペラ「かぐや姫」・第1 ヴァイオリン（ミューザ川崎シンフォニーホール）（2014.2）

翻訳

豊田賀子, 他（分担訳）：APA 心理学大辞典（APA Dictionary of Psychology）, 培風館, 東京（2013.9）

公開検定問題

栗原 久：第1回 赤城山検定（3級）問題. 赤城自然塾, 前橋（2013.12）

著書

- 片山伸子：第1章 乳児の身体知覚の発達，第4章 幼児はどのように他者の心の理解を深めていくのか。
In：ロボットを通じて探る子どもの心ディヴェロップメンタル・サイバネティックスの挑戦 (板倉昭二，北崎充晃編)，pp13-34, pp75-101, ミネルヴァ書房，京都 (2013.9)
- 大門俊樹：第6章 福祉行財政と福祉計画，第17章 児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度。
In：社会福祉士国家試験完全合格問題集 2014年版 (社会福祉士国家試験研究会編)，pp103-118, pp315-330, 翔泳社，東京 (2013.4)
- 大門俊樹：第6章 福祉行財政と福祉計画。In：社会福祉士・精神保健福祉士完全合格テキスト 共通科目 2014年版 (社会福祉士国家試験研究会編)，pp295-326, 翔泳社，東京 (2013.4)
- 大門俊樹：第17章 児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度。In：社会福祉士完全合格テキスト 専門科目 2014年版 (社会福祉士国家試験研究会編)，pp285-338, 翔泳社，東京 (2013.4)
- 仁科伸子 (監修・翻訳)：持続可能な未来の探求「3.11」を超えて。御茶の水書房，東京 (2014.3)
- 内藤辰美，佐久間美穂：中心と周縁 ータイ、天草、シカゴ。春風社，横浜 (2013.12)
- 藤島 薫：福祉実践プログラムにおける参加型評価の理論と実践。みらい社，東京 (2014.3)
- 松本瑞穂：第4章 現代社会と福祉。In：2014年度版 社会福祉士完全合格問題集 (社会福祉士国家試験研究会編)，pp53-78, 翔泳社，東京 (2013.4)
- 水島正浩：第8章 障害者に対する支援と障害者自立支援制度，14章 相談援助の理論と方法，第16章 高齢者に対する支援と介護保険制度。In：社会福祉士国家試験完全合格問題集 2014年版 (社会福祉士国家試験研究会編)。pp135-152, pp233-276, pp293-314, 翔泳社，東京 (2013.4)
- 水島正浩：第8章 障害者に対する支援と障害者自立支援制度，14章 相談援助の理論と方法，第16章 高齢者に対する支援と介護保険制度。In：社会福祉士完全合格テキスト共通科目及び専門科目 2014年版 (社会福祉士国家試験研究会編)，pp391-434, p101-156, pp229-284, 翔泳社，東京 (2013.5)

報告書

- 大門俊樹：韓国における学校社会福祉士へのスーパービジョン調査報告。In：スクールソーシャルワーカーのスーパービジョン研究 ー日本・アメリカ・カナダ・韓国での調査報告ー (科学研究費B「スクールソーシャルワーカーの専門性向上のためのスーパービジョン・プログラムの開発 (研究代表者：門田光司)」報告書，pp50-140 (2014.2)

原著

- 青木 正：中国帰国者の歴史的経緯と中国帰国者支援の現状と課題 ー群馬県在住の中国帰国者への支援を考えるー，群馬県立女子大学第2期群馬学リサーチフェロー研究報告集 2：59-67 (2014.3)
- 河野 等：介護予防に関する知見と課題 ー介護専門家の視点から抽出した介護予防への評価を中心にー。日米高齢者保健福祉学会誌 5：89-105 (2013.10)

竹内俊彦, 加藤尚吾, 加藤由樹, 舘 秀典: クイズ掲示板の開発と評価. 教育システム情報学会研究報告 **28(5)**: 5-6 (2014.1)

竹内俊彦, 加藤尚吾, 加藤由樹, 舘 秀典: クイズ掲示板の開発と諸機能実装. 日本教育工学会研究報告 **28**: 5-6 (2014.1)

竹内俊彦, 加藤尚吾, 加藤由樹, 舘 秀典: クイズ掲示板の運営とユーザインタフェースの改良. 教育システム情報学会研究報告 **28**: 75-76 (2014.3)

田崎教子: 音楽療法的アプローチの保育への導入 ―セラピストが行う「音楽表現活動」の分析を通して―. 音楽教育研究ジャーナル **40**: 13-25 (2013.10)

田崎教子: 「表現(音楽)」に対する保育者の保育観と音楽観. 東京福祉大学・大学院紀要 **4**: 43-54 (2013.10)

西村明子: 知的障害者と優生政策. 立教コミ福研究科紀要 **12**: 41-51 (2014.3)

松村幸輝, 水野公人: 遺伝的プログラミングによる表情識別アルゴリズムの自動生成. 電子情報通信学会論文誌 **J96-D**: 952-964 (2013.4)

藤島 薫: 若者と家族のストレスに焦点をあてたりカバリー志向の早期支援・過渡的支援 ―ニュージーランドにおける早期支援プログラムの実際から―. 東京福祉大学・大学院紀要 **4**: 73-82 (2013.10)

2012 年度追加

馬場さやか: 地域医療の現状と課題 ―北海道斜里郡斜里町の事例として―. 北海道地域福祉研究 **17**: 1-10 (2013.3)

総説・解説

平 仁: 臨時特別企業税事件. MJS 第 50 回租税判例研究会 Report (WEB 上公開) (2013.6)

平 仁: 経営改善と金融支援が同時に受けられる「経営力強化保証制度」の内容と上手な利用法を教えます. 経理 WOMAN **2013-5**: 99-104 (2013.5)

平 仁: 認知症等により意思能力を喪失した税理士による税理士法人設立の有効性. 月刊税務事例 **2013-12**: 48-54 (2013.12)

矢吹美美子: 幼児との“みんなで創る心理劇”. 日本心理劇学会会報 **34**: 1 (2013.4)

2012 年度追加

宮坂慎司: 井の頭自然文化園彫刻園 北村西望. 日展ニュース **148**: 11 (2013.3)

特別講演・シンポジウム

菊池敏夫: 日中企業管理の歴史と課題. シンポジウム「東アジアの経営環境 ―政治、経済、経営行動」. 経営行動研究学会 第 89 回研究部会 (2013.10)

小谷川元一: 自立援助ホームの現状と課題 (講演). 千葉県民生委員研修会 (2013.4)

小谷川元一: 健康な心と体を育む運動遊びの重要性 (講演). 東京都公立幼稚園協会研修会 (2013.6)

小谷川元一: 虐待事例の現状 (講演). 千葉県保護司会研修会 (2013.7)

- 小谷川元一：触法及び虞犯行為を犯した児童について（講演）. 千葉家庭裁判所保護者会（2013.10）
- 小谷川元一：健康な心と体を育む運動遊び（講演）. 第52回 全国学校体育研究大会 東京大会（2013.11）
- 小谷川元一：学校体育の現状と課題（講演）. 埼玉県長期研修生研究報告会（2013.11）
- 小谷川元一：幼児の心と体を育てる運動遊び（講演）. 江戸川区公立保育園合同職員研修会（2014.2）
- 小谷川元一：社会的養護の現状と課題（講演）. 柏市役所管理職研修会（2014.3）
- 小谷川元一：よい教師とは（講演）. 全国教育者会議 KES（2014.3）
- 齋藤厚子：認知発達治療の理論と実践・家族支援（講演）. 日本文化科学社 第 21 回 自閉症セミナー（2013.8）
- 齋藤厚子：発達障害の理解と支援（講演）. 聖心女子学院小中高校教員研修会（2014.1）
- 多比良和誠：核酸の会議（討論者）. 北京大学・張礼和・教授との共同研究検討会（2013.9）
- 多比良和誠：遺伝子に関する特別講演（コメンテーター）. 第 17 回 HNK 一関総会（2013.9）
- 多比良和誠：傷ついた遺伝子遺伝子を修復する人体の“超能力”（講演）. HNK 例会（2014.1）
- 平 仁：租税特別措置と損金経理. シンポジウム「格差是正と税制」, 租税理論学会 第 25 回研究大会（2013.11）
- 矢吹芙美子：幼児との“みんなで創る心理劇”. 日本心理劇学会 第 17 回研修会（2013.7）
- 矢吹芙美子：かかわりと性格形成. 練馬区健康福祉部児童青少年部保育課「障害児保育研修」（2013.9）

学会発表

- 青木 正：EAP による職場復帰支援. 第 49 回 日本精神保健福祉士協会全国大会・第 12 回日本精神保健福祉士学会学術集会（2013.6）
- 青木 正：中国帰国者の歴史的経緯と中国帰国者支援の現状と課題－群馬県在住の中国帰国者への支援を考える－. 群馬県立女子大学群馬学リサーチフェロー公開発表会（2014.3）
- Kawashima, A., Kurushima, T. and Nakazawa, J.:** Marital quality and coparenting behavior: Triadic family interactions with preschoolers in Japan. Society for Research in Child Development (SRCD) (Seattle, Washington, USA) (2013.4)
- 姜 壽男：多文化ソーシャルワークにおけるソーシャルワーカーのカルチュラル・コンピテンスの開発. 社会福祉学会 第 61 回大会（2013.9）
- 平 仁：一人親方の外注費の仕入税額控除該当性. 第 405 回 日本税法学会関東部会（2013.5）
- 平 仁：神奈川県臨時特例企業税事件（平成 25 年 3 月 21 日最高裁判決）. 第 50 回 租税判例研究会（2013.6）
- 平 仁：少子高齢化に向けたあるべき税制の検討（データ分析）. 日本税務会計学会国際部門少子高齢化税制検討グループ（2013.11）
- 平 仁：認知症等により意思能力を喪失した税理士による税理士法人設立の有効性. 現代税法研究会（2013.11）
- 大門俊樹：韓国における学校社会福祉現場実習指導マニュアルから学ぶこと－準備段階の内容から－. 日本学校ソーシャルワーク学会 第 8 回大会（2013.7）
- 大門俊樹：韓国における学校社会福祉現場実習に関する研究－指導マニュアル初期段階の内容から－. 日本社会福祉学会 第 62 回大会（2013.9）
- 大門俊樹：韓国における学校社会福祉士による福祉教育実践－“우리가 만드는 행복 세상”（私たちがつくる幸せな世界）事業を通して－. 日本福祉教育・ボランティア学習学会 第 19 回大会（2013.11）

- 田崎教子：療法的アプローチの保育への導入－「音楽表現活動」の実践－. 日本保育学会 第 66 回大会 (2013.5)
- 舘 秀典, 加藤由樹, 加藤尚吾, 竹内俊彦：課題提出に利用されたデバイスと文字数との関連、およびモバイル端末からのレポート提出における文字数の妥当性について. 教育システム情報学会 第 35 回全国大会 (2013.9)
- 竹内俊彦, 加藤由樹, 加藤尚吾, 舘 秀典：クイズに特化した掲示板の作成. 教育システム情報学会 第 35 回全国大会 (2013.9)
- 加藤由樹, 舘 秀典, 加藤尚吾, 立野貴之：デジタルネイティブが上の世代との携帯電話を使ったコミュニケーションにおいて持つ違和感に関する調査. 情報コミュニケーション学会 第 11 回全国大会 (2014.3)
- 舘 秀典, 加藤尚吾, 加藤由樹：レポート記述における媒体の違いが文章に及ぼす影響と、日常の局面における電子デバイスの使い分けに関するアンケート調査報告. 情報コミュニケーション学会 第 11 回全国大会 (2014.3)
- 立野貴之, 加藤尚吾, 加藤由樹, 舘 秀典：大学生のケータイ利用に関する性差に注目した分析. 情報コミュニケーション学会 第 11 回全国大会 (2014.3)
- Tachi, H., et al.:** Comparing computer and mobile phone use by American and Japanese university students. EdMedia 2014 - World Conference on Educational Media and Technology (Tampere, Finland) (2014.6)
- 西村明子：知的障害者のセクシュアリティ・結婚・子育て支援に関する研究. 日本福祉文化学会 第 24 回大会 (2013.9)
- 馬場さやか, 馬場康徳：地域医療における住民組織化の有効性と課題－北海道斜里郡斜里町を事例として－. 日本地域福祉学会 第 27 回大会 (2013.6)
- 馬場康徳, 馬場さやか, 富田あすみ：精神障害者グループホームの組織形態と入退居者の実態－東京都精神障害者グループホームの実態調査結果を中心に－. 日本社会福祉学会 第 61 回大会 (2013.9)
- 藤島 薫：若者と家族のストレングスに焦点をあてた早期支援・過渡的支援－ニュージーランドにおける早期支援プログラムから－. 第 12 回 日本精神保健福祉士学術集会 (2013.6)
- 藤島 薫：若者のストレングスを焦点としたリカバリーゴールの過渡的支援－児童デイサービスを基盤とした思春期・早期青年期への試行的実践に向けて－. 日本社会福祉学会 第 61 回秋季大会 (2013.9)
- 藤島 薫：若者と家族のストレングスに焦点をあてた複合的支援の重要性－地域をフィールドとした安心のプログラム試行に向けて－. 第 17 回 日本精神保健・予防学会学術集会 (2013.11)
- Hosokawa, K., Hayakawa, E., Hashimoto, S. and Knno, A.:** A comparison of accommodations and challenges in supporting infants with different disabilities in nursery school. 3rd Asia-Pacific Regional Conference (Tokyo, Japan) (2013.8)
- Hirata, Y. and **Hosokawa, K.:** A trial evaluation of stress using salivary amylase to adults with intellectual disabilities. 3rd Asia-Pacific Regional Conference (Tokyo, Japan) (2013.8)
- 細川かおり, 今田朝知, 大関里美：2 歳児の遊びを育てることを通してクラスが落ち着いた保育実践 2－保育カンファレンスを通じた外部の専門家と保育の専門家との協働の試み－. 日本保育学会 第 66 回大会 (2013.5)
- 矢吹芙美子：外国人幼児のおかれた状況－東京の巡回相談から見えてくる家族・保育・発達－. 国際幼児教育学会 第 43 回大会 (2013.9)

翻訳

- 川島亜紀子：第Ⅱ部 第7章 仲間との問題はどのように良くない結果をもたらすのか・統合的な媒介モデル。In：子どもの仲間関係－発達から援助へ－（中澤 潤監訳）（Kupersmidt, J.B. and Dodge, K.A., Eds.）: Children's Peer Relations: From Development to Intervention. American Psychological Association, Washington DC, 2004), pp111-128, 北大路書房, 京都 (2013.9)
- 藤島 薫：モスト・シグニフィカント・チェンジ (MSC) 手法実施の手引き (The Most Significant Change (MSC) Technique). www.mande.co.uk/docs/MSCGuide.htm (2013.9)

演奏会・制作

- 田崎教子：第14回 布田わくわくひろばまつり・伴奏（調布市心の健康支援センター）（2013.10）
- 田崎教子：調布市市民音楽祭・伴奏（調布グリーンホール）（2013.11）
- 田崎教子：クリスマス・ミニコンサート・伴奏（調布市立第1小学校）（2013.12）
- 宮坂慎司：作品名「遺標－篝火－」, 第43回 日彫展（2013.4）
- 宮坂慎司：作品名「yocto」, 第45回 日展（2013.11）
- 宮坂慎司：作品名「杜の番」, 第51回 船橋市美術展覧会（2013.11）
- 宮坂慎司：第25回 北彫展（グループ展）（2013.5）
- 宮坂慎司：第9回 春日会彫刻展（グループ展）（2013.7）

池袋キャンパス（教育学部）

著書

- 萩原正義, 齊藤宏之, 澤田晋一, 安田彰典, 岡龍 雄, 田井鉄男, 坂本龍雄, 榎本ヒカル, 加部 勇, 幸地 勇, 佐藤裕司, 瀧上知恵子, 土肥紘子, 長埜庸子, 門田美子, 村上朋子：オフィス環境に存在する化学物質の調査. 労働安全衛生総合研究所特別研究報告 No.43, pp149-152, 独立行政法人労働安全衛生総合研究所, 東京 (2013.11)
- 齊藤宏之, 澤田晋一, 安田彰典, 岡 龍雄, 萩原正義, 田井鉄男, 時澤 健, 坂本龍雄, 榎本ヒカル, 加部 勇, 幸地 勇, 佐藤裕司, 瀧上知恵子, 土肥紘子, 長埜庸子, 門田美子, 村上朋子：節電下のオフィス環境における温湿度と健康影響調査. 労働安全衛生総合研究所特別研究報告 No.43, pp157-163, 独立行政法人労働安全衛生総合研究所, 東京 (2013.11)
- 菅原健次（監修）：小学校体育『授業で使える全単元の学習カード』. 東洋館出版, 東京 (2013.7)
- 菅原健次（編集）：足育指導資料. 恵友印刷, 東京 (2013.11)

原著論文

- 加藤 卓：幾何学教育の入門としての正多面体に関する教育実験について（その1）. 数学教育学会誌 臨時増刊（2013年度数学教育学会秋季例会）79-81（2013.9）
- 加藤 卓：論述力の実態調査から見た指導事項の改善について. 数学教育学会誌 臨時増刊（2014年度数学教育学会春季年会）138-140（2014.3）
- 竹内俊彦, 加藤由樹, 加藤尚吾：クイズ掲示板の開発と諸機能の実装. 日本教育工学会研究報告集 69-74（2013.12）
- 竹内俊彦, 加藤尚吾, 加藤由樹, 舘 秀典：クイズ掲示板の開発と評価. 教育システム情報学会研究報告 28：5-6（2014.1）
- 周村論里, 竹内俊彦, 柳沢昌義：数学のリメディアル教育におけるマンガ教科書とイラスト教科書の比較実験. 教育システム情報学会研究報告 28：69-74（2014.1）
- 竹内俊彦, 加藤尚吾, 加藤由樹, 舘 秀典：クイズ掲示板の運営とユーザインタフェースの改良. 教育システム情報学会研究報告 28：75-76（2014.3）

総説・解説

- 池田芳和：学校管理職に求められる教養とは. 教職研修 2013-8：90-91（2013.8）

特別講演・シンポジウム

- 石垣久美子：高校におけるスクールカウンセラーの立場での実践から. シンポジウム「ソーシャルスキルトレーニングの有効性が期待できる条件－教育の場でどのような時に SST は有効なのか？－. 日本教育心理学会 第 55 回総会（2013.8）
- 榎本ヒカル, 薩本弥生, 杉本千佳：あるクールビズ実施オフィスの温熱環境による人体影響に関する実態測定. シンポジウム「第 37 回人間－生活環境系シンポジウム」（2013.12）

学会報告

- 井草玲子：学習者の多様なニーズを考慮した英文要旨指導. 日本英語表現学会 第 42 回全国大会（2013.6）
- 榎本ヒカル：学習指導要領および教科書からみた小学校の環境教育に関する調査. 日本家庭科教育学会 第 56 回大会（2013.6）
- 加藤 卓：数学教育学会を中心とした図形領域の論文内容の概要について. 数学教育学会 第 3 回大会（2013.7）
- 加藤 卓：現行幼稚園教育要領における数学に関する教育内容について. 数学教育学会 第 5 回大会（2014.1）
- 竹内俊彦, 加藤由樹, 加藤尚吾：マンガのストーリー予測クイズの得点とコミュニケーション能力の関係. 情報コミュニケーション学会 第 10 回全国大会（2013.2）

竹内俊彦, 加藤由樹, 加藤尚吾, 舘 秀典: クイズに特化した掲示板の作成. 教育システム情報学会 第38回全国大会 (2013.9)

坂井二郎: 異文化理解における「エポケー」の役割・課題・可能性: 仏教的「エポケー」としての止観を応用した異文化理解教育の可能性. 多文化関係学会 第12回全国大会 (2013.10)

田村にしき: 地域の伝承者・実演家との協働による謡の授業実践 —小学校4年生を対象に—. 第18回日本学校音楽教育実践学会全国大会 (2013.8)

日野純子: 大学生初年次の文章能力についての質的・量的分析 —文章作成時の態度にみられる問題点—. 日本語教育研究集会 中国地区研修会 (2013.11)

Yamaguchi, T.: Henry David Thoreau and transatlantic ecology. The 12th Annual Hawaii International Conference on Arts and Humanities (Honolulu, Hawaii, USA) (2014.1)

演奏会・美術展など

片岡 浩: 片岡 浩の世界展 (銀座・ギャラリーおかりや) (2014. 3)

片岡 浩: 作品收藏 (人間国宝・桂盛仁氏 (個人)) (2013. 6)

片岡 浩: 作品收藏 (軽井沢ニューアートミュージアム) (2013. 7)

池袋・王子キャンパス (心理学部)

著書

木村 純: 保育の心理学. In: 保育士完全合格テキスト (保育士試験対策委員会編), pp131-200, 翔泳社, 東京 (2013.11)

総説・解説

田上不二夫: いま, 人間関係づくりが重要な理由 —対人関係ゲームの理論と実践—. 教育相談研究 51: 63-69 (2014.3)

原著論文

石 晓玲, 桂田恵美子: 保育園児を持つ母親のディストレスとソーシャル・サポートとの関係: 育児不安と精神的健康度に焦点を当てて. 家族心理学研究 27: 44-56 (2013.5)

特別講演・シンポジウム

- 田上不二夫：集団バランスの中で対人行動の成熟を促進する対人関係ゲーム (4). シンポジウム「実証研究から見る学校における対人関係の発達とその課題」. 日本カウンセリング学会 第 46 回大会 (2013.8)
- 石 晓玲：シンポジウム「子どもの創造性の見かた・育て方」(指定討論者). 国際幼児教育学会 第 34 回大会 (2013.9)
- 鈴木康明：シンポジウム「自死問題を考える (1)：大切な人を失うということ」(企画者). 日本カウンセリング学会 第 46 回大会 (2013.8)
- 鈴木康明：いのちを育む Death Education. The 4th International Conference on Expressive Therapy (Suzhou, China) (2013.8)

学会報告

- Suenaga, T.,** Ogawa, Y., Meng, H., Ishida, Y. and Nakahara, D.: Long-lasting effects of adolescent nicotine exposure on cognitive function and neuronal development in mice. Society for Neuroscience, Neuroscience 2013 (San Diego, California, USA) (2013.11)
- 齊藤千鶴, 向井隆代, 佐伯素子：児童養護施設入所幼児のファンタジー行動の測定 (2). 日本心理臨床学会 第 32 回大会 (2013.8)
- 齊藤千鶴, 佐伯素子：家族・親イメージと子どもの行動特徴との関連 (5) —児童養護施設に入所中の幼児を対象とした CAT に関する基礎的研究 その 4—. 日本発達心理学会 第 25 回大会 (2014.3)
- 石 晓玲：事例からみた中国の新生児期子育てサポートの新たな動向. 日本保育学会 第 66 回大会 (2013.5)
- 石 晓玲：文化的自己観と大学生の対人認知・適応との関連. 発達心理学学会 第 25 回大会 (2014.3)
- 田上不二夫：対人関係ゲームによる学級の間人関係づくり (56) —小・中学校生活における充実感—. 日本カウンセリング学会 第 46 回大会 (2013.8)
- 鈴木康明：中国人教師が学ぶ被災児童生徒のための Death Education：日中合作 JICA 四川大地震後こころのケア人材育成プロジェクトから. 国際アジア文化学会 第 22 回大会 (2013.6)
- 杉浦京子, 金丸隆太, 鈴木康明：投映描画法テスト・バッテリーの有効性 その 3. 日本心理臨床学会 第 32 回秋季大会 (2013.8)

名古屋キャンパス (社会福祉学部)

著書

2012 年度追加

内山治夫：復興と福祉 一巻頭文に寄せて，低所得階層と生活保護の実相観，地方福祉行政に携わって．

In: 福祉をつむぐ (内山治夫, 児島美都子, 青木みか, 田中貴美子編著), pp7-18, pp56-81, pp138-158, 風媒社, 名古屋 (2013.3)

原著論文

城田吉孝：経営における経営理念の重要性. 愛知学泉大学 地域社会デザイン研究 2: 19-28 (2014.3)

学会報告

城田吉孝：ドトールコーヒー創業者の経営理念研究序説. 平成 25 年度 第 2 回 日本消費者教育学会中部支部会 (2013.6)

城田吉孝：経営理念の基本的要因. 第 11 回 日本企業経営学会 (2013.8)

城田吉孝：経営における経営理念の重要性. 第 10 回 日本産業経済学会全国大会 (2013.12)

名古屋キャンパス (教育学部)

原著論文

浅井恭子, 中島 範, 岩田慎太郎, 清水謙太, 栗原 久：軽度認知症を有する男性高齢者における「手作り日本人形」の使用による健康度の改善事例 ー高齢女性との比較検討ー. 東京福祉学・大学院紀要 4: 33-41 (2013.10)

西脇雅彦：ASD 児の早期療育. 東京福祉大学・大学院研究紀要 4: 137-143 (2014.3)

Matsuura, M., Hashimoto, T. and Motomi, T.: Associations among adverse childhood experiences, aggression, depression, and self-esteem in serious female juvenile offenders in Japan. *J. Forensic Psychiatr. Psychol.* **24**: 111-127 (2013.9)

Narimoto, T., **Matsuura, M.**, Takezawa, T. and Mitsuhashi, Y.: Spatial short-term memory in children with nonverbal learning disabilities: Impairment in encoding spatial configuration. *J. Genetic Psychol.* **174**: 73-87 (2013.2)

特別講演・シンポジウム

松原真志夫：教育が伝えるもの（講演）. 愛知県公立商業高等学校教頭会研究協議会（2013.11）

松原真志夫：現代の教育課題と教科指導 4（講演）. 愛知県教育スポーツ振興財団主催の教員人材銀行
登録者対象研修会（2014.3）

学会報告

栗原 久, 中島 範, 浅井恭子, 岩田慎太郎：「手作り日本人形」の短期提供による軽度認知症を有する高
齢女性の健康度改善. 環境福祉学会 第 9 回年次大会（2013.11）

名古屋キャンパス（心理学部）

原著論文

長坂正文：第 10 章 不登校臨床. In：臨床風景構成法（岸本寛史, 山愛美編）, pp183-200, 誠信書房,
東京（2013.8）

東京福祉大学・大学院紀要投稿要領

平成22年4月1日制定

平成26年4月1日改定

第1 投稿資格

紀要に投稿することができる者は、本学の教職員、専任教員の指導若しくは協力による共同研究者、本学学生・大学院生若しくは卒業・修了生、又は学会誌等編集専門部会が適当と認めたとする。

第2 著作権

紀要に掲載された論文等の著作権は、東京福祉大学・大学院に属する。

第3 投稿原稿

- (1) 原稿の内容は倫理的配慮が充分になされたものであること。
- (2) 人を対象とした実験・調査では、インフォームドコンセント、個人情報の管理がしっかりとされていること。
- (3) 原稿は和文または英文による原著論文を主とするが、他に総説、解説、症例報告、実験技術、資料、調査報告、学術講演要旨、書評等を掲載することもある。ただし、既刊のもの又は刊行物に掲載予定のものは除く。
- (4) 投稿に際しては、原稿、写真、図、表をUSB、CDR等の電子媒体に記録したものと、印字原稿1部、査読用コピー2部を提出する。
- (5) 印字原稿はA4版に文字サイズ10.5ポイントでテキスト形式で印字し、和文では40字×40行(1,600字)、英文では12ピッチ、ダブルスペースとする。
- (6) 原稿制限枚数(400字詰め原稿用紙換算)

総説	20～40枚
原著	20～40枚
短報・症例報告・実験技術	10～20枚
資料・調査等	10～40枚
研修報告等	2～5枚

写真・図・表は原則として総計5点以内とし、それぞれ原稿用紙(400字詰め)1枚として換算し、原稿制限枚数に加算される。
- (7) 和文による原稿は、現代仮名遣いにしたがって平仮名混じり、横書きで、正確に句読点(、。)をつける。
- (8) 写真、図、表の挿入箇所を、印字原稿中に朱書きで指定する。
- (9) 各分野で認められている省略記号以外は、述語の省略はしない。略語は用いても差し支えないが、初出の場合は省略せず()内に略語を明記する。
- (10) 度量衡は原則としてSI単位系を使用する。
- (11) 統計処理を行ったときは、統計検定法を明記する。

第4 原稿の形式

原稿の様式は次の通りとし、順に綴じる。

- (1) 表紙
 - ① 論文種別、表題、投稿者名、所属、所在地、別冊必要数および連絡先(電話・ファックス番号、E-メールアドレス)を明記する。
 - ② 表題、投稿者名、所属、所在地を英語にて記す。
なお、本学の英語表記はTokyo University and Graduate School of Social Welfareとする。
 - ③ ランニングタイトル(和文では20字以内、英文では40字以内)を記す。
 - ④ 別刷請求先:該当する著者名を記す(英文の場合は、Reprint request should be sent to Name of correspondent author)。

(2) 本論文

原稿の2枚目から、次のスタイルで記す(論文の種類によってはこの限りでない)。

① 和文論文の場合

和文抄録(400字以内)、日本語キーワード(3~6個)、緒言、研究対象と方法、結果、考察、結論、引用文献、英文抄録(300語以内)、英語キーワード(日本語キーワードに対応するもの)の見出しをつけ、これらの全てを組み入れて構成・記述する。

② 英文論文の場合

Abstract (300語以内)、Key words (3~6個)、Introduction, Materials and Methods, Results, Discussion, Conclusion, References, 和文抄録(400字以内)、日本語キーワード(Key wordsに対応するもの)の見出しをつけ、これらの全てを組み入れて構成・記述する。

(3) 引用文献

① 文献を引用する際は、引用箇所に著者名と発表年を示す。

(例) 澤口(2010)は; と報告されている(澤口, 2010)

和字の著者2名は「・」でつなぎ、3名以上は「ら」で略す。欧字の著者2名は「and」でつなぎ、3名以上は「et al.」で略す。

(例) 澤口・栗原(2010); 澤口ら(2010); (澤口・栗原, 2010); (澤口ら, 2010)

Sawaguchi and Kuribara (2010); Sawaguchi et al. (2010); (Sawaguchi and Kuribara, 2010); (Sawaguchi et al., 2010)

著者1名ないし2名で同一著者の同一発表年の文献の区別、および著者3名以上で筆頭著者が同一で同一発表年である文献の区別には、発表年の後ろに a, b, c をつける。

② 引用文献(References)欄は、著者のアルファベット順で並べ、同一筆頭者では、著者1名、同2名、同3名以上の順とし、著者2名では第2著者のアルファベット順、3名以上は発表年順に並べ、以下の要領に従って記す。著者が3名を超える場合は、3名まで記し、「ら」または「et al.」で略す。

雑誌: 著者(発表年):表題. 雑誌名*巻数, スタートページ-エンドページ.

*雑誌名は、和文誌は「医学中央雑誌掲載誌目録」、欧文誌は「Index Medicus」により略記。

(例) 澤口彰子・栗原 久(2010):健康に及ぼす環境の影響. 東京福祉大学・大学院紀要 **1**, 15-25.

Sawaguchi, A. and Kuribara, H. (2010): Stress-induced impairment of the mental health. Bull. Tokyo Univ. Sch. Social Welfare **1**, 27-35.

単著本: 著者(発表年):書名. 発行所, その所在都市名, スタートページ-エンドページ.

(例) 澤口彰子・栗原 久(2010):健康科学. 伊勢崎出版, 伊勢崎, pp100-150.

Sawaguchi, A. and Kuribara, H. (2010): Health Science. Isesaki Pub., Isesaki, pp100-150.

分担執筆: 著者(発表年):表題. In: 編者名(編), 書名. 発行所, 所在都市名, スタートページ-エンドページ.

(例) 澤口彰子(2010):血圧の調節. In:栗原 久(編), ストレスマネジメント. 池袋福祉出版, 東京, pp75-90.

Sawaguchi, A. (2010): Control of blood pressure. In: Kuribara, H. (ed.), Stress Management. Ikebukuro Welfare Pub., Tokyo, pp75-90.

(4) 写真・図・表とその説明

① 写真・図・表の掲載は通常左右7.0cmとする。ただし希望により拡大できる。

② 写真・図はそのまま写真製版できるよう鮮明なものとする。フロッピーディスクなどの電子媒体も添付する。

③ 写真・図・表の番号は掲載順にアラビア数字を使用し、説明に使用する言語は、和文論文では日本語か英語のどちらかに統一し、英文論文では英語とする。

(例) 写真1.(Photo. 1.)、 図1.(Fig. 1.)、 表1.(Table 1.)

第5 原稿の受付

- (1) 投稿者は、原稿、写真、図、表を3部(オリジナル1部、コピー2部)、およびデータを保存したUSBなどの電子媒体を「東京福祉大学・大学院学会誌等編集専門部会」へ直接又は書留郵便で提出する。
- (2) 学会誌等編集専門部会は、投稿者に受領書を発行する。
- (3) 原稿の締め切りは毎年6月末日、12月末日とする。

第6 原稿の取扱い

- (1) 原稿の取扱いは、原則として到着順とする。
- (2) 原稿の査読は、学会誌等編集専門部会委員長が2名以上の学内外の専門家に依頼する。
- (3) 査読の依頼を受諾した者は、原稿を受けとってから2週間以内に、査読結果を学会誌等編集専門部会長に連絡する。
- (4) 査読者の意見に従って、投稿者に原稿の修正を依頼することがある。
- (5) 掲載の採否は学会誌等編集専門部会で決定し、投稿者に通知する。

第7 校正

投稿者による校正は、原則として初校のみとし、指定期間内に返却すること。校正に際して、誤植以外の訂正は許されない。

第8 経費の負担

- (1) 投稿原稿にカラー写真を含み、カラー印刷を希望する場合は、その経費全額を投稿者が負担する。
- (2) 別冊作成の経費は投稿者負担とする。

第9 責任

紀要に発表した論文の内容に関し生じた問題の責任は投稿者が負う。

第10 その他

紀要の編集、その他細部は、学会誌等編集専門部会の協議により決定する。編集の関係で、編集部において原稿を一部変更することがある。

第11 個人情報の保護

- (1) 紀要の刊行に関し、個人情報の秘密やプライバシーの保護については十分に配慮する。
- (2) 個人のプライバシー侵害・名誉毀損の可能性が推測されるようなケースでは、姓名、名称のイニシャル記載は不可とする。
- (3) 個人情報の記載が同意、承諾された場合においても、第三者によって問題となることも想定されるので、注意を要する。

投稿申込書

東京福祉大学・大学院紀要学会誌等編集専門部会 殿

下記論文を貴誌に投稿いたします。この論文は他誌に未発表であり、また投稿中でもありません。採用された場合には、この論文の著作権を東京福祉大学に委託すること、また学術リポジトリに要旨及び全文を収載すること、同大学と契約を交わした Web 上に英文あるいは和文の要旨を収載することに同意いたします。なお、本論文の内容に関しては、著者（ら）が一切の責任を負います。

年 月 日

署名 _____ 印 _____

論文表題: _____

ランニングタイトル: _____

署名: 共著者全員の署名が必要です。欄が足りない場合はコピーして2枚提出してください。

① _____ 年 月 日 ② _____ 年 月 日

③ _____ 年 月 日 ④ _____ 年 月 日

⑤ _____ 年 月 日 ⑥ _____ 年 月 日

論文の種類: ○で囲んでください。

総説 原著 報告 その他(_____)

連絡先: 氏名 _____ (所属 _____)

〒 _____

TEL _____ FAX _____ MAIL _____

料金請求先: (上記と同じ場合は、署名のみで結構です)

氏名 _____ (所属 _____)

〒 _____

TEL _____ FAX _____ MAIL _____

学会誌等編集専門部会記入欄:

論文受付日 年 月 日

論文受理日 年 月 日

受付番号

東京福祉大学・大学院紀要への論文投稿の著者チェックリスト

タイトルページ

- 【 】 論文タイトルが書かれている
- 【 】 著者名とその所属・所在地がすべて書かれている
- 【 】 著者の所属が異なる場合、右肩に数字(*1)などを付記して区別されている
- 【 】 別冊請求先の著者名が書かれている
- 【 】 20字(英文では40レター)以内のランニングタイトルが書かれている

抄録ページ

- 【 】 400字(英文では300語)以内の抄録が、改行なしで書かれている
- 【 】 抄録の内容は、研究対象と方法、結果、結論が簡潔に示されている
- 【 】 3~6個以内のキーワードが書かれている
- 【 】 和文論文には、英文タイトル・抄録・キーワード、欧文論文には、和文タイトル・抄録・キーワードがある

本文

- 【 】 紀要投稿要領に従って、「緒言」、「研究対象と方法」、「結果」、「考察」、「結論」、「引用文献」の順に書かれている
- 【 】 語句を省略する場合は、すでに一般化されているものを除いて、最初に完全形を記し、括弧内に省略形を示している
- 【 】 機器、薬物、動物などを使用した場合、商品名、供給会社名、所在都市名が書かれている
- 【 】 図表の挿入箇所が、右余白に赤字で明示されている
- 【 】 未発表のデータを引用する場合は、本文中に明記している
(記載例:伊勢崎ほか, 未発表データ, Isesaki et al., unpublished data)

切り取り

引用文献

- 【 】 本文中での文献引用は、その箇所が適切で、投稿要領に従って示されている
- 【 】 投稿中の論文は引用されていない(掲載受理決定の論文は可)
- 【 】 引用文献欄の記載が、投稿要領に従っている

図・写真と解説

- 【 】 図は明瞭で、文字、数値、記号などがはっきりと読める(縮小しても明瞭である)
- 【 】 必要な場合を除いて、3次元パターングラフは使用されていない
- 【 】 図の番号とタイトル、解説が付記されている
- 【 】 カラー写真を掲載する際は、その旨が記述されている

表と解説

- 【 】 本文とは別に、表ごとに作成されている
- 【 】 表の上に番号とタイトル、下に脚注が記述されている
- 【 】 垂直の罫線は使用されていない

確認日時 _____ 年 月 日 著者サイン _____

編集後記

東京福祉大学・大学院紀要5巻2号を上梓いたします。

私は45年前に大学を卒業しましたが、卒業研究を指導していただいたC先生の一言が今も心に残っています。それは、『大学は研究と教育の場であり、多くの方々の援助のもとに可能となるのであるから、研究成果は必ず発表して評価を受けなさい』ということで、以後ずっと座右の銘としています。研究を続けるのは辛いときもありますが、論文として発表できたときの喜びは何事にも代えられません。

現在は多くの学術雑誌が発行されていますが、専門化が進んで、論文投稿の範囲が狭くなりがちです。一方、大学紀要では、文系から理系にわたる広い分野の研究成果が発表でき、掲載論文を通して大学の研究動態を発信するアカデミズムの顔といっても良いでしょう。

本学紀要の発刊が始まって丸5年となり、内容も次第に充実してきました。論文投稿いただいた先生方、査読の先生方に感謝いたします。これからも多くの論文投稿をお待ちしています。

(2015年3月 学会誌等編集専門部会 副部会長 栗原 久)

東京福祉大学・大学院 学会誌等編集専門部会

部 会 長	澤口 彰子
副 部 会 長	栗原 久 (編集責任者・業績リスト作成担当者)
部 員	植地 正文
	先崎 章
	平 仁
	小野 智一 (業績リスト作成担当者)
	山口 敬雄 (業績リスト作成担当者)
	新井 雅人 (業績リスト作成担当者)
	宮坂 慎司
	豊田 賀子
	須藤 武史 (事務担当)
	古澤 和泉 (事務担当)

東京福祉大学・大学院紀要

第5巻 第2号

編 集／東京福祉大学・大学院 学会誌等編集専門部会

発行所／東京福祉大学

東京福祉大学短期大学部

編集部／〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

TEL: 0270-20-3676 FAX: 0270-20-3696

2015年3月20日 印刷

E-mail: lib@ad.tokyo-fukushi.ac.jp

2015年3月25日 発行

印刷所／高山プレスシステムセンター株式会社

東京福祉大学・大学院紀要投稿要領

平成22年4月1日制定

平成26年4月1日改定

第1 投稿資格

紀要に投稿することができる者は、本学の教職員、専任教員の指導若しくは協力による共同研究者、本学学生・大学院生若しくは卒業・修了生、又は学会誌等編集専門部会が適当と認めたとする。

第2 著作権

紀要に掲載された論文等の著作権は、東京福祉大学・大学院に属する。

第3 投稿原稿

- (1) 原稿の内容は倫理的配慮が充分になされたものであること。
- (2) 人を対象とした実験・調査では、インフォームドコンセント、個人情報の管理がしっかりとされていること。
- (3) 原稿は和文または英文による原著論文を主とするが、他に総説、解説、症例報告、実験技術、資料、調査報告、学術講演要旨、書評等を掲載することもある。ただし、既刊のもの又は刊行物に掲載予定のものは除く。
- (4) 投稿に際しては、原稿、写真、図、表をUSB、CDR等の電子媒体に記録したものと、印字原稿1部、査読用コピー2部を提出する。
- (5) 印字原稿はA4版に文字サイズ10.5ポイントでテキスト形式で印字し、和文では40字×40行(1,600字)、英文では12ピッチ、ダブルスペースとする。
- (6) 原稿制限枚数(400字詰め原稿用紙換算)

総説	20～40枚
原著	20～40枚
短報・症例報告・実験技術	10～20枚
資料・調査等	10～40枚
研修報告等	2～5枚

写真・図・表は原則として総計5点以内とし、それぞれ原稿用紙(400字詰め)1枚として換算し、原稿制限枚数に加算される。
- (7) 和文による原稿は、現代仮名遣いにしたがって平仮名混じり、横書きで、正確に句読点(、。)をつける。
- (8) 写真、図、表の挿入箇所を、印字原稿中に朱書きで指定する。
- (9) 各分野で認められている省略記号以外は、述語の省略はしない。略語は用いても差し支えないが、初出の場合は省略せず()内に略語を明記する。
- (10) 度量衡は原則としてSI単位系を使用する。
- (11) 統計処理を行ったときは、統計検定法を明記する。

第4 原稿の形式

原稿の様式は次の通りとし、順に綴じる。

- (1) 表紙
 - ① 論文種別、表題、投稿者名、所属、所在地、別冊必要数および連絡先(電話・ファックス番号、E-メールアドレス)を明記する。
 - ② 表題、投稿者名、所属、所在地を英語にて記す。
なお、本学の英語表記はTokyo University and Graduate School of Social Welfareとする。
 - ③ ランニングタイトル(和文では20字以内、英文では40字以内)を記す。
 - ④ 別刷請求先:該当する著者名を記す(英文の場合は、Reprint request should be sent to Name of correspondent author)。

(2) 本論文

原稿の2枚目から、次のスタイルで記す(論文の種類によってはこの限りでない)。

① 和文論文の場合

和文抄録(400字以内)、日本語キーワード(3~6個)、緒言、研究対象と方法、結果、考察、結論、引用文献、英文抄録(300語以内)、英語キーワード(日本語キーワードに対応するもの)の見出しをつけ、これらの全てを組み入れて構成・記述する。

② 英文論文の場合

Abstract (300語以内)、Key words (3~6個)、Introduction, Materials and Methods, Results, Discussion, Conclusion, References, 和文抄録(400字以内)、日本語キーワード(Key wordsに対応するもの)の見出しをつけ、これらの全てを組み入れて構成・記述する。

(3) 引用文献

① 文献を引用する際は、引用箇所に著者名と発表年を示す。

(例) 澤口(2010)は; と報告されている(澤口, 2010)

和字の著者2名は「・」でつなぎ、3名以上は「ら」で略す。欧字の著者2名は「and」でつなぎ、3名以上は「et al.」で略す。

(例) 澤口・栗原(2010); 澤口ら(2010); (澤口・栗原, 2010); (澤口ら, 2010)

Sawaguchi and Kuribara (2010); Sawaguchi et al. (2010); (Sawaguchi and Kuribara, 2010); (Sawaguchi et al., 2010)

著者1名ないし2名で同一著者の同一発表年の文献の区別、および著者3名以上で筆頭著者が同一で同一発表年である文献の区別には、発表年の後ろに a, b, c をつける。

② 引用文献(References)欄は、著者のアルファベット順で並べ、同一筆頭者では、著者1名、同2名、同3名以上の順とし、著者2名では第2著者のアルファベット順、3名以上は発表年順に並べ、以下の要領に従って記す。著者が3名を超える場合は、3名まで記し、「ら」または「et al.」で略す。

雑誌: 著者(発表年):表題. 雑誌名*巻数, スタートページ-エンドページ.

*雑誌名は、和文誌は「医学中央雑誌掲載誌目録」、欧文誌は「Index Medicus」により略記。

(例) 澤口彰子・栗原 久(2010):健康に及ぼす環境の影響. 東京福祉大学・大学院紀要 **1**, 15-25.

Sawaguchi, A. and Kuribara, H. (2010): Stress-induced impairment of the mental health. Bull. Tokyo Univ. Sch. Social Welfare **1**, 27-35.

単著本: 著者(発表年):書名. 発行所, その所在都市名, スタートページ-エンドページ.

(例) 澤口彰子・栗原 久(2010):健康科学. 伊勢崎出版, 伊勢崎, pp100-150.

Sawaguchi, A. and Kuribara, H. (2010): Health Science. Isesaki Pub., Isesaki, pp100-150.

分担執筆: 著者(発表年):表題. In: 編者名(編), 書名. 発行所, 所在都市名, スタートページ-エンドページ.

(例) 澤口彰子(2010):血圧の調節. In:栗原 久(編), ストレスマネジメント. 池袋福祉出版, 東京, pp75-90.

Sawaguchi, A. (2010): Control of blood pressure. In: Kuribara, H. (ed.), Stress Management. Ikebukuro Welfare Pub., Tokyo, pp75-90.

(4) 写真・図・表とその説明

① 写真・図・表の掲載は通常左右7.0cmとする。ただし希望により拡大できる。

② 写真・図はそのまま写真製版できるよう鮮明なものとする。フロッピーディスクなどの電子媒体も添付する。

③ 写真・図・表の番号は掲載順にアラビア数字を使用し、説明に使用する言語は、和文論文では日本語か英語のどちらかに統一し、英文論文では英語とする。

(例) 写真1.(Photo. 1.)、 図1.(Fig. 1.)、 表1.(Table 1.)

第5 原稿の受付

- (1) 投稿者は、原稿、写真、図、表を3部(オリジナル1部、コピー2部)、およびデータを保存したUSBなどの電子媒体を「東京福祉大学・大学院学会誌等編集専門部会」へ直接又は書留郵便で提出する。
- (2) 学会誌等編集専門部会は、投稿者に受領書を発行する。
- (3) 原稿の締め切りは毎年6月末日、12月末日とする。

第6 原稿の取扱い

- (1) 原稿の取扱いは、原則として到着順とする。
- (2) 原稿の査読は、学会誌等編集専門部会委員長が2名以上の学内外の専門家に依頼する。
- (3) 査読の依頼を受諾した者は、原稿を受けとってから2週間以内に、査読結果を学会誌等編集専門部会長に連絡する。
- (4) 査読者の意見に従って、投稿者に原稿の修正を依頼することがある。
- (5) 掲載の採否は学会誌等編集専門部会で決定し、投稿者に通知する。

第7 校正

投稿者による校正は、原則として初校のみとし、指定期間内に返却すること。校正に際して、誤植以外の訂正は許されない。

第8 経費の負担

- (1) 投稿原稿にカラー写真を含み、カラー印刷を希望する場合は、その経費全額を投稿者が負担する。
- (2) 別冊作成の経費は投稿者負担とする。

第9 責任

紀要に発表した論文の内容に関し生じた問題の責任は投稿者が負う。

第10 その他

紀要の編集、その他細部は、学会誌等編集専門部会の協議により決定する。編集の関係で、編集部において原稿を一部変更することがある。

第11 個人情報の保護

- (1) 紀要の刊行に関し、個人情報の秘密やプライバシーの保護については十分に配慮する。
- (2) 個人のプライバシー侵害・名誉毀損の可能性が推測されるようなケースでは、姓名、名称のイニシャル記載は不可とする。
- (3) 個人情報の記載が同意、承諾された場合においても、第三者によって問題となることも想定されるので、注意を要する。

投稿申込書

東京福祉大学・大学院紀要学会誌等編集専門部会 殿

下記論文を貴誌に投稿いたします。この論文は他誌に未発表であり、また投稿中でもありません。採用された場合には、この論文の著作権を東京福祉大学に委託すること、また学術リポジトリに要旨及び全文を収載すること、同大学と契約を交わした Web 上に英文あるいは和文の要旨を収載することに同意いたします。なお、本論文の内容に関しては、著者（ら）が一切の責任を負います。

年 月 日

署名 _____ 印 _____

論文表題: _____

ランニングタイトル: _____

署名: 共著者全員の署名が必要です。欄が足りない場合はコピーして2枚提出してください。

① _____ 年 月 日 ② _____ 年 月 日

③ _____ 年 月 日 ④ _____ 年 月 日

⑤ _____ 年 月 日 ⑥ _____ 年 月 日

論文の種類: ○で囲んでください。

総説 原著 報告 その他(_____)

連絡先: 氏名 _____ (所属 _____)

〒 _____

TEL _____ FAX _____ MAIL _____

料金請求先: (上記と同じ場合は、署名のみで結構です)

氏名 _____ (所属 _____)

〒 _____

TEL _____ FAX _____ MAIL _____

学会誌等編集専門部会記入欄:

論文受付日 年 月 日

論文受理日 年 月 日

受付番号

東京福祉大学・大学院紀要への論文投稿の著者チェックリスト

タイトルページ

- 【 】 論文タイトルが書かれている
- 【 】 著者名とその所属・所在地がすべて書かれている
- 【 】 著者の所属が異なる場合、右肩に数字(*1)などを付記して区別されている
- 【 】 別冊請求先の著者名が書かれている
- 【 】 20字(英文では40レター)以内のランニングタイトルが書かれている

抄録ページ

- 【 】 400字(英文では300語)以内の抄録が、改行なしで書かれている
- 【 】 抄録の内容は、研究対象と方法、結果、結論が簡潔に示されている
- 【 】 3~6個以内のキーワードが書かれている
- 【 】 和文論文には、英文タイトル・抄録・キーワード、欧文論文には、和文タイトル・抄録・キーワードがある

本文

- 【 】 紀要投稿要領に従って、「緒言」、「研究対象と方法」、「結果」、「考察」、「結論」、「引用文献」の順に書かれている
- 【 】 語句を省略する場合は、すでに一般化されているものを除いて、最初に完全形を記し、括弧内に省略形を示している
- 【 】 機器、薬物、動物などを使用した場合、商品名、供給会社名、所在都市名が書かれている
- 【 】 図表の挿入箇所が、右余白に赤字で明示されている
- 【 】 未発表のデータを引用する場合は、本文中に明記している
(記載例:伊勢崎ほか, 未発表データ, Isesaki et al., unpublished data)

切り取り

引用文献

- 【 】 本文中での文献引用は、その箇所が適切で、投稿要領に従って示されている
- 【 】 投稿中の論文は引用されていない(掲載受理決定の論文は可)
- 【 】 引用文献欄の記載が、投稿要領に従っている

図・写真と解説

- 【 】 図は明瞭で、文字、数値、記号などがはっきりと読める(縮小しても明瞭である)
- 【 】 必要な場合を除いて、3次元パターングラフは使用されていない
- 【 】 図の番号とタイトル、解説が付記されている
- 【 】 カラー写真を掲載する際は、その旨が記述されている

表と解説

- 【 】 本文とは別に、表ごとに作成されている
- 【 】 表の上に番号とタイトル、下に脚注が記述されている
- 【 】 垂直の罫線は使用されていない

確認日時 _____ 年 月 日 著者サイン _____

編集後記

東京福祉大学・大学院紀要5巻2号を上梓いたします。

私は45年前に大学を卒業しましたが、卒業研究を指導していただいたC先生の一言が今も心に残っています。それは、『大学は研究と教育の場であり、多くの方々の援助のもとに可能となるのであるから、研究成果は必ず発表して評価を受けなさい』ということで、以後ずっと座右の銘としています。研究を続けるのは辛いときもありますが、論文として発表できたときの喜びは何事にも代えられません。

現在は多くの学術雑誌が発行されていますが、専門化が進んで、論文投稿の範囲が狭くなりがちです。一方、大学紀要では、文系から理系にわたる広い分野の研究成果が発表でき、掲載論文を通して大学の研究動態を発信するアカデミズムの顔といっても良いでしょう。

本学紀要の発刊が始まって丸5年となり、内容も次第に充実してきました。論文投稿いただいた先生方、査読の先生方に感謝いたします。これからも多くの論文投稿をお待ちしています。

(2015年3月 学会誌等編集専門部会 副部会長 栗原 久)

東京福祉大学・大学院 学会誌等編集専門部会

部 会 長	澤口 彰子
副 部 会 長	栗原 久 (編集責任者・業績リスト作成担当者)
部 員	植地 正文
	先崎 章
	平 仁
	小野 智一 (業績リスト作成担当者)
	山口 敬雄 (業績リスト作成担当者)
	新井 雅人 (業績リスト作成担当者)
	宮坂 慎司
	豊田 賀子
	須藤 武史 (事務担当)
	古澤 和泉 (事務担当)

東京福祉大学・大学院紀要

第5巻 第2号

編 集／東京福祉大学・大学院 学会誌等編集専門部会

発行所／東京福祉大学

東京福祉大学短期大学部

編集部／〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

TEL: 0270-20-3676 FAX: 0270-20-3696

2015年3月20日 印刷

E-mail: lib@ad.tokyo-fukushi.ac.jp

2015年3月25日 発行

印刷所／高山プレスシステムセンター株式会社